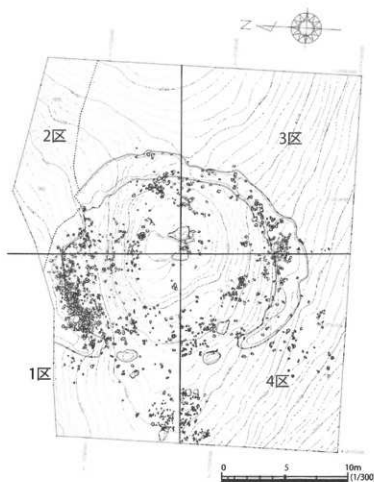


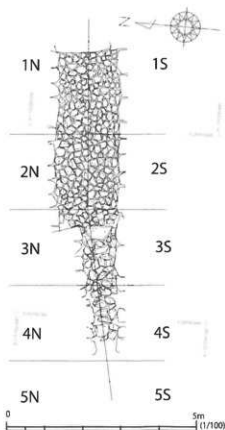
第4章 稲荷山1号墳

第1節 地区割の設定

稲荷山1号墳の地区割は、天井石と奥壁が調査開始前に露出していたため、石室中軸線を凡そではあるが推測できた。この結果、墳丘中心点を奥壁から2m西側で、石室中央の3石目天井石上に任意に設定し、石室中心線は、奥壁と両側壁を二分した $N-86^{\circ}40'-E$ の東西線を任意の中軸線とした。これにより墳丘の分割区画(墳丘地区名)は、石室入口の北西を1区として時計回りに4区までの、第9図に示した4分割とした。また、石室内の分割区画(石室内地区名)は、奥壁より2m毎に石室入口までの5分割に、さらにこれを石室中軸線で北Nと南Sに分割して第10図の10分割とした。なお、2区より西では横道が南に偏っているため、石室中軸を南に振って南北に2分して取上を行った。



第9図 稲荷山1号墳墳丘地区割図



第10図 稲荷山1号墳石室内地区割図

第2節 基本層序

1号墳の基本層序を、第1表に示す。

1層は表土層と攪乱層で、1-1層は腐植土である表土、1-2層は盗掘坑埋積土も含めた攪乱土である。

2層はシルト質細砂～シルト混ざり粗砂の溝堆積土層で、2-1～3層は墳丘の東側から北側に巡る周溝の埋没後に流れていた、新しい時期の溝跡の堆積土である。

3層は角礫を含むシルト質粗砂の墳丘攪乱土層・崩落土再堆積土層で、3-1層は傾斜の大きい北側での北側墳丘下部崩落土、3-2～4層は墳丘崩落土である。

4層は角礫を含むシルト質粗砂の周溝内堆積土である。

5層は角礫混ざりシルト質粗砂の列石・葦石構築土層で、2列の列石と列石間に敷かれた葦石を施工するための整地土である。

6層は角礫混ざりシルトの墳丘構築土層3で、一番外側の第3重石積の固定用の整地土である。

7層は角礫混ざりシルトの墳丘構築土層2で、外から二番目の第2重石積を埋めるのが7-1・2層の第2重石積埋土、7-3層は第2重石積構築土（整地土）である。

8層は角礫混ざり細砂質シルトの一番内側の墳丘構築土層1で、一番内側の第1重石積を埋める8-1～7層の第1重石積埋土、8-8層は第1重石積構築土（整地土）である。

9層は角礫を含む細砂質シルト～粗砂質シルトの石室構築土で、9-1層は天井構築土、9-2層は第5段目構築土、9-3層は第4段目構築土、9-4層は第3段目構築土、9-5層は第2段目構築土、9-6層は奥石2段目設置支持土、9-7層は第1段目構築土である。

10層は角礫混ざりシルト質粗砂の石室構築前整地土層であると共に羨道・前庭部の石蓋排水溝被覆土で、硬く締まった層は墳丘北側斜面と石室内西側床面の一部を成す。

11層は角礫・粗砂混ざりシルトの石蓋排水溝内の堆積物である。

12層はシルト質細砂～粗砂の石室内堆積土層3で、12-1～7層からなり石室が大きく壊された後の新しい時期（昭和15年以降）の羨道天井石抜取後墳丘崩落流入土である。

13層は3層からなり、上層よりシルト質粗砂から粗砂質シルトに変わる石室内堆積土層2である。

13-1層は角礫を多く含むシルト質粗砂からなる4次床面堆積土で、下層の13-2層との境である4次床面は奥壁側が少し下がる傾斜をもち、床面には大形の礫を平置きし、堆積土の締まりは極めて弱いものである。13-2層は角礫を含む粗砂質シルトからなる3次床面堆積土で、下層の13-3層と14-1層との境に3次床面を形成し、床面には大形の礫を平置きし、堆積土の締まりは極めて弱いものであった。ここからは、灰釉陶器の壺・碗、土師器の小皿・台付皿、鉄製の火打金などが出土した。13-3層は多量の炭化物（炭）と角礫を含む粗砂質シルトからなる2次床面堆積土で、14-1層の一部を下げて南側側壁（左壁）際の不定形半円形が2次床面で、ここでも大形の平石を置いて直径約0.36×0.72mの範囲に炭・焼土塊の集中する範囲がみられ最治跡とみられる。またここからは、縄の羽口が出土している。

14層はシルト分の多いシルト質細砂と礫を含む粗砂質シルトがブロック状に混ざる石室内堆積土

層1で、1次床面堆積土・敷石間堆積土である。本来複数層に分かれる可能性もあったが、明確に分層することが出来なかった。ここからは鉄製の大刀・刀子・轡・鑑・耳環、銅製の耳環、須恵器の坏身・坏蓋・高坏・提瓶、土師器の鉢、ガラス製の小玉・丸玉、碧玉製の勾玉・管玉、瑪瑙製の勾玉、水晶製の切子玉などが出土している。

15層は角礫を含むシルト質粗砂の閉塞石間堆積土で、候道や前庭の敷石間をも埋める綿まりの弱い土である。

20層はチャートの岩盤又はチャートの風化したシルトから成る地山層で、場所によっては岩盤が地殻変動により接触変成したためか、脈状に礫やシルトの帯がみられる。

石室並びに墳丘の構築土や堆積土を、第9図の分割線による東西の縦断面図と南北の横断面図を第11図に示す。なお、同じ周溝などの遺構であっても、その位置により堆積環境が異なるため土質や土色が異なるのは当然である。しかし、基本層序としては土質の大きな変化が無い場合は、同じ遺構である場合に限り、同じ構築時期又は堆積時期の堆積物として扱う。

土層No.	旧土層名	大分類	中分類	層 名	土 色	備 考
1-1	敷土層	敷土	敷土	築室・候道の基礎物を多量に含むシルト質粗砂～細砂	10YR5/1	位置により色調が異なる。
1-2	埋土層	埋土	埋土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	7.5YR5/1	埋土上は少なからず4層厚あり。
2-1		土間敷土上層堆積土	土間敷土	築室等の基礎物と角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	7.5YR5/1	築室基礎物の間土堆積土。
2-2	周溝第1層	周溝堆積土	周溝堆積土	角礫～φ100mm程度のシルト質粗砂	2.5YR/4	周溝堆積物の間土堆積土。
3-1		土間敷土上層堆積土下層	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	10YR5/6	周溝堆積物の間土堆積土。
3-2		土間敷土下層堆積土	土間敷土	角礫～φ200mm程度のシルト質粗砂	10YR7/4	埋土上・埋土下の周溝堆積土。
3-3	埋土第1層	埋土堆積土	埋土堆積土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	10YR6/4	埋土上・埋土下の周溝堆積土。
3-4				角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	2.5YR/4	埋土上・埋土下の周溝堆積土。
4-1		土間敷土内層堆積土	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	2.5YR/4	土間敷土内層～φ400mmの範囲に入り込む。
4-2	周溝第2層	周溝内層堆積土	周溝堆積土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	2.5YR/4	土間敷土内層～φ300mmの範囲に入り込む。
4-3		土間敷土内層堆積土	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂	3Y/2	土間敷土内層～φ300mmの範囲に入り込む。
5-1	第1層	第1層土	第1層土	角礫～φ500mm程度のシルト	10YR7/4	多量に流出。
6-1	外溝第1層	外溝堆積土	外溝堆積土	角礫～φ500mm程度のシルト	10YR7/4	石室直下部分。
7-1				角礫～φ100mm程度のシルト	10YR7/4	裏溝は水平、右側は外縁部堆積。
7-2	外溝第2層	外溝堆積土	外溝堆積土	砂礫混じりのシルト	2.5YR/4	裏溝は水平、左側は外縁部堆積。
7-3				角礫～φ500mm程度のシルト	7.5YR5/4	石室直下部分。
8-1				角礫～φ100mm程度の細砂質シルト	7.5YR7/4	外縁部堆積。
8-2				角礫～φ100mm程度の細砂質シルト	7.5YR7/4	外縁部堆積。
8-3				角礫～φ200mm程度の細砂質シルト	7.5YR7/4	外縁部堆積。
8-4				角礫～φ300mm程度の細砂質シルト	7.5YR7/4	外縁部堆積。
8-5	外溝第3層	外溝堆積土	外溝堆積土	角礫～φ300mm程度の細砂質シルト	7.5YR7/4	外縁部堆積。
8-6				角礫～φ200mm程度の細砂質シルト	7.5YR5/6	外縁部堆積。
8-7				角礫～φ300mm程度の細砂質シルト	7.5YR5/6	外縁部堆積。
8-8				角礫～φ300mm程度のシルト	7.5YR6/4	外縁部堆積。
8-9				角礫～φ100mm程度の細砂質シルト	7.5YR5/4	土室直下部分に付着するもので、周溝より浅く。
9-1		天井石間堆積土	天井石間堆積土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂～シルト	3.5YR/4	天井石の間隙。
9-2		第4層土間敷土	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂～中砂	2.5YR/2	水平堆積。
9-3		第4層土間敷土	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂～中砂	7.5YR5/4	外縁部堆積。
9-4	埋土第2層	埋土堆積土	埋土堆積土	角礫～φ300mm程度のシルト質粗砂～中砂	7.5YR7/4	外縁部堆積。
9-5				角礫～φ100mm程度のシルト	7.5YR6/4	外縁部堆積。
9-6				角礫～φ100mm程度のシルト	7.5YR6/4	外縁部堆積。
9-7				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第1層土間敷土に直上。
10-1	土間敷土	土間敷土	土間敷土	角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	外縁部堆積。
11-1	第5層土	第5層土	第5層土	角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-1				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-2				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-3				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-4				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-5				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-6				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-7				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-8				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-9				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-10				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-11				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-12				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-13				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-14				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-15				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-16				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-17				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-18				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-19				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-20				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-21				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-22				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-23				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-24				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-25				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-26				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-27				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-28				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-29				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-30				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-31				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-32				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-33				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-34				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-35				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-36				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-37				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-38				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-39				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-40				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-41				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-42				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-43				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-44				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-45				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-46				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-47				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-48				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-49				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-50				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-51				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-52				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-53				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-54				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-55				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-56				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-57				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-58				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-59				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-60				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-61				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-62				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-63				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-64				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-65				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-66				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-67				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-68				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-69				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-70				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-71				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-72				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-73				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-74				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-75				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-76				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-77				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-78				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-79				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-80				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-81				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-82				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-83				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-84				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-85				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-86				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-87				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-88				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-89				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。
12-90				角礫～φ300mm程度のシルト	10YR5/4	第5層土間敷土に直上。

第1表 稲荷山1号墳基本層序

第3節 遺 構

1. 墳丘及び周溝

稲荷山1号墳は、西側に開口する石片袖(式)(石室内から開口部〔入口〕を見て玄門の右側に石室が屈曲拡張する)の横穴式石室を主体部とし、西側開口部を除いた部分に溝を巡らせた、円形の墳丘をもつ円墳である。

1) 墳丘規模

墳丘規模は、「2.調査区の概要」でも記したように、痩せ尾根、特に北側の谷傾斜が大きく入り込む立地であるため、石室は尾根上にあるものの、北側と南側の周溝は谷斜面にあり、その平面形は安定した正円とはなっていない。しかし、古墳群中の他の古墳の形状がいずれも円墳であることから、円墳を指向していたとみられる。また、北側周溝については、溝の北側が既に壊されていたため、周溝幅や周溝の形状は明らかにできていない。

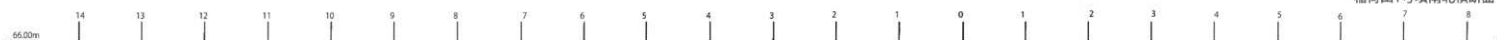
その墳丘規模は、第12図に示すように、南北は南側周溝墳丘肩部から北側周溝墳丘肩部までは最大で16.7mであるが、北側や南側墳丘裾の崩落による後退は著しいものがあるように思われる。東西は西側開口部に明確な石列が無く周溝も存在しないため、東側周溝墳丘肩部から石室開口部に残存する石敷際までとすると約13.0mである。しかし、石積の円弧などをみると西側開口部石敷際よりもさらに1～1.1m西側に広い14.0～14.1mとみることができる。周溝を含めた全長は、南北が北側周溝の全てを残していないため残存長で20.5m、北側周溝幅を南側周溝幅と同じ2.5mと仮定すると約21.7mに復元される。東西は石室入口である西側開口部に周溝が存在しないが石敷際までとすると、東西約15.3mである。先の石積の円弧からみると16.3～16.4mとなり、西側開口部前には広い平場が存在することとなる。この様に、石室は尾根筋上にあるが、墳丘はその急激に落ちる北側の谷とやや緩やかに落ちる南側の谷に規制されて、南北に長い楕円形となっている。

この南北に長い楕円形墳丘の残存高は、先にも記したように露出する天井石の最高所で標高65.2m、石室入口の西側開口部が標高63.0m余りであるから約2.2mである。しかし、最も低い北側周溝墳丘肩部では標高61.0m余りであるから比高は約4.2m、南側周溝墳丘肩部では標高62.2m余りであるから比高は約3.0mとなる。築造時には、この天井石の上部に少なくとも1～2mの盛土層が存在し、墳頂部が形作られたと想像されるので、西側開口部との比高は3～4m余りであったと推測される。

2) 墳丘構造

表土層(1層)を除去した段階で、第13図の様に、多数の石が墳丘上や周溝内に散乱していることが明らかとなった。当初この石の多さから、これらの石を墓石かと誤認したが、調査を進める段階でその多くが墳丘構築に伴う石積や石敷の転石であることが判明した。

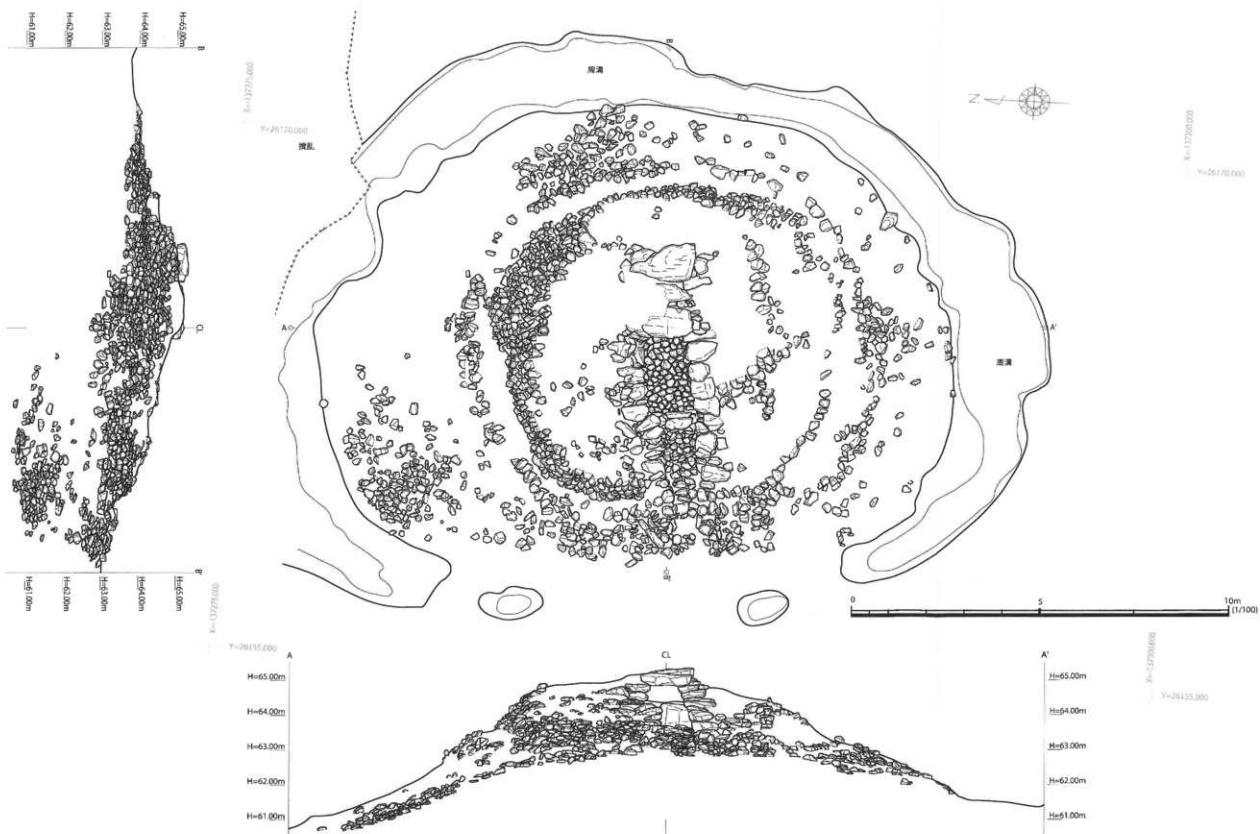
墳丘構造は、石室を取り囲むように石室外側に墳丘内に埋没する複数の石積をもつものである。



66.00m

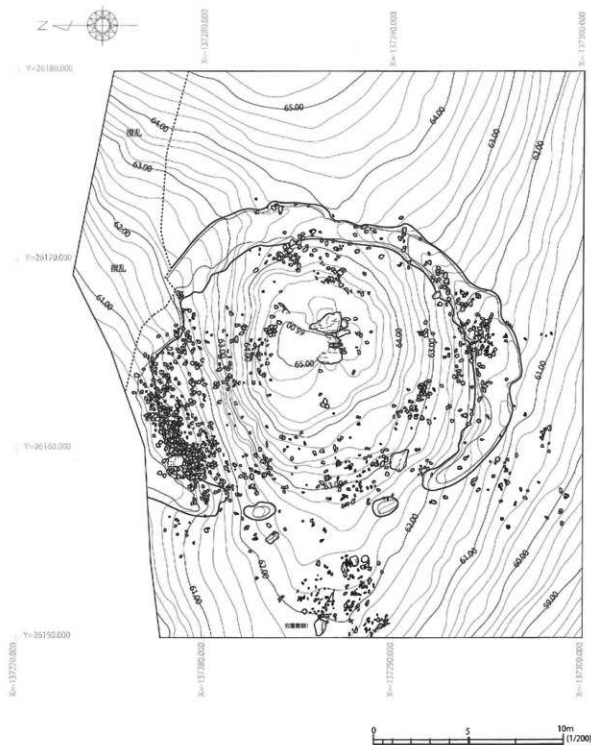
[illegible]

31 · 32



第12図 稻荷山1号墳立面平面図

この墳丘構造は、既に調査が行われた同じ稲荷山古墳群中の3号墳と極めてよく似た構造であるといえる。これらの石積は、「外護列石」、「埋め殺しの敷石」、「擁石」、「墳丘内石列」、「墳丘内埋没石積施設」などと呼ばれてきたものである。ここでは、これらの石積を、その構造が石列ではなく高石垣状に一巡する石積であること、天井石上面の盛土が残存していないため完全に半球状の盛土内に埋没していたのか、先端を欠く円錐状に露出していたものかも明らかでなく用語として適切かどうかは明らかではないが、仮にここでは「墳丘内石積」と呼称する。1号墳ではこの墳丘内石積が、



第13図 稲荷山1号墳表土層除去後平面図

石室の外側に3重に設けられ、さらに周溝墳丘肩部と3重目の墳丘内石積との間に2重の一段積みの石列を、さらにその石列間を埋める石敷を検出した。

墳丘内石積の構築は、石室側から周溝側に向かって重層的に構築されており、構築順に番号を付して内側より「第1重石積」、「第2重石積」、「第3重石積」と呼ぶ。

2重にある一段積の石列は、その構築順序から周溝肩部の周縁列石を「第1重列石」とし、周溝肩部と第3重石積の間を「第2重列石」と呼ぶ。これらの石積は、「円周状石列」、「護石」、「外護列石」、「外護石」、「土留列石」、「石垣」、「内護石」などと呼ばれてきたものである。

周溝肩部より第3重目の墳丘内石積間を葺石状に埋める石敷は、丁寧に面を揃え敷き並べた「葺石」とは異なり、やや乱雑に組み置かれた雰囲気のものであることから、「葺石状石敷」と呼ぶ。

これらの墳丘内石積、列石、葺石状石敷に使用された石は、全て稲荷山を始めとする隣接する山々で産する、風化したチャートを用いており、他の石は用いていない。

(1) 第1重石積

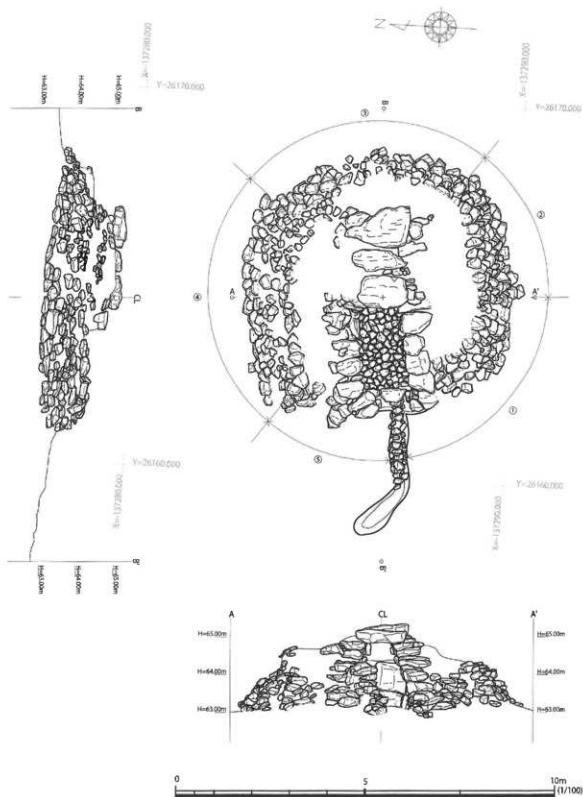
第1重石積は、横穴式石室の構築と極めて密接な関係をもつ墳丘内石積で、石室埋土全体を覆う完全な1次墳丘であり、他の第2重石積や第3重石積が墳丘の構築に係わるのとは基本的に異なる。

その基底部の規模は、第14図の最大値で東西約7.7m、南北約7.2mであるが、墳丘と同じ円形ではなく、全体としては西側開口部の直線的な石積に、東側よりU字形の石積を築き接合閉塞した様な形状を示す。残存高は最大約1.8m、10段であるが、本来第1重石積が石室側面全体を覆うものであり、現状では天井石より高く残る石積はないが、最も高く残る所が標高64.8mであるから、おそらく天井石の最上部の標高65.2m付近か、墳丘頂部近くまで構築されていたものと推察される。

石積の残存状況は、石積の様相が異なる5区間①～⑤区の内、北側石積④区で最大約1.8m、10段が残存しているが、東側石積③区では最大約0.76m、6段が残存し、南側石積②区では最大約1.3m、11段が残る。

第1重石積の盛土は、石室構築に係わるものであるため別頁で詳述するが、下記のように行われている。石室の掘方を岩盤に穿ち、基底部を平滑にし、不足する部分には10～1層で盛上を行う。基底石を含め、奥壁1段目と同じ高さまで側壁2～4段の石積を行う。この第1段石積は、多量の裏込め石と共に9～7層にて固定される。さらに第2段石積が9～5層で、第3段石積が9～3・4層で斜めに盛土され、各層の墳丘裾には石を貼り付け盛土表面の固定を行っている。ここから上部は盛土の角度を急に立ち上げるが、これは北側石積④区では9～3層からみられる。側壁最上部の石が9～2層で固定され、天井石が側壁上部に載せられると、天井石を覆うように9～1層にて固定される。これらの盛土の表面を覆うのが第1重石積である。なお、北側石積④区は、9層各層が石の裏側隙間に入り込んでいるのに対し、他の石積区間では9層の入り込みが余り見られず、その施工方法が異なる。これは北側石積④区が各層を積むたびに帯状に積まれ、常に盛土と共に盛土斜面を固定していた可能性があるのに対し、他の石積区間は何かの型枠による9層の積み上げ終了後に、石積が施工されたことを示すものであると考えられる。

墳丘内石積に使用した石の大きさは、最も大きなものは開口部南側①区の長辺0.74m×短辺0.43m×厚さ0.36mと、北側石積④区の長辺0.7m×短辺0.38m×厚さ0.33mであったが、平均的に



第14图 稻荷山1号墳第1重石積立面平面图

は長辺 $0.3 \sim 0.4 \text{ m} \times$ 短辺 $0.2 \sim 0.3 \text{ m} \times$ 厚さ $0.1 \sim 0.3 \text{ m}$ 余りのものを多用している。

石積の傾斜角度は、石積の様相が異なる5区間(①～⑤区)の内、開口部南側①区の一部と開口部北側⑤区では $50 \sim 57^\circ$ であるが、南側石積②区では $45 \sim 50^\circ$ 、北側石積④区では $35 \sim 40^\circ$ と緩傾斜で、東側石積③区では $65 \sim 74^\circ$ と急傾斜である。また、残存部分が少ないが、北側石積④区では第11図南北横断面図からも明らかなように、最上段の側壁を積み上げた段階で、傾斜角度が盛土も石積も急に真っ直ぐに近い 80° 余りとなっている。恐らく玄室の天井石を側壁最上部に載せてから、角度を変えてこの急な石積が天井石上部又は墳丘頂部近くまで積まれたものと思われる。

残存する石積段数は5～11段である。その積み方の切り合いなどから、少なくとも1号墳の第1重石積は5区間(①～⑤区)で石積の様相が異なる。これらの異なる石積の接合地点(①②、②③、③④、④⑤の境)における基底石のずれや石の大きさの違いなどの観察から、東側石積③区と開口部北側石積⑤区が最初に積まれ、次に両側壁である北側石積④区と南側石積②区が順次積み、そして開口部南側石積①区が最後に積まれたものと判断される。これは、東側石積③区と開口部北側石積⑤区が、土圧や石の圧力を側壁にかけて互いに挟み込み石室全体を安定させるために、玄門背後と石室奥壁背後の盛土と石積が早い段階で必要であったためと考えられる。北側石積④区は盛土と同時に積み上げが始まり、南側石積②区は、南北横断面図から最上段の側壁を積んだ後に石積が開始されたと考えられる。開口部南側①区の石積が遅かったのは、玄室奥から天井石を架す作業における石の進入路として、玄門上の天井石が高架される最後まで使用され、結果として他の石積区間より石積が遅れた結果ではないかと見られる。この開口部南側①区から西西南西への $17 \sim 20^\circ$ の緩い傾斜スロープの角度が、天井石を最も楽に搬入できたからに他ならないと考えられる。

(2) 第2重石積

第2重石積は、墳丘の構築に係わる墳丘内石積で、第1重石積と第3重石積の間に埋没する。

基底部の規模は、第15図の最大値で東西約 9.2 m 、南北約 9.4 m と円形に近いが、第1重石積と同じように、全体としては西側開口部の直線的な石積に、東側より半円形の石積を築き接合閉塞した様な形状を呈す。

石積の残存状況は、石積の様相が異なる5区間①～⑤区の内、北側石積④区で最大約 2.3 m 、17段の残存高があり、東側石積③区でも最大約 1.3 m の残存高があつて比較的良く残っているが、南側石積②区は1～2段が残るのみである。

第2重石積の盛土は、水平に盛土をしていくのではなく、第1重石積側を埋めるように、墳丘側に高く斜めに8～8層を盛土することから始まる。この盛土にあたっては、北側石積④区で2段積み、他の①～③⑤区では1段積みの列石を廻らせた後に施工しているようである。さらに東側石積③区では、この斜めの8～8層盛土上に石敷に近い石の押さえを行い、奥壁側の補強としている。これより上部では、8～8層同様に墳丘側に高い盛土を、8～7～4層までの4層で行うことにより側壁上部の高さにほぼ達している。この8～4層より上部の盛土を残りの良い第11図の北側石積④区断面で見ると、8～4層で墳丘側にやや小さく段を設けて、外面の傾斜角度を大きくして上部を平らとし、さらに上層の8～3層は $0.06 \sim 0.13 \text{ m}$ 厚の水平な盛土としており、この段階で明らかに盛土の施工方法に変化がみられる。これが墳丘形状の単に変換点を示すものであるのか、あ

るいは第1重石積と第2重石積の盛土作業を一端この同じ側壁上面の高さで中断させ、広い仮の墳頂上で天井石の高架を行った後に、盛土作業を再開させたことを示すものかは明らかでない。また、第2重石積においては、第1重石積とは異なり全ての石積区間において、何かの型枠による8層の積み上げ終了後に、石積が施工されたことが観察される。

なお、北側石積④区では8～5層盛土以後で石積施工前に、何らかの問題（墳丘に亀裂や孕み等の現象）が生じたためか、北側盛土斜面のさらに外側に8～9層盛土を付加して墳丘の補強と思われる施工が観察される。この補強とも取れる盛土の付加は、2段の石積上に8～9層のり、上位の3段目石積が2段目石積よりも外方に出たオーバーハング状態となっている。この様な石積は、一般的な施工では考えられない。この点を理解する最も合理的な考えは、8～8層盛土後に2段の列石状石積を行い、第3重石積との間の7～3層を盛土後に3～4段目の石積を行い、8～7～4層の盛土終了後に8～9層を付加し、その後全ての石積を施工した右島(1988・2003)の「裏込め被覆」に似た構築法を考える方が自然である。本来の「裏込め被覆」は、石室の壁体背後の補強として、裏込めが崩壊しないように、その背後の盛土や掘方に石垣状に石を積んだものである。ここでは第2重石積下段に、「裏込め被覆」に似た構築法が見られるもので、その使い方は異なるが、その使用法を知る者が構築したことを考えると注意される。しかし、現地調査ではこの疑問に十分な検討を行わずに進めてしまったため、可能性を指摘するに留めたい。

墳丘内石積に使用した石の大きさは、最も大きなものは北側石積④区の長辺0.49 m×短辺0.36 m×厚さ0.28 mと、東側石積③区中央の石（第2重石積の石室中軸線上奥壁背後の基底的な石）の長辺0.56 m×短辺0.37 m×厚さ0.47 mであったが、平均的には長辺0.25～0.35 m×短辺0.1～0.2 m×厚さ0.1～0.2 m余りの、第1重石積使用の石よりも一回り小さなものを多用している。

石積の傾斜角度は、石積の様相が異なる5区間（①～⑤区）の内、開口部南側石積①区では50～57°、南側石積②区では65～76°、北側石積④区では43～67°と測定位置でばらつきがあり、東側石積③区では64～68°と急傾斜で、開口部北側⑤区では54～57°と、第1重石積よりも急傾斜である。また、第1重石積同様に残存部分が少ないが、北側石積④区では盛土8～4層よりも上段の外面傾斜角度が真っ直ぐに近い79°余りに、石積が59°余りとなっており、第1重石積の80°と共に墳丘の形状を規制していたものと見られる。また、第2重石積の盛土上部は、天井石上部又は墳丘頂部近くまで積まれたものと思われる。

残存する石積段数は、1～17段である。その積み方の切り合いなどから、第1重石積とは異なる5区間（①～⑤区）で石積の様相が異なる。南側石積②区と開口部南側①区の石積の残りが極めて悪い点、正確でない点もあるが、これらの異なる石積の接合地点（①②、②③、③④、④⑤の境）における基底石のずれや石の大きさの違いなどの観察から、第1重石積とは異なり、北側石積④区とおそらく南側石積②区が最初に積まれ、次に奥壁の東側石積③区と玄門のある開口部北側石積⑤区が積まれたものと考えられた。開口部南側石積①区は1段しか石積が残っていないため詳細は明らかでないが、最後に積まれた可能性が高いと推定される。北側石積④区は、付加された盛土への石積があって複雑であるが、基本的には石の側面や端面小口を揃えた横積みで、北側石積④区中央部の施工を分割するような一列の縦積みより北西側は整然と積まれ、北東側は乱雑な積み方と

なっている。残りの悪い南側石積②区でも端面小口を描えた横積みが基底石として残っており、北側石積④区と同様の施工とみられる。これに対し東側石積③区は石の側面や端面を描えながらの縦積みで、南側石積②区と北側石積④区の空間を埋めるように積まれている。開口部北側⑤区は、基本的には横積みであるが、積み方が乱雑で、北側石積④区東側と類似する。

なお、東側石積③区と北側石積④区の境には、幅 1.1 m、深さ 0.19 m、断面半円形の石室内から北東への溝状の段差部分がみられる。これを石室内の排水に係わるものとするのは、その高さからして考えられないため、どのような性格の遺構かは明らかでない。

(3) 第3重石積

第3重石積も第2重石積と同様に、墳丘の構築に係わる墳丘内石積であるが、3重目の石積は盛土内に全てが埋没しておらず、石積外面の大部分は墳丘外に露出していた可能性が高く、墳丘内石積の用語は適さない。

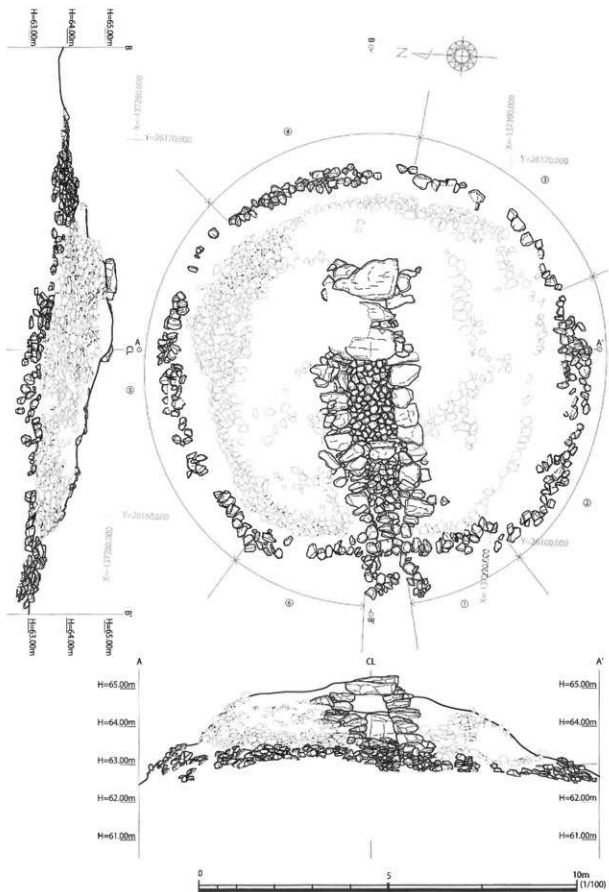
基底部の規模は、第16図の最大値で東西約 10.3 m、南北約 11.4 m とやや南北に長い楕円形で、第1・2重石積よりも西側開口部の直線的な石積はさらに直線的となり、東側よりU字形の石積を築き接合閉塞した形状を呈す。

石積の残存状況は、極めて悪い。石積の様相が異なる6区間①～⑥区の内、北壁石積⑤区では最大約 0.6 m で6段の残存高があるが、南側石積②区では最大約 0.4 m で4段、奥壁の東側石積④区では最大約 0.5 m で4段、開口部南側①区と開口部北側⑥区では2段の残存高である。全体には1～3段が残るが、1段も残存していないところも多くみられる。

第3重石積の盛土は、北側石積⑤区では第2重石積を埋めるように、墳丘側に斜めに7～3層を盛土し、さらに7～2層、7～1層と順次上に盛土する。奥壁の東側石積④区では、第2重石積との間が狭いためか、斜めではなく水平に盛土を行っている。この7層盛土は、北側石積⑤区では高さが約 2.1 m 残っており、第2重石積の盛土層である8～3層の高さに等しい標高 64.5 m の側壁上部の高さまで、残存している。このことは、第3重石積も現状での残存状況は悪いが、第1・2重石積と同じ墳頂部までか、少なくとも側壁最上部までは盛土が行われ、石積が存在した可能性が極めて高いことを示すものといえる。

使用した石の大きさは、最も大きなものは東側石積③区と④区境の長辺 0.52 m × 短辺 0.38 m × 厚さ 0.37 m と、南側石積②区と開口部南側①区境の長辺 0.47 m × 短辺 0.29 m × 厚さ 0.31 m であったが、平均的には長辺 0.3 ～ 0.4 m × 短辺 0.2 ～ 0.3 m × 厚さ 0.1 ～ 0.2 m 余りの第1重石積使用の石よりも小さく、第2重石積よりも大きなものを多用している。

石積の傾斜角度は、石積の様相が異なる6区間①～⑥区の内、石積の残りが悪い例でしかないが、開口部南側石積①区では 78°、南側石積②区では 65°、北側石積⑤区では 67°、東側石積④区では 76 ～ 80° と急傾斜で、第2重石積に近い急傾斜である。各石積の外面傾斜角度は、第2重石積の下段が 43 ～ 68° で上段が 79° 余りとなっており、第1重石積の下段が 35 ～ 74° で上段が 80° と、第3重石積でも南側石積②区と北側石積⑤区では 65 ～ 67°、開口部南側石積①区と東側石積④区では 78 ～ 80° の傾斜で石積されており、墳丘の外形角度にも統一した方向性を持たせていたことが確認される。



第16图 稻荷山1号墳第3重石積立面平面图

残存する石積段数は、1～6段である。その積み方の切り合いなどから、第1・2重石積とは異なる6区間(①～⑥区)で石積の様相が変化している。石積の残りが極めて悪いため、正確でない点もあるが、これらの異なる石積の接合地点(①②、②③、③④、④⑤、⑤⑥の境)における基底石のずれや石の大きさの違いなどの観察から、北側石積⑤区とおそらく南側石積②区と③区が最初に積まれ、次に奥壁の東側石積④区と玄門のある開口部北側石積⑥区が積まれたものと考えられた。

開口部南側石積①区と開口部北側石積⑥区の間はほぼ直線的な石積で、第2重石積裾端から0.5～0.7m前面に開口部幅を含めて長さ6.8m(南に2.8m、北に3.0m)と想定される。小口面を揃えた、奥に長い積み方で、現状では1～2段が残存する。この間の石積は極めて残りが悪いが、第3重石積外面が露出していたと考え、開口部正面でもあり最も精緻な積み方が施されていたと思われる。隣接する地区との切り合い関係は、その交点部分がどちらも残されていないため明確でない。南側石積②区は、第2重石積裾端から0.5～1.2m前面に4段余りの石積が残されている。第2重石積では東西を除き直径が8.5～9.4mであったが、第3重石積では10.0～11.4mの直径を保っていて、むしろ円形に近づいているように思われる。南側石積③区は、第2重石積裾端から0.4～0.6m前面に1段を残す。この区間の石は、他の区間よりも大きく長辺0.4～0.5m×短辺0.2～0.4m×厚さ0.2～0.4mの石が、長側面を並べて5石余り使われている。南側石積④区は、小振りの石を第2重石積裾端から0.5～0.7m前面に最大4段余り残し、比較的2重石積や葺石状敷と共に残存状態がよい。北側石積⑤区は、9.8mの延長で第2重石積裾端から0.5～1.2m前面に最大6段が残る。南側石積③区と同じ、大きめの石を小口積みで使用している。

(4) 第1重列石

2重にある一段積み目の石列の内、周溝肩部の石列を第1重列石とする。

規模は、第12図の様に石の残存状態が極めて悪いため明確にしたいが、周溝肩部を全周していたとすると最大で南北約16.7m、東西は西側開口部に明確な石列が無く周溝も存在しないため、東側周溝墳丘肩部から石室開口部に現存する石敷際までとすると約13.0mであるが、さらに1.0～1.2m西側に広がった可能性も残している。その形状は、墳丘と同じ南北に長い楕円形である。ただ、現状では開口部に周溝は見られず、葺石状敷も周溝の存在するところまでしか確認できないため、列石がはたしてどこまで存在したのかは明らかでない。

第1重列石の残存状況は、北西側の1区では2石のみで、北東側の2区では3石が、南東側の3区では7石が、南西側の4区では4石が残るのみである。この内4区では、3石が連なって検出されている。

第1重列石の施工は、3・4区では第3重石積までの1.4～2.1m幅の間を、厚さ0.1～0.2m余りの5～1層で整地した後に、周溝肩部に石の長辺横方向を、或いは上面平に並べ連ねている。ところが1・2区では、1.5～3.9m幅の間に整地層は全く見られない。3・4区の傾斜が13°余りであるのに対し、1・2区の傾斜が20～30°と大きいこともあり、流失したとも考えられる。

使用した石の大きさは、最も大きなものは3区の長辺0.69m×短辺0.41m×厚さ0.35mであるが、平均的には長辺0.2～0.3m×短辺0.1～0.2m×厚さ0.1～0.2m余りのものを用いている。

(5) 第2重列石

周溝肩部の第1重列石と第3重石積の間の石列を、第2重列石とする。

規模は、第12図の様に第1重列石同様に石の残存状態が極めて悪いので明瞭にしたい。第1重列石と第3重石積の中間を全周していたとすると、最大で南北約14.3m、東西は第1重列石同様に西側開口部に明確な石列が無く周溝も存在しないため、東側の第2重列石から石室開口部に残存する石敷際までとすると約12.6mであるが、さらに西側に広がった可能性も残している。形状は、墳丘と同じ南北に長い楕円形である。ただ、現状では開口部に周溝は見られず、葺石状敷石も周溝の存在するところまでしか確認できないため、第1重列石同様に列石がはたしてどこまで存在したのかは明らかでない。

第2重列石の残存状況は、北西側の1区では13石で、北東側の2区では12石が、南東側の3区では10石が、南西側の4区では4石が残る。この内1区では10石余りが、2区でも10石余りが連なって検出されている。

第2重列石の施工は、3・4区では第3重石積から0.5～0.7m周溝側に離れた、5～1層で整地した上に、石の上面平なものを並べていたものと見られる。1区では第3重石積から1.3～2.1m周溝側に、2区では1.1～1.3m周溝側に、石を並べている。整地土は2区では見られるが、1区では残存していない。

使用した石の大きさは、最も大きなものは1区の長辺0.42m×短辺0.38m×厚さ0.25mであるが、平均的には長辺0.2～0.3m×短辺0.1～0.2m×厚さ0.1～0.2m余りのものを用いている。

(6) 葺石状石敷

周溝肩部の第1重列石と第2重列石の間と、第2重列石と第3重石積の間を、埋めるように置かれた石敷である。墳丘裾部の保護、崩壊を防止することを目的とする石敷と考えられる。

残存状況が比較的良好なのは、1区の一部と2区の一部である。1区でも2区でもその施工は、石の面を揃えて敷き並べたものではなく、石列の間を埋めただけで、これといった調整は全く行っていない。このため、石の先端が上を向いているものやあらゆる方向を向いているため、極めて歩きづらい。この様にこれらの石の使い方は、一般的な古墳の葺石の様に葺き並べたものとは異なるものであり、さらに石敷や石貼りとも大きく異なるものである。

使用した石の大きさは、最も大きなものは1区の長辺0.36m×短辺0.23m×厚さ0.2mであるが、平均的には長辺0.2～0.3m×短辺0.1～0.2m×厚さ0.1～0.2m余りのものを用いている。1m角内に使用した石の量は、1区では32～38個、2区では31～33個であった。

この葺石状石敷の状況から、第1重列石と第3重石積の間に盛土(封土)の存在があるのか無いのか、葺石状石敷は埋まっていたのかそうでなかったのか、第3重石積が墳丘内石積であったのかそうでなかったのかの問題とも相まって慎重に検証しなければならない問題ではあるが、明確な盛土(封土)を示す資料を確認することはできなかった。しかし、石室羨道入口右側壁の第3重石積の外側でも残存高は最大0.4mの高さがあり、葺石状石敷上面の状況からも、第3重石積全てが盛土(封土)内であったとはいえないが、第3重石積裾部から第1重石列までの間にある、第2重石

列や葎石状石敷上には何らかの盛土(封土)が施されていた可能性が高いと考えられる。

(7) 周溝

墳丘の裾には、周溝が存在する。

周溝は一巡しておらず、開口部である西側にはみられない。当初から存在しなかったのかは確証がないが、東側では確実に存在を確認できているので、当初から無かった可能性の方が高い。また、調査着手時には、既に北側周溝の大部分が壊され、残されていなかった。

規模は、先の墳丘規模で示したように、南北が残存長で20.5 m、残されていない北側周溝幅を南側周溝幅と同じ2.5 mと仮定すると、21.7 m余りに復元される。東西は石室入口である西側開口部に周溝が存在しないが、石敷際までとすると東西約15.3 mとなる。しかし、詳細に眺めてみると、墳丘肩部よりも周溝外形線は乱れていて、特に3区・4区境の谷部では顕著である。周溝幅は、最も幅の狭い所で尾根上の東側周溝3区で1.0 m、幅の広い所で3区・4区境の谷部南側周溝で2.5 m、1区の谷部に向かう北側周溝で2.6 mであるが、残存していれば1区・2区境の谷部北側周溝では、3 m以上に拡張していた可能性が高い。これらは、谷部の周溝であったから生じた現象ではないかと思われる。この様に考えると、東側周溝3区の長さ4 m余りの幅1.0 mの狭い箇所は作画的であるが、他の部分では1区が1.5 m、2区が1.8～2.1 m、3区が1.5～1.7 m、4区が1.3～2.1 mで、1.5～1.7 m余りが本来の周溝幅に近いものと思われる。また、開口部の周溝の存在については、1区と4区に周溝の残存部分が僅かに残っているが、尾根筋背後の東側周溝では確実に0.2 m余りの掘り込みを行っており、開口部の延長2 m余りは周溝が一巡していなかったか、極めて浅かったと考えられる。周溝の深さは、斜面地であり数値を上げにくい、周溝外形側で当初から0.1～0.3 m余りの深さであったと思われる。

周溝の堆積物については、基本的には周溝内堆積土である4-1～3層の、角礫を含むシルト質粗砂層に石積や石敷の垂角礫($\phi \sim 0.4$ m)が入り込むものである。この周溝の上に堆積した墳丘崩落土や墳丘崩落上の再堆積土といった3-1～4層を切って、ほぼ同じ位置に東側周溝から北側周溝にかけて掘られた一条の溝が見られる。規模は幅が約1.15～1.3 m、深さが0.17～0.3 m余りで、溝堆積土である2-1～3層の、角礫を含むシルト混ざり細砂層にて堆積する。後者の溝については、山の斜面の雨水を、北側の耕作地に集める目的で掘られたようで、周溝とは直接係わりはない。

1号墳の周溝幅の乱れについては、墳丘裾や周溝肩部までの企画性よりも、大きいように思われる。周溝の掘削土は、一般的に墳丘盛土の用材でもある。このため、不自然な形状や石室背後の手抜きを時折見掛けることがあるが、これらは周溝が古墳の外部施設として二義的なものであることを示すものである。

3) 墳丘・周溝出土の遺物

表土層1層及び墳丘崩落土層3-1～4層からは、多数の遺物が出土している。第17図と第18図、さらに第19図と第20図により示す。

第17図は出土遺物の地点取上げ図であるが、この内の墳丘頂部に見える石室内出土遺物を除くと、幾つかの集中地点をあげることができる。北側1区では3Dグリットの北側周溝裾部、南側4

区1Cグリットの南西側斜面の周溝から墳丘外斜面にかけてが最も濃い出土遺物散布地となっている。次に西側2区・3区2D・2Eグリットの玄室背後の斜面から西側周溝にかけてと、南側3区・4区1Dグリットの南側墳丘斜面から南側周溝にかけての2カ所が、やや濃い出土遺物散布地となっている。

以下には、墳丘出土の土器製品(以下、「土器」という。等)の二時期分けと、その接合関係から明らかとなった点について記述する。

(1) 古墳時代の遺物分布状況

〔墳丘南西側斜面〕

特に遺物散布が濃い墳丘南西側斜面と周溝、墳丘外斜面にかけては、第17図の平面分布図からも明らかのように、掘り出して斜面に移動させられた天井石よりも高い位置からの出土はほとんどなく、その散布範囲は南南西への最大長12m×最大幅4mで、落差は標高58.8～62.5m付近の3.7mに及ぶもので、遺物出土密度が高い範囲は、大部分が天井石から長さ5m×幅1mで落差約2mの範囲に集中している。また、第18図の垂直分布図からは、表土層の表面でも20層地山層直上からでもなく、中間に浮いたような出土位置であることが観察され、これらが墳丘築造当初の遺物群でないことは明らかである。

出土している遺物は、第19図に見られるように、天井石下で出土した110滑石製紡錘車1点以外は、全て須恵器である。図化できた須恵器には、051～055・057環蓋、059～064環身、065・066有蓋短脚高環の蓋、067～070短脚無蓋高環の脚部、071・072無蓋高環の環部などがある。この内、最も広範囲に分布するのは070短脚無蓋高環の脚部で、067・069短脚無蓋高環の脚部や065有蓋短脚高環の蓋も広い範囲に分布している。

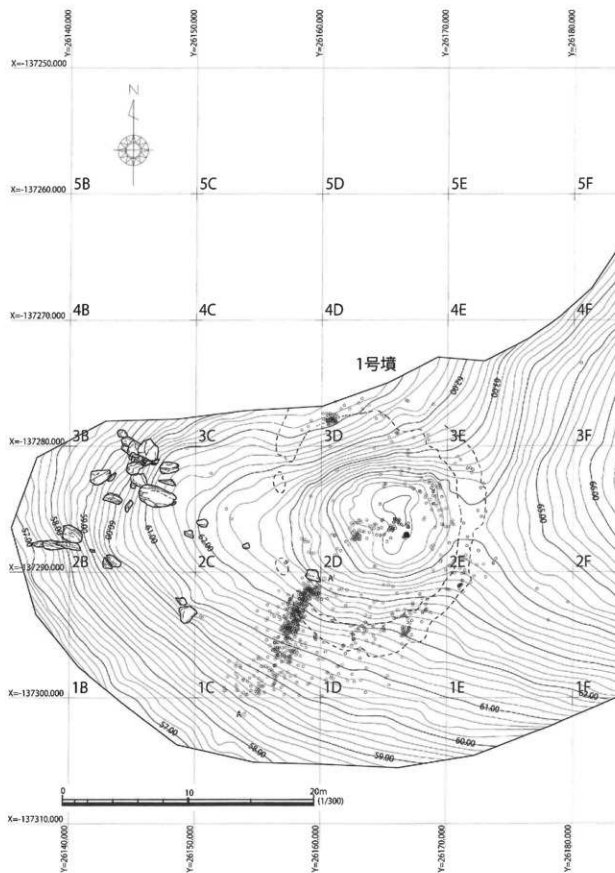
この南西側斜面の周溝から墳丘外斜面は、2次床面で鍛冶を行うにあたり、石室内の1次床面の敷石床面までを掘り込んだ際の掘削土を捨てた場所と考えている。おそらく、掘り出して斜面に移動させた天井石の上から、単純に同じ方向に排土した結果であったと思われる。しかし、これらの遺物群は、土器は小片が多く、金属製品や紡錘車以外の玉類が含まれないなどの疑問も残っていて、全ての遺物が1次床面の遺物であるという確証は無い。僅かではあるが石室内の須恵器003環蓋との接合土器もあるが、調査された3・4号墳の祭祀儀礼の位置とも等しく、墓前儀礼や追葬時の石室内整理に伴う遺物群であると考えられることもできる。

〔墳丘南側斜面〕

上述の墳丘南西側斜面の分布とは少し異なる散布を示すものが、第19図の墳丘南側斜面において分布を示す073須恵器提瓶と076・077須恵器甕である。

073提瓶の分布は、比較的大きな破片で、先の南西側斜面にも一部が掛かるが、南側斜面の標高60.5～61.3m付近の周溝外斜面20層に貼り付く表土層1層から大部分が出土し、南側周溝内から2点と東側周溝内から1点が周溝内堆積土4層から出土している。

076須恵器甕の分布は、南西側斜面の遺物群にも一部が掛かるが、南南西に長さ約8.5m×幅約4.6mの範囲で、南側斜面の標高60.5～63.0m付近の南側墳丘斜面1層又は3層中と、南側周溝内の周溝内堆積土4層から大部分が出土した。それに、数片ずつではあるが石室開口部南側の標高62.6

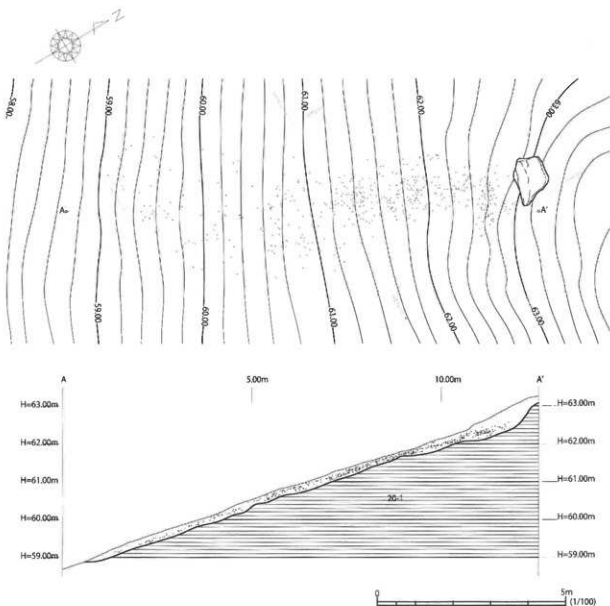


第17図 稻荷山1号墳取上遺物分布図

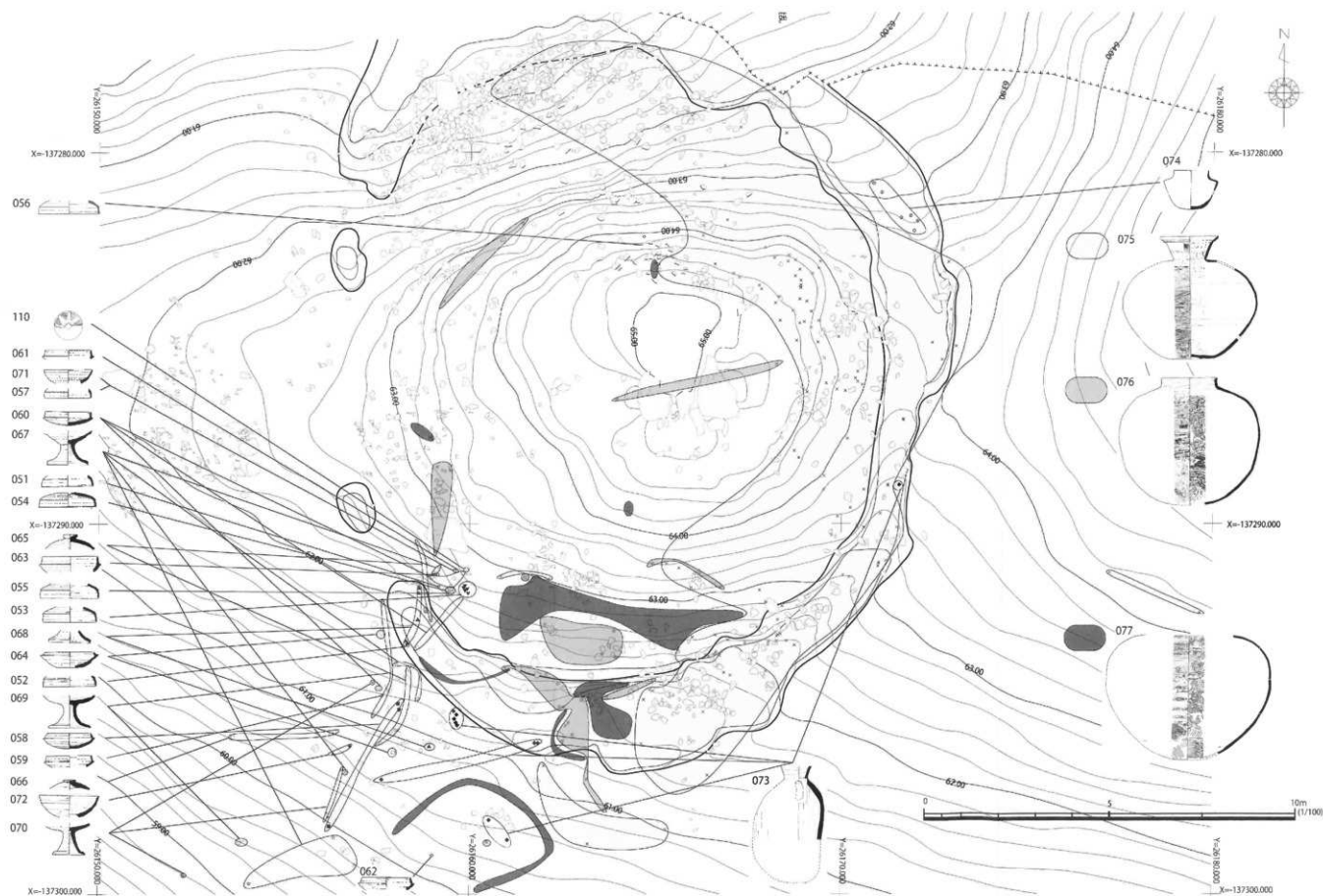
～63.4 m付近、石室開口部北側の標高63.0～63.4 m付近、石室墳頂部の標高64.7 m付近、南側墳丘斜面の標高63.1～63.6 m付近の1層と3層中から出土している。

077 須恵器甕の分布は、これも南西側斜面の遺物群にも一部が掛かるが、南に長さ約8.8 m×幅約6.7 mの範囲で、南側斜面の標高60.1～63.0 m付近の南側墳丘斜面1層又は3層中と、南側周溝内の周溝内堆積土4層、墳丘外南側斜面1層から大部分が出土した。それに、数片ずつではあるが石室羨道開口部の標高63.1～63.2 m付近の1層と、北側墳丘部の標高64.7～64.9 m付近と南側墳丘部の標高64.1～64.3 m付近の1層と3層中から出土している。

076 と 077 の須恵器甕の主な分布位置は、何れも南側斜面の第3重石積と周溝内の第1重石積の間である。詳細に見ると、076 須恵器甕の縦約1.1 m×幅約2.2 mの横長な分布範囲を、077 須恵器甕の周溝肩から第3重石積までの間を、縦約1.8 m×幅約6.7 mの横長な分布範囲が囲んでいるように見える。この様に、須恵器甕を据え置いた場所は確認できていないが、この主な分布範囲においてバラバラに甕を割る、何等かの祭祀が執り行われたことを示すと考えることもでき



第18図 稲荷山1号墳墳丘南西側斜面水平垂直遺物分布図



第19图 稻荷山1号墳古墳時代遺物分布図

る。北側墳丘肩部・石室開口部羨道上・南側墳丘肩部・石室開口部の左右・墳丘頂部での甕片の出土も極めて示唆的であり、この祭祀に係わって置かれた分布の可能性を提示したい。

〔墳丘東側斜面〕

墳丘南側斜面とも少し異なるのが、第19図の墳丘東側斜面において分布を示す075須恵器甕と074須恵器短頸壺である。

074須恵器短頸壺の分布は、東側周溝墓の少し北側の標高62.8～63.3m付近の4層周溝堆積土から、長さ約1.8m×幅約0.4mの範囲にわたり6点の破片が出土した。

075須恵器甕の分布は、墳丘背後の斜面から周溝までの間を中心に南側斜面では墳丘外までの、縦約3.0～6.1m×横幅約14.1mの範囲で、南側斜面の標高60.6～64.5m付近と北側斜面の標高60.7～64.9m付近の1層又は3層中と、南側から北側の周溝内の4層周溝内堆積土、南側墳丘外の1層から大部分が出土した。その他に、2片ではあるが東側墳丘外の墳丘カット面からも出土している。

075須恵器甕の分布範囲は、先の076や077の須恵器甕の分布範囲と一部西端が重なるが、墳丘斜面背後の3/5を覆うものである。特に出土の多い奥壁背後の周溝肩から第3重石積までの間に、076と077の須恵器甕と同様にバラバラに甕を割り墳丘に撒く、何等かの祭祀が執り行われたものと思われる。

この何等かの祭祀とは、埋葬までの「喪」が終了した後に行われた「祭」に、この3口の高さ40cm余りの甕の中に入れていた水（玄酒）や酒といったものを、この墳丘上にまで運んで献供し共に飲食し、その後に甕を割ったもので、祭祀終了後の篠原（2006）のいう「大甕撒餽の作法」と考えられる。甕をバラバラに割ることをもって撒することに代え、場を整えるため敷き並べた結果と思われる。

（2） 平安時代～江戸時代の遺物分布状況

〔墳丘北側斜面〕

北側1区の北側周溝肩部から周溝上部に、第20図に示す遺物集中地点がある。この場所からは、平安時代中期の081灰釉陶器碗、082・083灰釉陶器深碗、085灰釉陶器の底部、088灰釉陶器段皿と、平安時代末の089常滑産広口壺が出土していて、081・082・088は完形品である。

前者の灰釉陶器は、狭い範囲である縦約1.5m×横幅約2.5mの範囲で、北側周溝肩部から周溝上部の標高60.6～60.9m付近の1層又は3層中から出土している。最も周溝側に離れていたのが088灰釉陶器段皿である。これらは2次床面の利用時期と同じ遺物群であり、何等かの祭祀がこの場所で執り行われたものと見られる。この時、羨道に使われていた可能性の高い板石がすぐ横にあり、ここに運んできた可能性がある。

後者の089常滑産広口壺は、前者と重なり少し広い範囲である縦約0.7m×横幅約5.8mの範囲で、北側周溝肩部から周溝上部の標高60.5～60.8m付近の1層又は3層中から出土している。

〔墳丘東側〕

南側3区の西側周溝～南側周溝上部から西側墳丘外に、第20図に示す遺物集中地点がある。西側周溝上からは平安時代中期の084灰釉陶器碗の底部が、南側周溝上からは中世の086山茶碗の底

部が、4層から出土している。そして墳丘外に江戸時代末の090 瀬戸美濃産鉄軸小皿と091 瀬戸美濃産端反染付磁器小皿が、狭い範囲である縦約1.8m×横幅約4.0mの範囲で、1層から出土している。

〔墳丘西側羨道上部〕

南側4区の墳丘西側羨道上部に、第20図に示す遺物集中地点がある。西側周溝上からは平安時代末の087 山茶碗小皿(山皿)、095 土師器台付皿か碗の底部、096・097 土師器小皿が出土していて、087と096は完形品であった。また出土範囲は、縦約2.4m×横幅約1.7mで、1層又は12-1層中(12-7層上面)からの出土である。このことから、石室内への堆積が、平安時代末までには相当量進んでいたことが明らかになったといえる。

この様に平安時代以降、特に平安時代中期と平安時代末には何等かの祭祀が1号墳の周りで執り行われていたことが明らかである。この何等かの祭祀は、古墳時代の須恵器甕の祭祀とは全く異なるものであって、自然界の霊力を体現し会得するため山籠もり等の修行を行う、修験道との関係が最も注意される。この稲荷山の背後である小屋山には北脇庵寺があり、さらに東側の滝ノ谷には滝ノ谷庵寺が、西側には赤岩山に神龜3年(726)に行基開基と伝える真言宗赤岩寺が、谷奥には赤岩寺北庵寺が所在する。また、多米の谷を越えた南側には、船形山の普門寺旧境内がある。いずれも平安時代～中世の山岳寺院跡とその後裔の寺院である。この「赤岩」の名前は、広義には諏訪湖を頂点とした東は富士川、西は天竜川から弓張山地を含む赤岩山系(山脈)を指し、その標高の高い部分は現在「南アルプス」と呼ばれる所である。この範囲には、秋葉山(浜松市)などの修験道の大きな聖地が存在する。これら修験者の修行の場や信仰対象として、これらの古墳が利用された可能性があるように思われる。

2. 主体部

主体部は、右片袖(式)の横穴式石室である。石室は玄室と羨道から成り、玄室と羨道の境にある一石の樞石によって、玄室床面と一段高い羨道床面との上り段構造となっている。

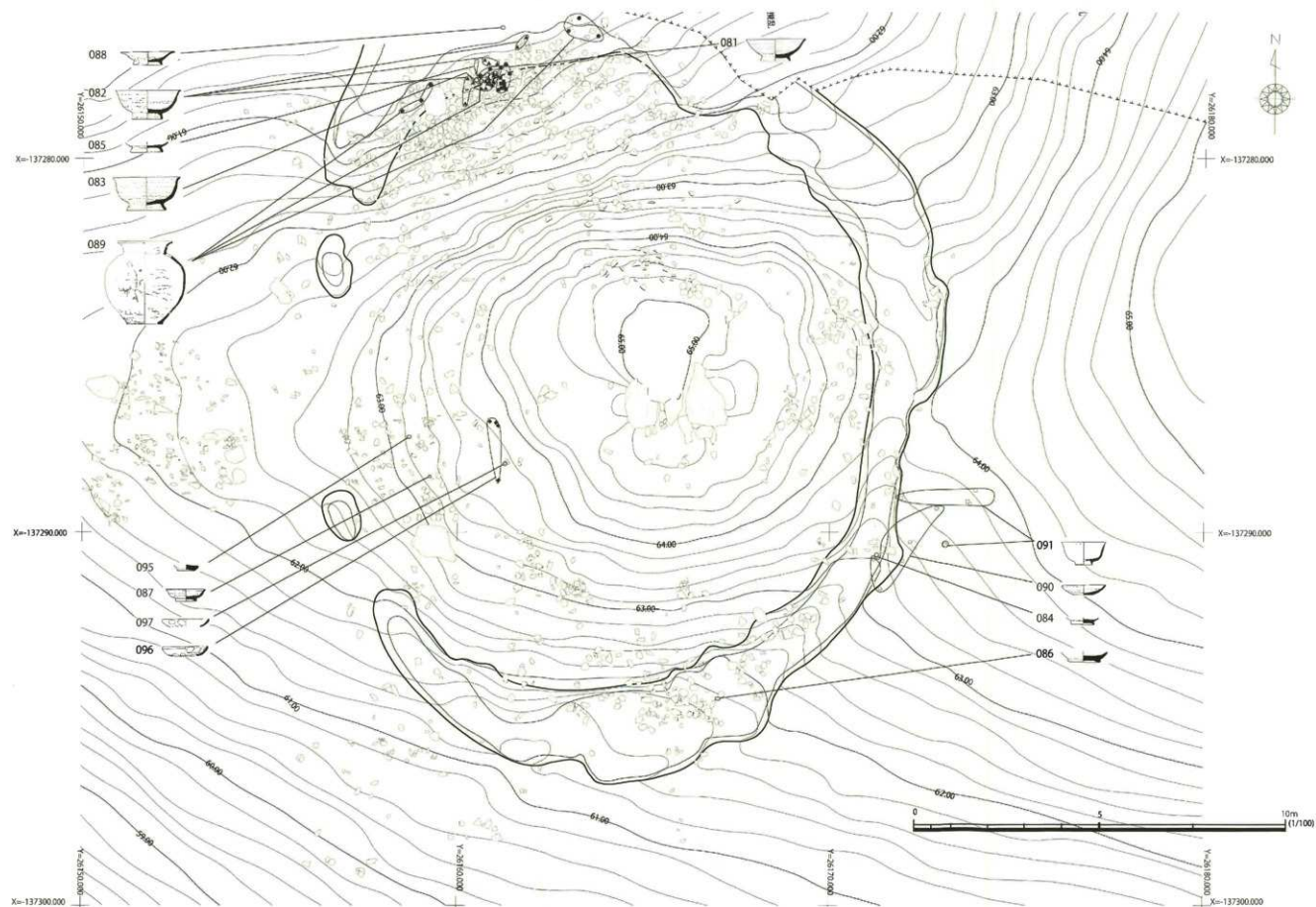
1) 石室規模

石室は、開口部の残りが悪く狭義の前庭との区別を明らかにできないが、その全長は玄室長に残存する羨道長を加えた石室中軸の延長距離で約8.9mである。

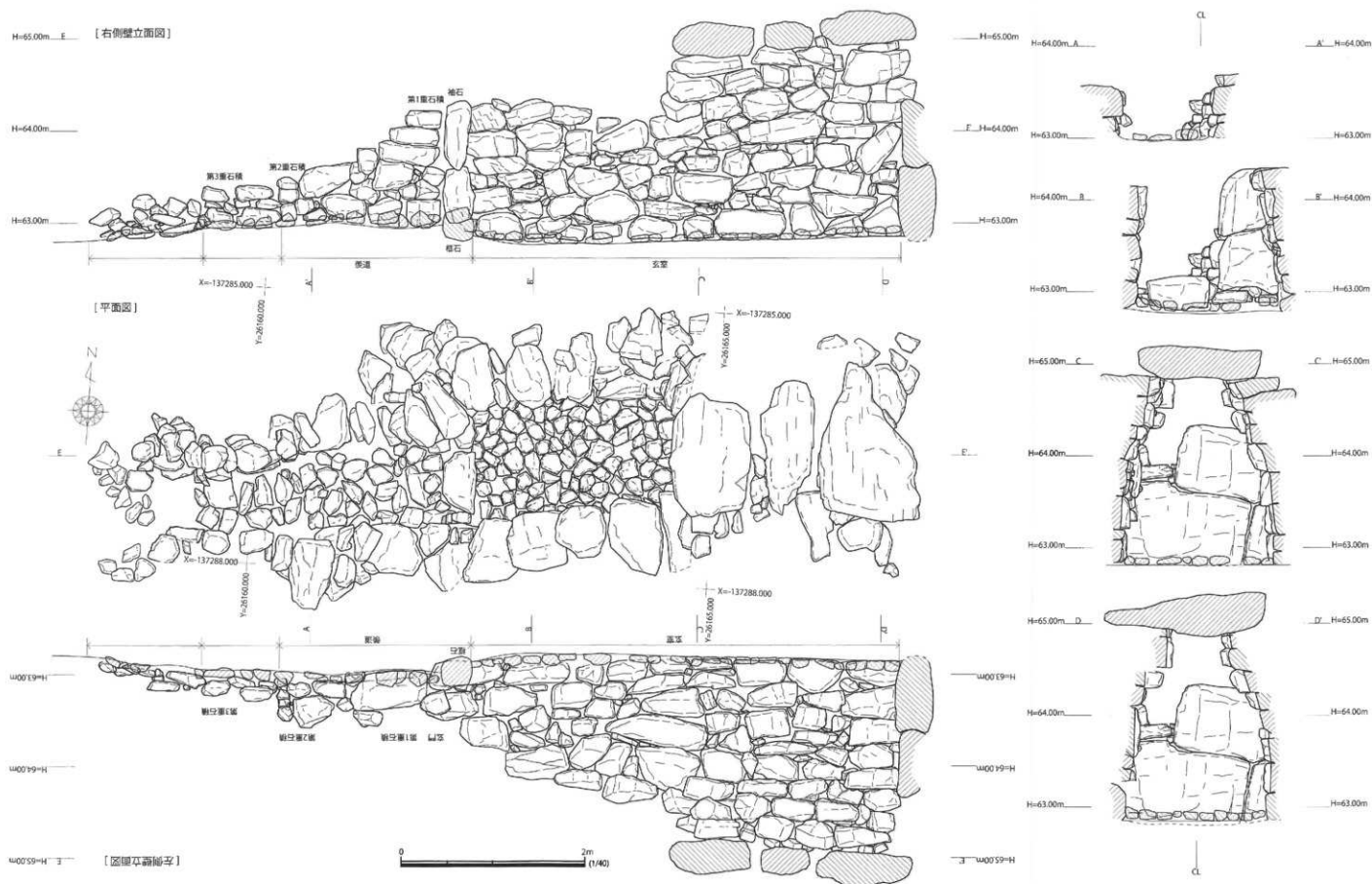
(1) 玄室

玄室の規模は、第21図に示すように、その平面形状は奥に長い長方形で、玄室長は約4.7m(右側壁下端幅4.73m、玄室中央下端幅4.68m、左側壁下端幅4.71m)、玄室幅は約1.6m(僅かに胴張で奥壁側下端幅1.55m、玄室中央下端幅1.65m、玄門側下端幅1.56m)、玄室基壇掘方床面から天井石までの玄室高は約2.0m(奥壁中央高さ2.13m、玄室中央高さ2.02m、敷石上面からの玄室高1.88～1.98m)、天井長は不明であるが4.6～4.7mと推定され、奥壁側に天井石3石が残る天井幅は約0.8m(床面同様に僅かに胴張で奥壁側上端幅0.67m、玄室中央上端幅0.93m)である。

床面の敷石上の標高は、奥壁側と玄門側がやや高く、玄門中央が低い傾斜で、標高62.97～62.86mである。



第20図 稲荷山1号墳平安時代～江戸時代遺物分布図



第21图 稻荷山1号墳石室立面平面图

玄室空間の縦断面の形状は、玄室西側の両側壁上半と天井部は失われているが、残された袖石2石からなる袖壁と奥壁の傾きは $0 \sim 1^\circ$ 余り内側に傾く程度で大きな傾きは見られず、ほぼ長方形と想定される。

これに対し横断面の形状は、側壁の持ち送りによって、側壁下端から $2/3$ 余りが $4 \sim 9^\circ$ 内側に傾き、残り $1/3$ 余りが $21 \sim 30^\circ$ 内側に傾き、下段では幅広く上段天井近くで幅を狭める台形を呈している。

玄室の開口方向は、凡そ $N - 93^\circ 45' - E$ である。

(2) 羨道

羨道は、開口部から側壁上部の大部分と天井部を失っている。羨道左側壁は、玄室左側壁の延長線上にあるのに対し、羨道右側壁は開口部に近づくに従い内側に入り込んで幅が狭まる。床面は、敷石としている。

羨道の規模は、西側開口部(羨道入口)の不明瞭なことから、両側壁が全て残存していないため、正確な数値が明らかにできないが、その平面形状は閉塞を強く意識した細長い通路となっている。明らかに残存する羨道長は約4.2 m、幅約0.5～0.8 m(羨道入口下端幅0.5 m、羨道中央下端幅0.82 m、玄門下端幅0.81 m)である。しかし、開口部を詳細にみてみると、羨道入口の最も狭い部分の下端幅が0.5 mであるが、それより西側ではどの石材が縁石であるかが不明であるため、羨道内の敷石なのか、葺石状敷石なのか不明瞭となっている。羨道の西側延長上の石材を仮に羨道内の敷石とすると、椀石の玄室内側から約4.5 mまでは確実に散見しており、この付近までは羨道の痕跡と考えることができる。さらに本米の羨道長は、墳丘東西復元長14.0～14.1 mからみると、周溝の延長ラインから4.7～5.0 mに復元されるのではないだろうか。また、玄門下端幅0.81 mは、玄室幅1.56 mのほぼ $1/2$ であり、規格性を感じられる。

玄室と羨道の境にある玄門の段構造については、玄室敷石上の標高が開口部に向かうに従って下がり、椀石下で62.93 m前後となり、椀石上面が約63.17 mであるので玄室敷石床面との段差は0.24 m余りの上り段構造となる。落差は少ないが、竪穴系の石室の様相をみせる。また、不明瞭ではあるが西側開口部付近の敷石上面の標高は62.9 m前後であり、羨道自体の傾斜は約 2.5° 前後で開口部の西側の下がる。

羨道左側壁の開口方向は、玄室と同じ凡そ $N - 93^\circ 45' - W$ であるが、右側壁は凡そ $N - 100^\circ 49' - W$ で、明らかに開口部を狭めている。

2) 石室の配置と築造企画

墳丘裾からみた墳丘中心点は、一般的な後期の円墳の場合は石室中央に当たるものが多いが、現状で見る限り1号墳の場合は北の谷側に偏っている。しかし、開口部と墳丘裏側である東側の墳丘裾との関係は、玄室に石室中心点があったことを推定させるものである。言い換えれば1号墳では石室中心点と墳丘中心点は、異なっていたといえる。

墳丘の南北長に直行する墳丘中心点は、北側墳丘肩部から南側墳丘肩部までが最大で16.7 mであるから、中心は約8.35 m地点となる。墳丘の東西長に直行する墳丘中心点は、残存長約13.0 m北

側周溝墳丘肩部から南側周溝墳丘肩部までが最大で16.7mであるから、中心は8.35m地点となる。この位置は、奥壁内面から約2.8m玄門側の右側壁下に墳丘中心点が存在したことを示すものとみられる。なお、南側墳丘裾が最大で約1.5m余り崩落していた場合は、石室中心点と墳丘中心点は同じ位置となる。

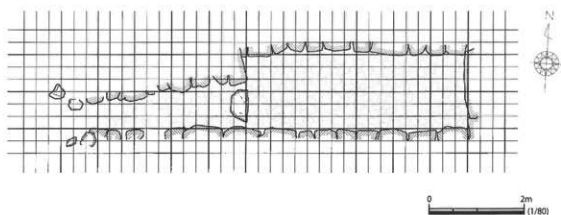
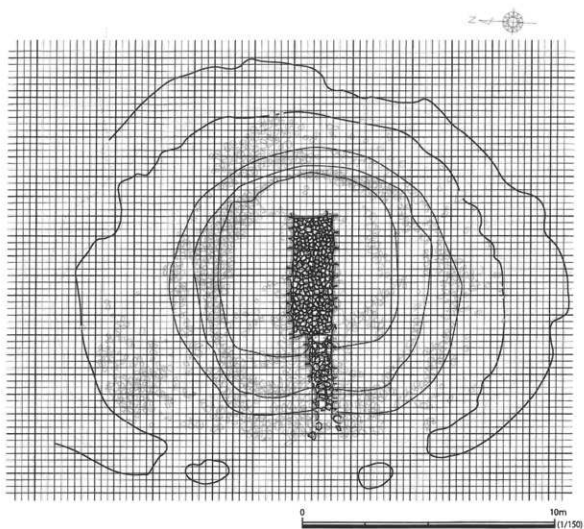
墳丘の東西長に対する位置は、東側墳丘肩部からの残存長が約13.0mであると考え、奥壁内面から東側墳丘肩部まで約4.1m、玄室長約4.7m、残存する羨道長約4.2mである。しかし、羨道長の数字は周溝が無く石積も残存していない現状での開口部の残存長であって、先述したように本来の羨道復元長は、墳丘東西復元長14.0～14.1mと考え、4.7～5.0mに復元される。奥壁内面から東側墳丘肩部までについても4.1～4.4mの幅があり、墳丘裾が浸食されている可能性がある。

また、墳丘東西復元長14.0～14.1mは、玄室長の約3倍である14.1mに極めて近い数値であり、無視できない数値である。仮に玄室長の数字を約4.7mとし、奥壁内面から東側墳丘肩部までを約4.4m、羨道復元長を約5.0mの計14.1mとすると、凡そ18:17:19の割合となる。これは、石室中心点が奥壁内面から約2.8m玄門側の玄室幅の中央にあることを示している。つまり、石室中心点は、墳丘中心点の南側0.8m付近に位置することになる。なお、玄室長の数字と、奥壁内面から東側墳丘肩部までと、羨道復元長を全て同じ約4.7mの計14.1mとすることも、周溝の浸食を考慮に入れた場合には可能性の高いものと考えられる。

このように1号墳の墳丘中心点は玄室内中央にあり、畿内の横穴式石室墳の墳丘中心点が奥壁付近にあるのとは大きく異なる。

さて、これらの古墳築造企画の基準となる尺度が存在するものとする、その玄室計測値から概観してみた場合、その1尺は26.108cm余りに換算される。この単位による各部の尺度は、第22図に示す方眼(細い方眼ライン=0.261m、太い方眼ライン=0.261×3倍=0.783m)のように、玄室長約4.7mで18尺×玄室幅(奥壁・玄門下端幅)1.56mで6尺×玄室高(奥壁中央高)2.13mで8尺に、羨道長は現状では約4.2mで(16)尺であるが約5.0mで(19)尺に換算される。墳丘についても平面数値では東西復元長14.0～14.1mの最大値14.1mで(54)尺×南北残存長16.7mで(64)尺余りに、第1重石積は東西が7.7mで(30)尺余り×南北が7.2mで(28)尺に、第2重石積は東西が9.2m×南北が9.4mの最大長9.4mで(36)尺余りに、第3重石積は東西が10.3mで(40)尺余り×南北が11.4mで(44)尺余りに換算できるのではないかと推測される。これらの数値は、奥壁背後と羨道開口部までの不明確な数値を除くと、何れも偶数であることを特徴としており、中心点からの倍数である可能性を高くしている。墳丘の高さに係る築造企画は、天井石の上部構造である墳丘内石積の上部の状態が明らかでないので不明確であるが、外側から次第に高さを減じて天井石の上に仮に1～2mの盛土を行うとして、玄室掘方床面から天井石までの墳丘高は2.61mの10尺から4.7mの18尺余りの間と推定されるのではないだろうか。

また、この基準尺は、これまで知られている前漢尺(約23.2cm)、後漢尺(約23.3cm)、魏尺(約24.0cm)、晋尺(約24.3cm)、唐尺(約29.8cm)、古韓尺(約26.7cm)等とは、どれも一致しない。最も近いのが、新井(1994)が指摘する、古韓尺であろうか。今後の調査例の増加を待ちたい。



第22図 稲荷山1号墳石室・墳丘基準尺度剖付図

3) 石室の構造と構築法

石室は、調査に当たって石室掘方までの完掘調査を行ったので、その構築過程を第21図と第24図、第23図により復元しながら下記に記述を進めたい。

(1) 尾根の削平と平場作り

1号墳を構築するにあたっては、用地の選定後に、第13図に示した墳丘背後の約14°のやや急な傾斜地が標高64.2 m付近まで下がった傾斜変換点から、尾根先端の岩盤露頭1・2付近までの約9°の緩やかな傾斜が続く標高62.8 mの間の東西長約16 m、南北幅約10.5 mにおいて、20-1層・風化チャートの岩盤を0.6 m余り削平して平場を作ることから始まったと考えられる。この結果、羨道から玄室の南側にかけは、チャートの岩盤が完全に露出した状態となった。この削平工程では、全て削平による整地のみで、盛土による整地は行われていない。

この削平土は、その後の石室盛土や墳丘盛土の一部に使われた可能性が高く、この削平自体が墳丘構築の一段階として重要な作業であったと考えることができる。

(2) 石室・玄室の掘方と排水溝の設置

この平場の北側は約30°の急斜面であり、南側も約19°の斜面となっていて、平地で古墳を作るのとは大きく異なる立地での構築であったと考えられる。

石室を構築するにあたっては、使用する石材や粘土などの資材の確保と運搬を終了し、平場となった用地において墳丘と石室の位置決めが行われたと考えられる。位置決め後に、石室を納める墓域の掘削工程が始まる。墓域である石室の掘方は、2段階で行われている。第1段階は削平した平場に、羨道開口部までの長方形の石室掘方を行うもので、第2段階はそこに暗渠排水溝を設け、羨道に盛土整地して床面を浅く掘り残して基底石部分を深く掘りこみ玄室掘方を作る。

〔石室掘方〕

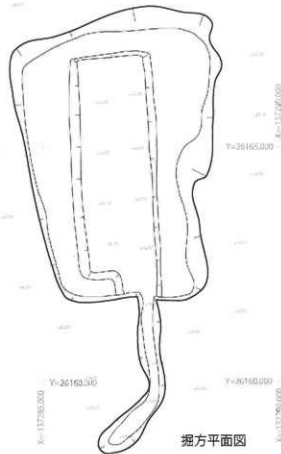
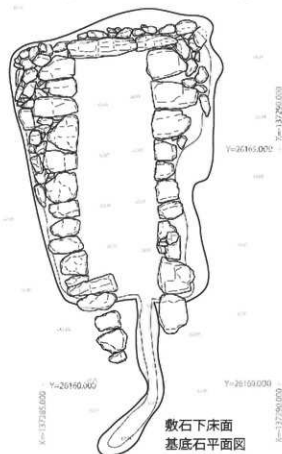
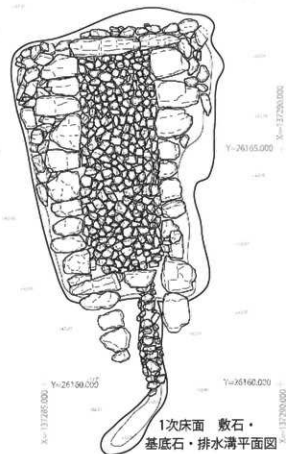
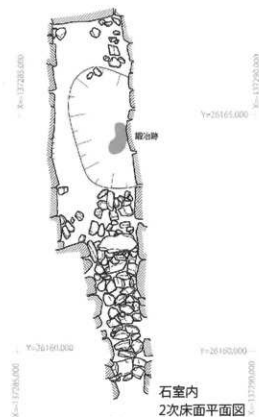
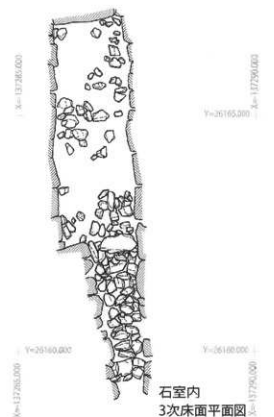
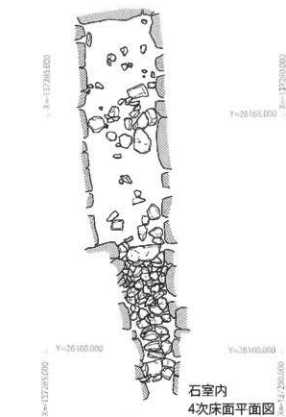
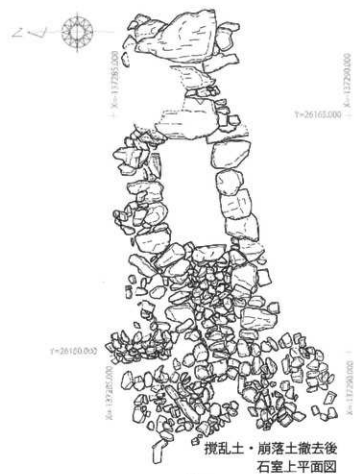
第1段階の石室掘方規模は、最大で奥壁の後ろから羨道開口部までの東西長約9.8 m、南北幅約4.5 mの東側に広がる長方形で、深さは奥壁側が標高63.4 m前後で玄室床面が標高62.8 m前後(標高62.75～62.83 m)であるから約0.6 mの段差をもつが、羨道開口部も標高62.8 m前後であり、床面は水平に仕上げられている。

なお、南側では20-1層の岩盤が露出しているためやや掘方のラインが不整形になっているが、北側ではそれは見られないので、自然地形に合わせた結果であるといえる。

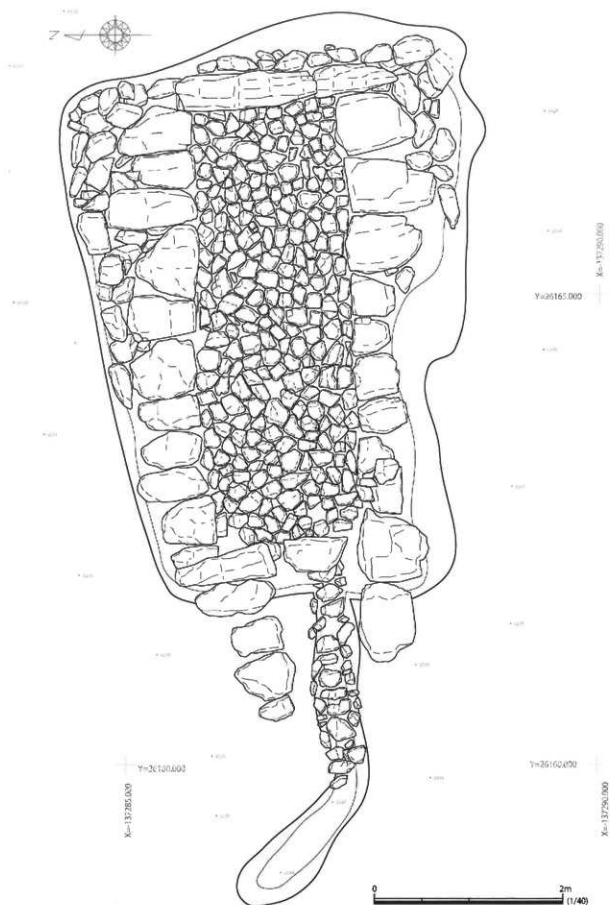
〔暗渠排水溝〕

暗渠排水溝は、玄室内の排水を目的として羨道下に作られた、石詰め溝である。

玄室内の樞石下から始まって、右側壁際の羨道下を通して途中から北西方向にくの字に曲がるが、その先端は不明瞭で北側斜面や周溝までは達していないが、南側への斜面を利用して自然浸透としていたものと思われる。岩盤に掘り込んだ暗渠排水溝の延長規模は約4.3 mで、羨道下を約2.6 mきて、N-47°-W方向に屈曲して1.7 mまでを確認できる。屈曲させた理由は、開口部＝入口への排水を嫌ったからではないかと思われる。溝幅は、玄室境部分が最も狭く0.37 mで、先端部が最も広い0.63 mとなっている。溝の深さは、玄室床面が標高62.83 mで、屈曲部で標高62.74 m、先



第23圖 稻荷山1号墳石室変遷図



第24図 稻荷山1号墳基底石・敷石・暗渠排水溝図

端で標高62.64 mあり、0.1～0.2 mの深さがあるから、玄室内の排水効果はあったものと思われる。

溝内の石は、屈曲部まで見られ、最大のものが椀石下の長辺0.34 m×短辺0.28 m×厚さ0.23 mで、平均的には長辺0.25 m×短辺0.15 m×厚さ0.14 m前後の石を長辺横並びに置いて、その両側や隙間に準大の礫を詰めるものである。この石の並べ方や詰め方は、羨道敷石と同じ手法である。使用された石の数は、57石であった。

なお、暗渠とするために、溝の上部に何らかの木質の板材等を置いていたのではないかという想定をして調査を行ったが、痕跡を確認できなかった。他の古墳例からも、この程度の暗渠排水溝でも排水効果はある程度確保されていたものと考えられる。

〔玄室掘方〕

次にこの暗渠排水溝を、厚さ約0.25 mの10～1層で埋めて羨道側を覆い、玄室西側の掘方を形作る。

第2段階の玄室掘方規模は、その形状を長方形ではあるが東側にやや大きく広がる角の丸い羽子板状の掘方としていて、東西長6.24 m、南北幅は奥壁側幅約4.5 m、玄門側約3.1 mとする。この中央には、後に玄室床面となる菜切り包丁形の部分を掘り残した奥壁側幅1.54 m、玄門側幅1.56 m、右側壁下端幅4.55 m、玄室中央下端幅5.07 m、左側壁下端幅5.1 mの高まりが作られる。奥壁・左右両側壁・袖壁の基底石が設置される部分は、その床面からさらに0.04～0.1 m下がりで底の平らな溝状に掘り込まれる。溝の底幅は、奥壁側では狭く0.42～0.51 m、右側壁側で0.46～1.03 m、左側壁側で0.42～1.27 m、袖壁側で0.34～0.4 m余りである。

なお、南西の左側壁掘方に段を生じているのは、石室掘方同様にこの部分にチャートの固い岩盤が露出しているからで、掘り込み幅も急に狭くなり基底石もこの部分の側石は小振りなものしか使用していない。また、玄室床面において何らかの墳丘中心点や石室中心点となる杭痕跡の存在を予測して精査したが、残念ながら発見できなかった。丸木杭よりも細く抜いた痕跡が確認しにくい、何らかのものが使用された可能性が高い。

（3）玄室基底石の設置

玄室内の厳密な位置決め後に、選ばれた壁石となる基底石を据え置く工程である。玄室基底石の下には、礫を敷き詰めるような基礎地業は無く、掘削した20～1層上面に直接置かれており、隙間に礫を詰めて調整しながら固定している。各基底石の固定順序は、奥壁→玄室両側壁→袖壁→椀石の順である。

〔奥壁〕

石室の最も奥正面に据えられた鏡石1段目で、1号墳に残存する最も大きな巨石である。現状では2石に割れているが、当初は1石であったと考えられる。

石使いは、長辺2.36 m×短辺0.94 m×厚さ0.38 mの平たい長三角形の板石を、長側面を横向きに倒して、平らな面を玄室内に向けて立てたもので、底辺を北側の右側壁側に、先端を南側の左側壁側に置く。この鏡石は、解体時においても自立していた。自立させるにあたっては、掘方である溝内の前後に、鏡石を挟むように長さ0.4 m×幅0.1 m余りの棒状の石を複数個埋め込んで、下端を固定している。

奥壁の鏡石は、石室構築の全ての基準となる石材であり、その位置決めは最も慎重を要する工程の一つである。

〔右側壁〕

右側壁の基底石は、11石から成る。

11石の内、最大のものは奥壁から3石目の長辺0.97 m×短辺0.43 m×厚さ0.36 mのもので、最小は奥壁から11石目の袖石に接する長辺0.51 m×短辺0.21 m×厚さ0.14 mのものである。11石の内、長辺が0.7 mを超えるものは6石で、0.6 m台が4石、0.5 m台が1石である。

石使いは、掘方底面に安定した平らな面を向け、奥壁から4石目を除き石材の比較的平らな小口面を石室内に向け、長辺側を奥に入れた、城郭の石垣分類に使われる用語でいうところの野面積み(牛蒡積み)としている。このため、上面は落差が大きく、隣り合う石材と最大約0.2 mもの差が生じているものがある。また基底石には、それぞれに役割を持たされていることが分かるものがある。奥壁から1石目については、奥壁鏡石を玄室側に倒れてくるのを支える役目を持つため、高さが0.41 mの三角形の石材を用いている。最小の奥壁から11石目の石材は、袖壁と玄門を兼ねる袖石が上に載り、羨道の右側壁に少し倒して玄室側に倒れないようにするためのもので、厚みのない小型の石材を用いている。奥壁下や玄門下の玄室幅よりも玄室中央の幅が0.09 m余り広いことは、石室規模で記述した。この原因と考えられるものに、基底石を置いた順序があるように思われる。基底石の側壁ラインは、奥壁から1～4石目までと10・11石目は端面を描いて真っ直ぐに据え置かれているが、他の基底石は外側に膨らんでいる。特に奥壁から7～9石目は最大0.1 m余りの膨らみがあり、奥壁側と袖壁側が最初に据え置かれ、その間を埋めるように7～9石目の小振りの石材を置いた結果、このようなことになったように思われる。この様に右側壁の奥壁から1～4石目と10石目は、特に玄室の平面構成を押さえる指標石となっている。

裏込め石は、奥壁から1～6石目までは、石の傾き調整を行う支え石である間詰め石や裏込め石が顕著に見られるが、これより玄門側では極端に少ない。20～1層の岩盤上にあるとはいえ、その差は大きい。

〔左側壁〕

左側壁の基底石は、9石から成る。

9石の内、最大のものは奥壁から2石目の長辺0.95 m×短辺0.58 m×厚さ0.37 mのもので、最小は奥壁から5石目の長辺0.42 m×短辺0.38 m×厚さ0.16 mのものである。9石の内、長辺が0.7 mを超えるものは5石で、0.6 m台が無く、0.5 m台が4石である。これは、奥壁から4～7石目が、20～1層の硬い岩盤上にあり、掘方を大きく広げられなかったためである。

石使いは、右側壁と同様で、掘方底面に安定した平らな面を向け、奥壁から8石目を除き石材の比較的平らな小口面を石室内に向け、長辺側を奥に入れた野面積み(牛蒡積み)としている。落差についても、奥壁から4～7石目は石材の厚さが無いため、0.2 m弱の差が生じている。基底石の側壁ラインは、奥壁から1～3石目までと8・9石目は端面を描いて真っ直ぐに据え置かれているが、奥壁から4～7石目は最大0.07 m余りの外側への膨らみがある。奥壁側の1石目から3石目までが据え置かれた後に、玄門の位置にある9石目が置かれ、その後は8石目が横使いに据え置かれ、

その間を埋めるように4石目から7石目が置かれたようで、7石目は8石目との間にかなりの隙間を生じている。左側壁は、羨道まで繋がる1号墳の主軸となる壁であり、奥壁から1石目と9石目は玄室の平面構成と形状を押さえる重要な指標石となっている。

裏込め石は、奥壁から1～3石目までは間詰め石や裏込め石が顕著に見られるが、これより玄門側では極端に少ない。右側壁同様に20～1層の岩盤上にあるとはいえ、その差は大きい。

〔袖 壁〕

袖壁を作る基底石は、2石の比較的小さな石材から成る。

基底石は、框石側の長辺0.42 m×短辺0.27 m×厚さ0.13 mの石材と、右側壁側の長辺0.25 m×短辺0.23 m×厚さ0.08 mの何れも平らな石材からなる。

石使いは、掘方底面に安定した平らな面を向け、横方向に長辺を並べた横使いとしている。右片袖を形作る袖壁は、この上部に長辺1.08 m×短辺0.7 m×厚さ0.38 mの、玄門側に底面を持つ平たい板石を横に倒したものを袖石1段目として載せる。それは、右側壁が第1段石横ラインまで積まれてからで、右側壁に持たれかけのように据え置かれているため、右側壁に対して直角に折れるのではなく、不安定に斜めに突き出ている。さらに、この袖石1段目は、掘方底面に安定した平らな面を向けておらず、第21図のB-B'見通図からも分かるように、湾曲した底部と基底石の間の隙間を埋めるように間詰め石を入れて据え置いている状態である。

この袖壁の作り方は、幅のない板石の上に板石を載せるという極めて不安定な構造であり、現存する袖石2段目までこの様な積み方をしているが、何時倒壊するか分からない危険な積み方といえる。石室の構築自体は手慣れた手法を随所に見ることができるにもかかわらず、この集団の袖壁の作り方が他集団よりも特異であったのか、それとも不慎れであったといわざるを得ない。また、この玄門となる袖石は本来は指標石となる石材であるが、その役割を果たしていないように思われる。

〔框 石〕

玄室と羨道の境には上り段があるが、その段差の部分に置かれた玄室入口への敷居石で、1石からなる。

框石は、暗渠排水溝の上に10～1層の盛上を行って、蓋をするように置かれているもので、長辺0.68 m×短辺0.37 m×厚さ0.35 mの平面が玄室側に広い台形で、断面が方柱形の石材である。石使いは掘方底面と上面に安定した平らな面を向け、横方向に長辺を並べた横使いとしている。また、框石は左側壁の奥壁から9石目との間に0.15 m余りの隙間を生じているが、0.1 m角ぐらいの石材を入れて間詰めを行って固定している。これによって、玄室内の基底石は全周したことになる。羨道の頁でも記したように、框石下の玄室敷石床面との段差は0.24 m余りの上り段構造で、玄室掘方床面では0.3 mの段差となる。この上り段の構造は、竪穴系横穴式石室の横口部段構造とも、同一床面を閘石で分割するものとも、開口部に階段状に上がるものとも、全く異なる別系統のものと思われる。

框石上の高さは、標高63.17 m余りであるが、袖石2段目上面が標高64.33 m余りであるからその差は1.16 mとなり、人が立ったままで入ることは困難である。この袖石2段目の上にさらに1石袖石が存在したのか、上部に前壁を作っていたかは、袖石2段目より上が残存していないため明

確にできないが、人の身長や玄室高を考えると袖石3段目は存在していて、玄室と羨道に段差のない水平な構造であった可能性が高いと思われる。前壁がある場合でも、袖石3段目は必要であり、現状では僅かに下がる程度のもしか想定できない。

(4) 石室の構築と裏込め盛土

玄室の構築は、石積壁体工程と裏込めの盛土工程とが表裏一体で進行する。特に玄室側壁は、長大で平らな軽い石材が近場で簡単に調達できるならば、垂直に積まれていた可能性が高いが、多くの場合は天井石の制約から持ち送りとか、転びと呼ばれる内側へのせり出しが行われる。この持ち送りに耐えて天井石の重量を支え逃がす工夫が、石室背後の周とも呼べる構造にあるといえる。

玄室の壁体構築は、石積ライン(目地)の観察から、天井石の架構までを大きく3工程で作る。第25図と第11図により示す。

【第1工程】

第1工程は、第1段石積ラインまでで、奥壁1段目の上部から袖石1段目上部までの、基底石を含む2～4段の側壁石積である。

右側壁は、基底石を含む38石と間詰め石8石以上から構成されるもので、奥壁側が標高63.6 mまでの床面から0.73 m余りの高さに、袖壁側が標高63.55 mまでの床面から0.68 m余りの高さに積まれる。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、内側への傾斜は4～5°前後である。袖石1段目の固定には、袖石裏側にあたる羨道右側壁の基底石1石目とその上部に2石を積んで行っており、これまでが第1工程の範囲である。壁体背後の盛土は、側壁材の間詰め石で調整しながら固定し、掘方内に裏込め石を入れて排水と固定を図り、その上部に9～7層と中型の石材を用いて側壁材背後に重心をかける工夫が行われている。

左側壁は、基底石を含む25石と間詰め石11石以上から構成されるもので、奥壁側が標高63.5 mまでの床面から0.65 m余りの高さに、玄門側が標高63.5 mまでの床面から0.65 m余りの高さに積まれる。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、内側への傾斜は右側壁同様に5°前後である。玄門にあたる場所では、大型の基底石上に上積みされた1石が残存するが、これまでが第1工程の石積範囲である。壁体背後の盛土は、右側壁と同じ様に9～7層と中型の石材を用いて側壁材背後に重心をかける工夫が行われている。

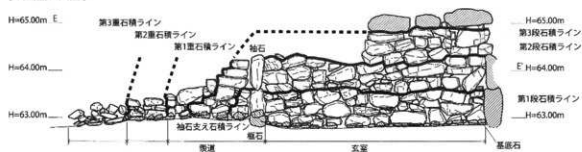
奥壁1段目の背後については、9～7層と中型の石材を多量に用いて、玄室掘方上面まで裏込めを行っている。

【第2工程】

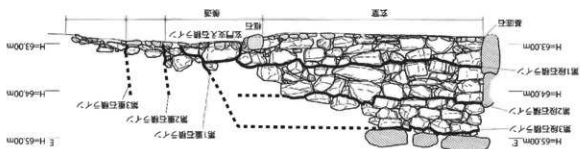
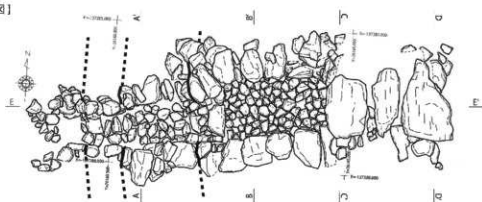
第2工程は、第2段石積ラインまでで、奥壁2段目の上部から袖石2段目上部までの、2～4段の側壁石積である。

右側壁は、31石と間詰め石11石以上から構成されるもので、奥壁側が標高64.32 mまでの床面から1.45 m余りの高さに、袖壁側が標高64.3 mまでの床面から1.43 m余りの高さに積まれる。この内、奥壁2段目を支える第2段石積の側壁1石目が、奥壁を支えるように水平ではなく斜めに据え置かれていることに気が付く。極めて異例な使い方である。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、内側への傾斜は6～9°前後である。袖石2段目の固定には、袖

【右側壁立面図】

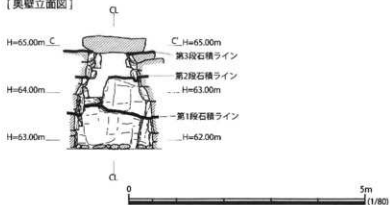


【平面図】



【左側壁立面図】

【奥壁立面図】



第25図 稲荷山1号墳壁体構築工程図

石裏側の羨道右側壁の基底石3石とその上部に5段7石余りを積んで行っている。さらに、この上に袖石3段目を置くことも可能な状態である。この羨道部の玄門支え石積ラインは、墳丘の第1重石積ラインと重なるものである。壁体背後の盛土は、9-4・5層と小型・中型の石材を多用して丁寧に側壁材背後に盛土が行われている。

左側壁は、玄門部から玄室上部にかけて大きく壊されていて一部を欠くが、28石以上と間詰め石10石以上から構成されるもので、奥壁側が標高64.25 mまでの床面から1.4 m余りの高さに、玄門側は壊されていて不明であるが標高64.15 m前後の床面から1.3 m余りの高さに積まれていたものと想定される。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、内側への傾斜は右側壁同様に6~9°前後である。袖石反対側の玄門にあたる部分は、奥壁から9石目の基底石上に1石を残すのみで、門的な石積を行っていたかは明らかではない。ただし、羨道基底石の1石目は長辺0.87 m×短辺0.6 m×厚さ0.42 mの大型の石材を横置きにしており、門的な石積を支える目的で置かれた可能性がある。また、この羨道基底石の1石目を含む2段3石の玄門支え石積ラインは、墳丘の第1重石積ラインと重なるものである。壁体背後の盛土は、右側壁同様に9-4・5層と小型・中型の石材を用いて側壁材背後に盛土が行われている。

奥壁2段目は2石から成るようで、左側壁側の現存する大きな長辺1.1 m×短辺0.76 m×厚さ0.24 mの板石と、現状では盗掘により東側に横倒しとなって端面を石室内に向ける長辺0.65 m×短辺0.54 m×厚さ0.14 mの板石を立てていたようである。奥壁2段目の背後については、9-6層と小型の石材を用いて斜めに押さえるような盛土を行った後に、第1重石積の盛土となる9-5層、その上に9-4層を積み上げている。

【第3工程】

第3工程は、天井石下までの第3段石積ラインまでで、残存しない奥壁3段目の上部から、これも残存しない袖石3段目上部までの、2~3段の側壁石積である。玄室の前面を両側壁共に壊され石材を抜き取られていて、残りは極めて悪い。

右側壁は、残存するものが16石と間詰め石1石で、奥壁側が標高64.87 mまでの床面から2.0 m余りの高さに、玄室中央で標高64.82 mまでの床面から2.02 m余りの高さに積まれる。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、この第3工程より内側への傾斜は21~30°と急になる。残存しない袖石3段目の固定については、第2工程の羨道右側壁上部にさらに2段余り積んで固定していたものと考えられる。この羨道の第2段石積ラインとその上部石積を加えた第3段石積ラインは、墳丘の第1重石積の傾斜ラインと重なるものであり、羨道ではこの盛土壁面を塞ぐように石積壁面を作る。壁体背後の盛土は、9-2・3層と小型の石材を用いて、第11図に示す様にこれまでの傾斜とは異なり、急に立ち上がる盛土が行われている。

左側壁は、残存するものが20石と間詰め石1石で、奥壁側が標高64.97 mまでの床面から2.12 m余りの高さに、玄室中央で標高64.83 m前後の床面から2.02 m余りの高さに積まれる。石使いは、基本的には野面積み(牛蒡積み)と横使いを併用していて、内側への傾斜は右側壁同様に23~28°前後である。壁体背後の盛土は、9-2・3層と小型の石材を用いて側壁材背後に行われていて、右側壁同様に急に立ち上がる盛土としていた可能性が高い。

奥壁3段目は残存しないが、おそらくその大きさは長辺1.4 m×短辺0.5 m×厚さ0.2 m余りの板石1石であったと想像される。奥壁3段目の背後については、9～3層の存在が確認される程度であるが、両側壁同様の盛土が行われていた可能性が高い。

(5) 玄室天井石の架構

玄室天井石の架構は、壁体が第3工程まで完了した段階で行われるもので、第4工程にあたる。

天井石は、現状で奥壁から3石が残存している。奥から1石目は長辺1.87 m×短辺1.2 m×厚さ0.36 m余りで、2石目は長辺1.47 m×短辺0.58 m×厚さ0.3 m余りで、3石目は長辺1.35 m×短辺0.9 m×厚さ0.37 m余りのそれぞれチャートの板石である。奥壁3段目上に0.2 m余り東に張り出して、奥壁から約2.5 m玄門側に天井部を作る。奥壁から1石目と2石目の間には0.07～0.28 m余りの隙間が、2石目と3石目の間にも0.12～0.35 m余りの隙間があり、その間には0.1～0.3 mの礫が間詰め石として粘質土と共に詰め込まれている。玄室内側から見た天井部の幅は、0.7～0.95 mで、玄室下端幅の約1/2となっている。

天井石の搬入は、第1重石積の開口部南側①区からで、玄室奥から天井石を架す作業における石材の進入路として、玄門上の天井石が架構される最後まで使用され、結果として他の石積区間より石積が遅れている。この開口部南側①区から西南西への17～20°の緩い傾斜スロープの角度が、天井石を最も楽に搬入できたからに他ならないと考えられる。搬入にあたっては、修羅等が使われたものと思われる。

また、天井石の架構方法は、第3工程上面の側壁上に、多数の支い物である間詰め石を適時挟み込みながら、天井石の固定を行う必要がある。このためには、一端天井石を吊り上げることが必要であり、側壁材や奥壁の鏡石などの他の石材を動かすにあたっても同様である。これには、現代のチェーンブロックとは行かないまでも、三つ又と滑車の様なものを付けた工具とロープは必需品であったと考えられる。

玄室上で使用された天井石の数は、玄室長が4.7 m、玄門と袖石上部まで天井石が載るとして約5.1 m、おそらく6石であったと考えられる。現状でこれに相当する石材は、第8図の墳丘南西斜面上で長辺1.5 m×短辺0.8 m×厚さ0.3 m余りの板石1石と、墳丘北西斜面上で長辺0.9 m×短辺0.6 m×厚さ0.3 m余りのやや小振りの板石1石が調査前に確認されている以外、周辺では確認できていない。この内前者は、玄室天井石の可能性が高い。

架構後には、天井石の側面を9～1層で固定し、その上部を砂礫で覆い、さらにその上部を粘質土や粘土で厚く覆ったと考えられるが、この工程に係わる土層は残されていない。

玄室床面の敷石は、本来は羨道完成後の遅い時期に施工されたと考えられるが、玄室内の第5工程としてここに掲げる。

(6) 敷石床

敷石床は、比較的平らな板石を厳選して、20層又は10層の盛土床面上に平らな一面を上に向けて隙間無く並べ置いたもので、砂礫を敷いたものとは異なる。敷石の数は、玄室長が4.7 m(右側壁下端幅4.73 m、玄室中央下端幅4.68 m、左側壁下端幅4.71 m)で東西が約25石、玄室幅が約1.6 m(僅かに胴張で奥壁側下端幅1.55 m、玄室中央下端幅1.65 m、玄門側下端幅1.56 m)で南北が約

10石余りの配置で、249石を確認した。この内、右側壁際の中央付近で1石分、中央西側付近で1石分、框石を降りたところで1石分、右側壁と袖壁の間で2～3石分の計5～6石が現状で抜かれている。敷石の大きさは、最大が長辺0.31m×短辺0.22m×厚さ0.1m余りで、最小が長辺0.1m×短辺0.05m×厚さ0.04m余りで、平均的には長辺0.2m×短辺0.15m×厚さ0.1m余りのものを用いている。敷石床面の高さは、奥壁際で標高62.96m、中央部で標高62.87m、框石際で62.9m余りで、中央部がやや下がっている。

敷石床の施工は、左側壁際と奥壁際に始まり、奥壁から3.1m付近までを右側壁に向かって一単位、それよりも西側を別の一単位が框石側に向かって施工されている。2人もしくは、1人が場所を変えた、2回の施工と考えることができるが、その施工方法が異なっており前者と考えられる。

(7) 羨道の構築

羨道は、開口部を始め上部構造の多くを失っており、不明確なところが多い。

また、羨道の構築は、玄室の構築工程、墳丘の構築工程と大きく関わり合いながら、開口部に拡張されたことが明らかである。土生田(1994)のいう「付加羨道」の用語が適切かは分からないが、拡張の工程を確認できる。

【第1工程】

第1工程は、玄室の第2・3工程で作られた第1重石積ラインである袖石支え石積ラインまでの側壁に、さらに第2重石積までの間を天井部まで充填した側壁石積である。

羨道右側壁は、玄門である袖石から基底石5石目(框石玄室内面から2.08m西側)に、縦方向に面を揃え積み上げた3石を残す第2重石積があり、この第2重石積を含む第1重石積ラインである袖石支え石積ラインまでの壁面の石積工程で、4段8石と間詰め石1石が残る。側壁の積み方は、第2重石積の0.2～0.3m角の石材を用いて作った石積以外は、玄室側壁と大きく変わらないが、既に存在する袖石支え石積の後に第2重石積が作られ、その間を天井部まで充填して側壁面を作りあげたものと考えられる。壁体背後の盛土は、8層と小型の石材を用いて行われている。

羨道左側壁は、玄門から基底石4石目(框石玄室内面から2.1m西側)に、縦方向に面を揃え積み上げた4石を残す第2重石積があり、この第2重石積を含む第1重石積ラインである玄門支え石積ラインまでの壁面の石積工程で、4段8石と間詰め石2石が残る。他は右側壁と積み方は同様であって、既に存在する玄門支え石積の後に第2重石積が作られ、その間を天井部まで充填して側壁面を作りあげたものと考えられる。壁体背後の盛土は、8層と小型の石材を用いて行われている。

【第2工程】

第2工程は、第1工程の第2重石積までの側壁に付加して、第3重石積までの間を天井部まで充填した側壁石積である。

羨道右側壁は、第2重石積から基底石2石目(框石玄室内面から2.93m西側)に、縦方向に面を揃え積み上げた3石を残す第3重石積があり、この第3重石積を含む第2重石積までの壁面の石積工程で、3段8石で床面からの高さ0.45mまでが残る。側壁の積み方は、第3重石積の長辺0.3m×短辺0.2m×厚さ0.15m余りの板石を用いて作った石積に、第1工程よりもやや小形の側壁材を用いてその間を天井部まで充填して側壁面を作りあげたものと考えられる。壁体背後の盛土は、7

層と小型の石材を用いて行われている。

羨道左側壁は、第2重石積から基底石3石目(柩石玄室内面から2.93 m西側)に、縦方向に面を揃え積み上げた1石を残す第3重石積があり、この第3重石積を含む第2重石積までの壁面の石積工程で、2段4石で床面からの高さ0.33 mまでが残る。側壁の積み方は、第3重石積の長辺0.32 m×短辺0.25 m×厚さ0.17 m余りの板石を用いて作った石積に、第1工程よりもやや小形の側壁材を用いてその間を天井部まで充填して側壁面を作りあげたものと考えられる。壁体背後の盛土は、7層と小型の石材を用いて行われている。

〔第3工程〕

第3工程は、第2工程の第3重石積までの玄室側壁に付加して作られた羨道側壁が終了し、墳丘での2重の列石とその間を埋める葺石状敷石が、羨道開口部においては少し異なる施工をしていたことを示すものである。

残存する羨道長は、約4.2 mである。第3工程の右側壁は、この内の延長約1.25 mを占め、残存する最大の高さは床面から0.42 mで、3段16石が残る。基底石もさらに小振りとなっているが、2石(長辺0.42 m×短辺(0.25) m×厚さ0.09 m、長辺0.37 m×短辺0.23 m×厚さ0.13 m)は確実に確認できる。

第3工程の左側壁は、この内の延長約1.17 mを占め、残存する最大の高さは床面から0.28 mで、2段9石が残る。基底石もさらに小振りとなっているが、1石(長辺0.44 m×短辺0.16 m×厚さ0.14 m)は確実に確認できる。

これらのことから第3工程は、墳丘である第3重石積に平場から直接取り付くのではなく、羨道壁面がある程度の高さを持って立ち上がっていたものと考えたい。その高さは不明であるが、床面から0.42 m以上であったことは確かなようである。

(8) 羨道天井石の架構

羨道天井石の架構は、壁体が第2工程まで完了した段階で行われたもので、羨道の第4工程にあたる。

玄室の天井石については、6石の可能性を示したが、羨道については羨道壁面自体が残存しておらず全く資料がない。一般的な古墳時代後期の石室の場合、玄室が1～2石の巨石(長辺が2 m以上の石)で、羨道が3～4石の大石というのが多い。この1号墳の場合、羨道幅は玄室幅の1/2以下であり、天井石についても玄室ほどの大石はいらないことになる。また、玄室と羨道の天井の段差は、玄室天井の高さが約2 mと低いこと、袖石の構築が貧弱であることなどを考慮に入ると、天井の段差は無く水平であった可能性がある。さらに、天井石の位置と数は、墳丘の傾きを考えて、第2重石積上部まで天井石があったと考え、延長は約1.7～1.8 mであり、墳丘北西斜面上にあった長辺0.9 m×短辺0.6 m×厚さ0.3 m余りのやや小振りの板石を羨道天井石として仮に架構するならば、3石であった可能性が高い。

(9) 羨道の敷石床

羨道の敷石床は、少なくとも柩石玄室内面から約4.2 m開口部西側まで見られるもので、羨道の第5工程といえる。

羨道幅は、柩石側が0.81 mと広く、開口部側が0.5 mと狭い構造となっている。この羨道での敷石の使い方は、羨道幅の中央に横長に長さ0.3～0.5 m×幅0.1～0.2 mの石材を2列並べ、幅の広い柩石側ではさらに羨道側壁との間の隙間に縦方向に0.05～0.2 m余りの石材を入れて充填する。この内、第3重石積の羨道側壁下の敷石に、やや大きな長辺0.45 m×短辺0.32 m×厚さ0.11 mの板石1枚がある。さらに西側にも敷石は散在するが、墳丘石積の区切りを示す石材と考えられる。これら残存する敷石の数は、50石である。この敷石床は、玄室内の敷石床とは異なり、方形もしくは長方形の石材を用いて平らな面を上に向けて施工するものであるが、敷石床の様な歩きやすさはない。敷石床面の高さは、柩石際で標高63.13 m、中央部の第2重石積付近で標高63.07 m、第3重石積付近で標高63.02 m、開口部最西端で62.92 mと、開口部に向かうに従い緩い傾斜で下がる。

4) 石室内の利用と出土遺物

墳丘及び石室の完成後には、その目的である石室内への葬(以下、「埋葬」という。)が執り行われた。この墳墓の墳丘と墓室としての使用と、今日までの長期間にわたる利用について、4次の床面を検出した。以下、床面の呼称は、初期埋葬から最終埋葬時までの状況を示す1次床面、鍛冶を行った2次床面、目的は明らかでないが何らかの利用が認められる3次床面と4次床面である。

(1) 1次床面

1次床面は、石室完成後に使用した初期埋葬から、最終埋葬までの追葬で何度も玄室内を再整理した最後の床面状態を示すものである。

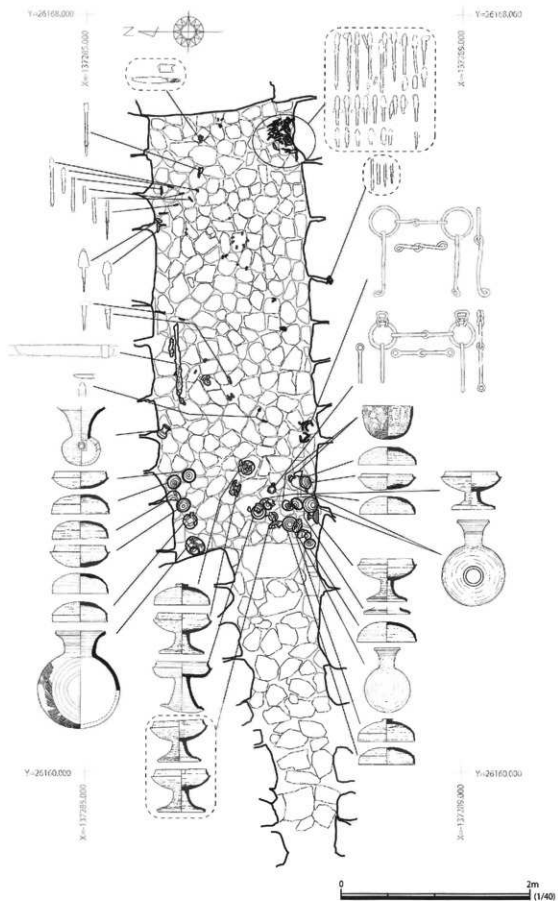
[堆積層]

敷石床上の堆積及び敷石間の堆積は、出土遺物の多くが敷石床に付くか僅かに浮いている状態で、墳丘はその機能を良く果たし、最終埋葬時まで玄室内への流入上はほとんど無く、その後の2次床面として利用される平安時代中期まで堆積環境の変化もないため安定した堆積をしたものと思われる。この石室内堆積土である14-1層は、シルト質細砂層に角礫(φ～2cm)を含む粗砂質シルトが混ざるブロック層である。この層の堆積環境は、安定した堆積物であるシルト質の細粒砂層に、角礫(φ～2cm)や粗砂質シルトのブロック層が床面上に混ざるもので、後者は閉塞石間埋土層(15-1層)の角礫(φ～20cm)を含むシルト質粗砂層であることが考えられる。これは、羨道の開閉による玄室への出入りがあったことを示すものといえる。

また、上層である2次床面からの掘り込みが左側壁際中央部の東西約2.65 m×南北約1.15 mの範囲で皿状に見られ、深さは最大0.18 m底の敷石床にまで達してしまっている。このため、この掘り込みにより掘り上げられた遺物は、南西側墳丘斜面に掻き出されており、その遺物分布については既に第18図と第19図に示した。

[出土遺物の種類と配置]

敷石床上より出土した主要な遺物の配置を、第26図に示す。この図に掲載していないガラス小玉や玉製品については、敷石床上や敷石間の堆積土の洗浄にて主に出土したものである。2次床面からの掘り込みによる攪乱部分は、ほとんど遺物を失っているが、玄室全体でみると玄門・柩石の入口部から約1.3 mまでに上器が、そして鉄製品の馬具が、それよりも奥壁側に鉄製品の武器・文



第26图 稻荷山1号墳1次床面遺物出土状況図

具等や石製品・ガラス製品・金属製品の装飾品が出土している。

出土遺物の種類は、土器には須恵器の坏身、坏蓋、有蓋短脚無窓高坏、有蓋高坏蓋、提瓶、甕、プラスチック瓶が、土師器には鉢が、金属製品には大刀、刀子、鑑、釦、耳環が、石製品には勾玉、管玉、切子玉、璽玉が、ガラス製品には小玉、丸玉がある。以下には器種毎に、その出土位置を確認していきたい。

〔土器の出土状況〕

敷石床上面西側の土器の出土状況を、第27図に示す。

これらの土器をA～Cの3群に分ける。なお、土器は025土師器鉢を除き、全て須恵器である。

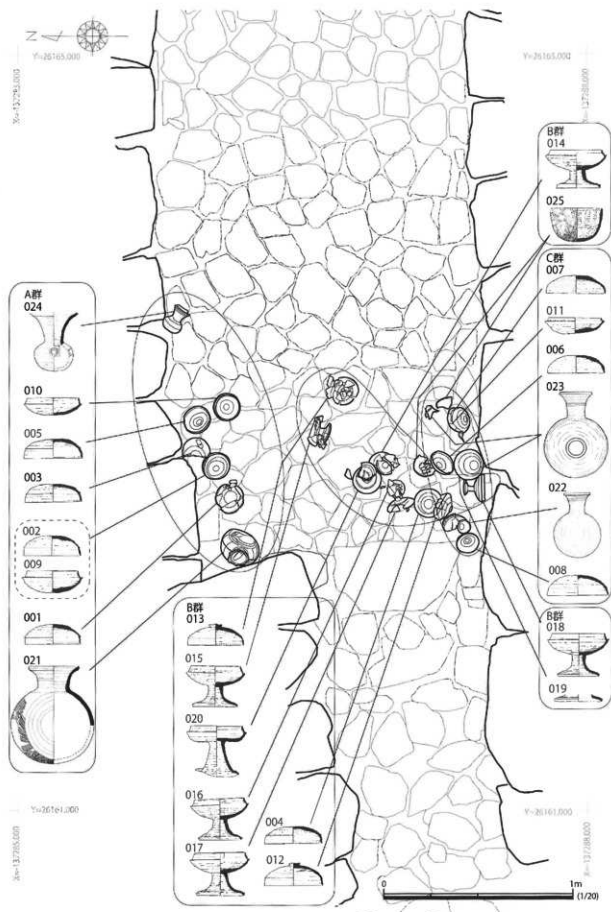
A群は、右側壁際北西隅出土の土器群である。奥壁に向かって長さ約1.4mを一列に壁際に並ぶ群で、北西隅の敷石の抜けたところに立つ021提瓶、口を上に向ける001坏蓋、口を上に向ける009坏身に002坏蓋を被せたセット状態のもの、口を上に向ける003坏蓋、口を上に向ける005坏蓋、その南に口を上に向ける010坏身、右側壁際の延長上で、A群とは0.4m余り離れて横倒しになった状態で出土した024甕からなる8個体である。これらの一群は、右片袖の右側壁際に残されたか、置かれていたもので、土器型式の中では最も古い、初葬の遺物群と考えられるものである。

B群は、中央部出土の土器群である。玄門側に横倒しとなった015有蓋短脚無窓高坏、奥壁側に015とセットと思われる口を上に向ける013有蓋高坏蓋の2個体と、左側壁際南西隅出土の土器群である。左側壁から横倒しの018有蓋短脚無窓高坏、023プラスチック瓶の下から出土した019短脚高坏脚部破片、口を下に向け004坏蓋に被さる012有蓋高坏蓋、口を下に向ける004坏蓋、口を下に逆さまの016有蓋短脚無窓高坏、その上部に横倒しとなる017有蓋短脚無窓高坏、口を下に逆さまの014有蓋短脚無窓高坏、その上に被さって口を下に逆さまの020有蓋短脚無窓高坏、口を上に向ける025土師器鉢の11個体からなる。B群の高坏は何れも逆さまの状態であり、口を上に向けたものは存在しない。本来、坏内に供献物を入れるために上を向け、蓋をしていたものと考えられるが、この状態で出土したものは無い。

C群は、玄門側の榎石堀から口を上に向ける008坏蓋、口縁を上に向けて立つ022プラスチック瓶、口縁を下に向ける023プラスチック瓶、口を上に向ける006坏蓋、口を上に向ける011坏身に007坏蓋を被せたセット状態の6個体からなる。この内011坏身に007坏蓋を被せたセットは、1次床面出土遺物群の中では新しい一群であり、最終埋葬時の遺物として注意される。

これらA～C群の合計個体数は、25個体である。土師器鉢は1個体、提瓶と甕も各1個体、プラスチック瓶は2個体、有蓋短脚無窓高坏が6個体と不明短脚高坏1個体、有蓋短脚高坏蓋が2個体、坏身が3個体、坏蓋が8個体と、高坏の蓋と坏身が数量的に不足していることは明らかであるし、019短脚高坏の様に破片のみしかないものがあり、玄室内に接合資料が無い状態である。2次床面からの掘り込みにより、玄室外へ持ち出された遺物で明確なものは003坏蓋があるが、さらに検討が必要である。

また、この土器の配置状態から、榎石から北東方向斜めに土器の存在しないA群とB群の幅約0.4～0.7mの空間は、最終追葬時の埋葬位置への通路と見ることができる。



第 27 図 稲荷山 1 号墳 1 次床面土器出土状況図

〔金属製品の出土状況〕

敷石床上面東側の金属製品の出土状況を、第28図に示す。

これらの金属製品をA～Iの9群に分ける。なお、金属製品である耳環3点については、装飾品であることから次頁の石製品・ガラス製品・耳環にて報告する。

A群は、左側壁際南東隅出土の鉄鍬群である。敷石床に接しており初期埋葬に伴うものである可能性が高いが、検出時には東西方向や南北方向、あるいは斜め方向に鍬が交叉し小山のように集められた状態で、左側壁際の長辺約0.5m×短辺約0.3mの範囲に集積していた。実測できた鍬は68点であるが、他にも破片が多数存在する。鍬の型式は、全て有頸有茎鉄鍬で、細根系が64点で柳葉形のものが29点、広根系が4点で067 闊袢長三角形と068 長三角形が各1点ある。

B群は、奥壁側中央出土の刀子と刀子の柄である。敷石床よりやや浮いて、折り重なるように出土した。511 呑口式刀子と、その柄ではないかと思われる512 骨角製刀子柄の2点である。

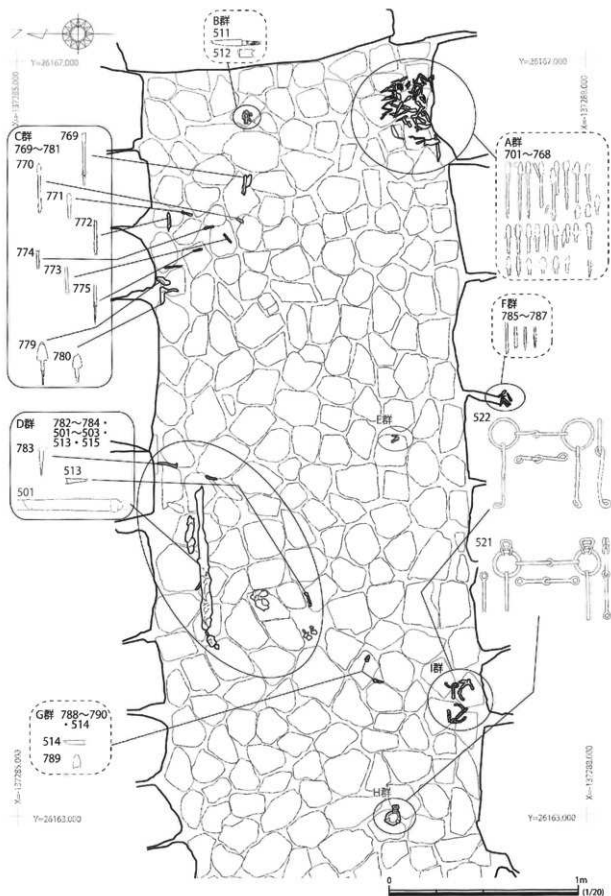
C群は、奥壁際から0.7m余り離れた、右側壁際出土の鉄鍬群である。敷石床よりやや浮いて、右側壁際より長さ約0.85m×幅約0.3mの範囲に、方向性が無い状態で検出された。実測できた鍬は13点であるが、他にも破片が存在する。鍬の型式は、全て有頸有茎鉄鍬で、細根系が9点で柳葉形のものが4点と078 闊袢三角形が1点、広根系が3点で079～081が長三角形である。この広根系長三角形鉄鍬3点は、壁際から出土している。

D群は、奥壁際から2.2m余り離れた、右側壁際出土の大刀・鉄鍬・刀子からなる一群である。右側壁際より長さ約1.3m×幅約0.6mの範囲で検出された。501 直刀大刀と502 大刀柄は、右側壁から0.2～0.24m離れて、501を内側に502を外側に、玄室主軸に方向を合わせて並列して、敷石床よりやや浮いた状態で出土した。501 直刀大刀は、検出時には先端を曲げてはいたが、鉄鍬の帯として約0.88mの長さを確認できた。柄を東に刃を内側に向けて、置かれていた。503 四窓鉤は、この傍らで出土した。502 大刀柄は、大刀の目釘の部分から折れた柄の破片で、検出時には約0.2mの鉄鍬の帯として出土した。鍬は、大刀の奥壁側の壁際から出土している。その型式は、全て有頸有茎鉄鍬で、細根系柳葉形のものが1点、広根系が2点で083 長三角形と084 闊袢三角形である。刀子は2点で、右側壁から約0.8m離れて513 呑口式刀子と、515 刀子がある。他に用途不明の薄い鉄片が、出土している。

この大刀の出土状態は、このD群のあたりに玄室と主軸を同じくする、遺骸の存在を示すものである。

E群は、奥壁際から2.04m余り、左側壁際から0.34m余り離れて出土した鉄鍬である。敷石床よりやや浮いて、2点の鍬片が折り重なるように出土した。周辺では、2次床面の掘り込みにより殆ど遺物が残存していない状況である。

F群は、左側壁の奥壁から3石目と4石目の基底石の隙間から出土した鉄鍬群である。鉄鍬は側壁際から少なくとも0.2m奥に一塊りが放り込まれていた。実測できた鍬は3点であるが、他にも破片が存在する。鍬の型式は、全て有頸有茎鉄鍬で、細根系である。2次床面の掘り込みに伴い出土した鉄鍬の塊を、側壁の隙間に放り込んだものと見られる。よって当初はE群に属していたものと考えられる。



第28图 稲荷山1号墳1次床面金属製品出土状況図

G群は、奥壁際から3.2 m余り、左側壁際から0.6 m余り離れて出土した刀子と鉄鏃群である。敷石床よりやや浮いて、3点の鉄片と少し離れて刀子が出土した。実測できた鏃は3点であるが、他にも破片が僅かに存在する。鏃の型式は、全て有頸有茎鉄鏃で、細根系が3点で088が柳葉形、広根系が2点で089長三角形である。E群同様に、2次床面の掘り込みにより殆ど遺物が残存していない。

H群は、柵石際から0.5 m余り奥壁側で、左側壁際から0.4 m余り離れて出土した521環状鏡板付槽(槽1)である。敷石床よりやや浮いて、散乱した状態で出土している。土器C群の北側に位置する。

I群は、柵石際から1.1 m余り奥壁側で、左側壁際から0.1 m余り離れて出土した522環状鏡板付槽(槽2)である。敷石床よりやや浮いていたが、纏まって出土する。E群の南側に位置するが、壁際であったのが幸いして、2次床面の掘り込みから逃れられたものと考えられる。

(石製品・ガラス製品・耳環の出土状況)

敷石床上面東側の石製品・ガラス製品・耳環(以下、「装飾品」という。)の出土状況を、第29図出土状況図に示す。

これらの装飾品をA～Fの6群に分ける。なお、金属製品である耳環3点をここに加えて報告する。

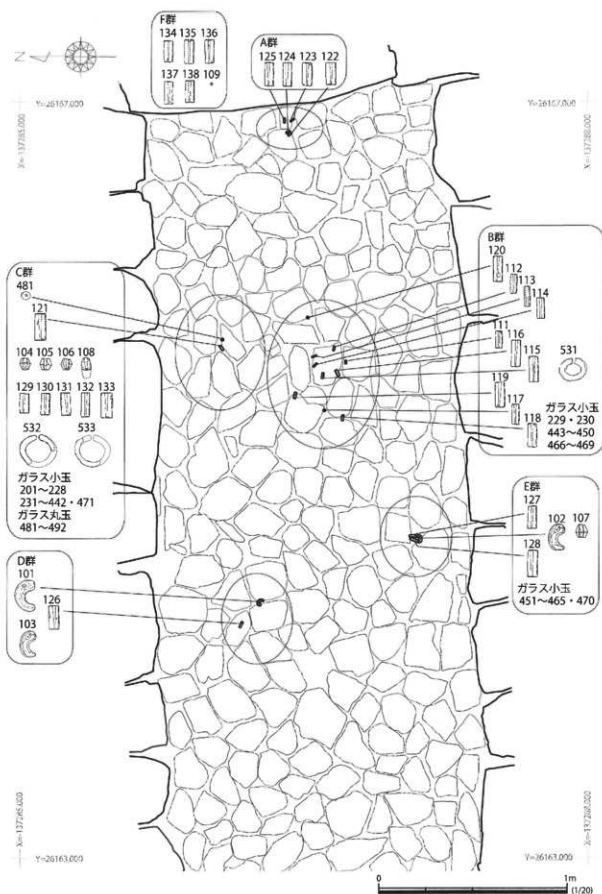
A群は、奥壁際中央出土の管玉群である。敷石床よりやや浮いてはいたが、径0.1 mの範囲に碧玉製管玉4点(122～125)が纏まって出土した。初期埋葬に伴うものである可能性が高い。

B群は、奥壁際から1.4 m余り、左側壁際から0.7 m余り離れた、玄室中央を中心として出土した管玉・ガラス玉・耳環群である。敷石床よりやや浮いているもので、B群中央の径0.18 mの範囲にみられる碧玉製管玉6点(111～116)を中心に、これに加え東西0.8 m×南北0.6 mの範囲に出土した碧玉製管玉4点(117～120)、ガラス製小玉14点(229・230・443～450・466～469)、鉄地中空銀箔張耳環1点(531)からなる。このB群中央の管玉の配置は、首飾的なものを想起させるもので、当初の位置を比較的良好に残しているものと見られる。また、耳環は531鉄地中空銀箔張耳環が1点しか出土していないが、これについてもこの位置が埋葬頭位を示すものであろう。

C群は、奥壁際から1.2 m余り、右側壁際から0.3 m余り離れた、玄室右側壁中央を中心として出土した管玉・ガラス玉・耳環群である。これらも敷石床よりやや浮いているもので、B群の北側に接する位置である。碧玉製管玉1点(121)とガラス製丸玉1点(481)を中心に、これに加え東西0.6 m×南北0.5 mの範囲に出土した碧玉製管玉5点(129～133)、水晶製切子玉3点(104～106)、埋もれ木製環玉1点(108)、ガラス製小玉241点(201～228・231～442・471)、ガラス製丸玉12点(481～492)、銅製中実の耳環2点(532・533)からなる。

D群は、奥壁際から2.6 m余り、右側壁際から0.55 m余り離れた、玄室右側壁西を中心として出土した管玉・勾玉群である。これらも敷石床よりやや浮いているもので、C群の西側に接する位置である。碧玉製管玉1点(126)と碧玉製勾玉1点(101)を中心に、これに瑪瑙製勾玉1点(103)を加えた群からなる。

E群は、奥壁際から2.4 m余り、左側壁際から0.3 m余り離れた、玄室左側壁西を中心として出土した管玉・勾玉群である。これらも敷石床よりやや浮いているもので、D群の南側に接する位置で



第29図 稲荷山1号墳1次床面石製品・ガラス製品・耳環出土状況図

ある。碧玉製管玉2点(127・128)と瑪瑙製勾玉1点(102)の3点が接して出土した地点を中心に、これに水晶製切子玉1点(107)とガラス製小玉16点(451～465・470)を加えた群からなる。

F群は、2007年度に市教育委員会が行った試掘調査の4T-4トレンチ出土の管玉群である。この4T-4トレンチは、第6図に示すように1号墳東側の葺石状敷上であった可能性が高い。この1層から、やや灰緑色の淡い碧玉製管玉5点(134～138)と、133碧玉製管玉の穿孔側面孔内より出土した109滑石製小玉(白玉)が出土した。この場所は、墳丘斜面に撒かれた076須恵器甕や075須恵器短頸壺の墳丘背後の遺物群に伴う遺物である可能性が高い。

〔羨道の閉塞〕

石室の閉塞は、羨道において埋葬終了後に玄室内への侵入を防ぐために実施されるもので、少なくとも2回の閉塞を確認した。調査では羨道敷石と当初の閉塞石との境が不明瞭であったため、峻別には困難を伴った。

当初の閉塞に用いられたと考えられる閉塞石が確認できる範囲は、敷石床の直上に石のみをのせるもので、柩石の上には柩石とほぼ同規模の棒状の石(長辺0.82m×短辺0.35m×厚さ0.21m)を横置きとし、そこから約1.9m西側の開口部までの間において確認された。この西端での位置は、墳丘の第2重石積を少し超えた付近に当たり、羨道天井石が架構されていたと想定している範囲である。残存する高さは、羨道敷石床から最大0.2m余りの高さまでで、上部はほぼ平にされ開口したことを示す。最初の閉塞方法は、石のみで行われたようであり、閉塞石は敷石床に直接のるだけでなく、用いられていた石の大きさが敷石とほぼ同じか少し大きく(長さ0.2～0.5m×幅0.1～0.3m×厚さ0.1～0.2m)、石使いも敷石と同じ横並びに積まれていた。礫の隙間には、上層の閉塞に用いられた15-1層である角礫を含むシルト質粗砂層が流れ込んでいるが、締まりが弱い状態であった。

この当初の閉塞は、天井高を約2mとすると、約45°の角度となることになり、急傾斜となる。このため玄室内への閉塞石の落下防止と柩の支持のために柩石の上に大型の石が据え置かれたと考えられる。

2回目の閉塞は、最終の閉塞を示すものと思われるが、上部を攪乱されていて確証はない。その範囲は、柩石上の棒状の石から約4.5m西側の開口部までの間において確認された。残存する高さは、羨道敷石床から最大で0.5m余りで、上部は玄室際が高く開口部に行くに従い緩やかな坂となっている。堆積層は1層であるが断面を詳細に見ると、閉塞石が玄室側では横方向か開口部側に倒れているのに対し、羨道開口部側では玄室側に倒れているのが第3重石積端の3m付近まで確認され、開口部に拡張している。

閉塞には、15-1層と共に、当初の閉塞石とやや小振りな石(長さ0.1～0.3m×幅0.1～0.2m×厚さ0.05～0.2m)が多用されている。この小振りな石は、新たに運ばれたものと考えられるが、墳丘の葺石状敷石のサイズに近いものでもある。

なお、この両閉塞に係わり出土した遺物は無い。

(2) 2次床面

2次床面は、最終埋葬終了後には大きな利用が行われず経過したことを示していて、この2次床面段階である平安時代中期に始めて石室内に侵入している。床面である14-1層上面から大きな掘り込みを行うと共に、左側壁際の一面で鍛冶が行われ、埋め戻し後に祭祀が行われている。

〔堆積層〕

2次床面までの14-1層の厚みは、奥壁側では0.08～0.1mと薄く、やや敷石床が下がる玄室中央では0.13～0.18m余りと厚く、玄門・柵石側では閉塞石である一辺0.15m余りの礫を多数含む0.13～0.17m余りの厚みである。--見浜道側からの堆積かとも思われるが、2次床面の高さは、奥壁側で標高63.08m余り、玄室中央で標高63.07m余り、玄門・柵石側では63.09m余りで大きく変わらない。閉塞した中で徐々に堆積したものと考えられる。

〔床面の掘り込み範囲と排土〕

2次床面からの掘り込みは、1次床面でも記したように第30図に示す左側壁際中央の東西約2.65m×南北約1.15mの範囲で、底は敷石床に達している。この掘り込みによる遺物は、南西墳丘斜面に排上されており、その遺物分布については既に第19図と第20図に示した。

〔鍛冶遺構〕

奥壁から約2.65m西の左側壁際を中心に、2次床面からの掘り込み内に、東西0.33m×南北0.35mのほぼ円形の焼土範囲があり、この範囲が鍛冶炉とみられる。この焼土範囲から側壁にかけて重なるように東西0.63m×南北0.34mの切炭範囲が残る。焼土範囲の真上には、横向きに031羅の羽口を置いていた。

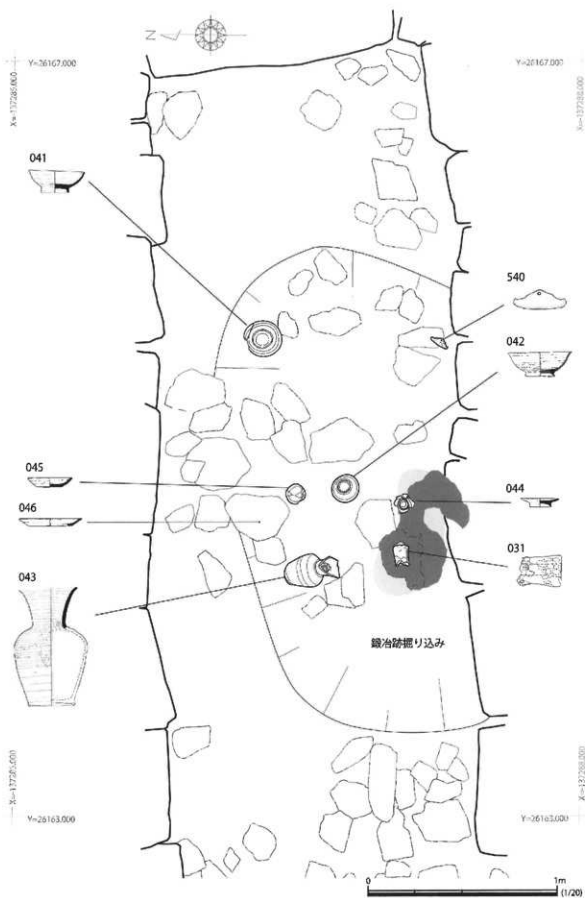
埴埴等の出土はなく、鍛造片についても土洗いで検出せず、小鍛冶を行った形跡はない。切炭範囲の東側から、540鉄製火打金が1点出土している。火打石については出土していないが、見落とした可能性がある。また、この鍛冶により左側壁中央から天井部にかけては、煤により真っ黒になっていた。

〔鍛冶終了後の祭祀〕

この鍛冶は、終了後に炭の混ざる13-3層で埋め戻されている。この上面で第30図の6点の遺物が出土している。埋め戻した13-3層上面に下を向けた044土師器台付皿が、その北側に同じく伏せた042灰釉陶器碗、横倒しの口縁を欠く043灰釉陶器長頸壺、上を向けた灯心痕が残る045土師器小皿、隣り合う平石上から046土師器大皿片が、少し北東に離れて伏せた041灰釉陶器碗が出土している。この内046土師器大皿を除き、他の遺物はほぼ完形品である。

これらの遺物は、羅の羽口の置かれ方や貴重な道具であるはずの火打金の放棄、完形土師器の放棄など、鍛冶に係わる何等かの祭祀を行ってから、埴埴内にできた製品を他の場所に持ち帰り小鍛冶作業を行ったものと思われる。

ここで問題となるのは、材料は何だったのかということと、何故ここでやったのかという点である。想像でしかないが、前者については古墳内の鉄製品を用いてこの場所で粗鋼にした可能性を残すものである。後者については、開口していたとはいえ、この狭い空間での作業にどの様な意味が



第30図 稲荷山1号墳2次床面掘り込み内鍔拵遺構図

あったのかは、先祖祭祀や修験道との係わり等も含め不明である。

(3) 3次床面

3次床面は、第25図に示す様に、床面である13-2層上面の状況である。遺物の出土が無く、時期は不明である。

〔堆積層〕

3次床面までの13-2層角礫を含む粗砂質シルトの厚みは、奥壁側では0.1mと薄く、玄室中央では0.25m余りと厚く、玄門・柩石側でも0.27m余りの厚みである。開口していたとみられる、羨道と玄室前面の天井部からの堆積と考えられるが、極めて穏やかな堆積である。

〔床面〕

3次床面の北側に一辺0.3m大の礫が多数持ち込まれているが、その意味するところは不明で、遺物は076と077の須恵器甕の破片が出土している。ただ、何かに用いられていたことは確かなようであるが、詳細は明らかでない。

(4) 4次床面

4次床面は、第25図に示す様に、床面である13-1層上面の状況である。遺物の出土が無く、この面についても時期は不明である。

〔堆積層〕

4次床面までの13-1層角礫を含むシルト質粗砂の厚みは、奥壁側では0.35mと厚く、玄室中央では0.25m余り、玄門・柩石側では0.15～0.2m余りと薄い。奥壁上部が壊され、そこから土砂や水が浸入した可能性がある。しかし、4次床面の高さは、奥壁側で標高63.5m余り、玄室中央で標高63.55m余り、玄門・柩石側では63.5m余りで大きく変わらない。これも奥壁側からの、穏やかな堆積によるものとみられる。しかし、これ以降は羨道や玄室前面の破壊が大きく進んだようで、羨道からの12層シルト質中砂～粗砂の傾斜堆積のみとなる。

〔床面〕

4次床面の中央には、一辺0.2～0.6mの大形礫が持ち込まれていて、玄室を前後に分けている。石の上面を平に置いていることから意図的なものを感じるが、その意味するところは3次床面と共に不明で、遺物も出土していない。この大形礫は、奥壁盗掘坑から投入した可能性がある。

第4節 出土遺物

出土遺物は、主に石室内の1次床面・2次床面の出土遺物と墳丘の出土遺物に分かれる。各遺物の実測図を第31～15図に、各遺物の数値や成形調整手法等を第6表に示す。

1) 1次床面

1次床面からは、土器には須恵器の坏身、坏蓋、有蓋短脚無窓高坏、有蓋高坏蓋、提瓶、甕、フラスコ形瓶が、土師器には鉢が、石製品には勾玉、切子玉、隼玉、小玉(白玉)、管玉が、ガラス製品には小玉、丸玉が、金属製品には大刀、刀子、耳環、轡、鐙が出土した。

(1) 土器

[須恵器]

坏蓋(001～008)

坏蓋は、001～008までの8点である。口縁の一部を欠くがほぼ完形品か、完形品である。この内、合わせ口のセットとして出土したのは、土器A群より出土した009坏身に002坏蓋がのるものと、土器C群から出土した011坏身に007坏蓋がのる、2組である。

001は口径12.8cm×器高4.8cm、002は口径13.1cm×器高4.7cmで、天井部はなだらかな丸みを持ち、上部には強いヨコナデ調整が行われ、稜部は明瞭な段で天井部と区切られ、小さいが鋭く突き出す。

002は口縁部が少し開き気味に真っ直ぐ下がり、001はやや内彎してかすかに外反するが、口縁内面凹部は幅が広く薄い。天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭く、天井部の厚みは厚い。器壁は薄く、丁寧な作りである。なお、002の天井部には、ヘラ記号「|」かと思われるものがある。猿投窯系と推定される。

003は口径13.1cm×器高4.3cm、004は口径13.2cm×器高4.0cm、005は口径13.8cm×器高4.7cmで、天井部は扁平で丸みを持ち、稜部上には強いヨコナデ調整が行われ、稜部は天井部との境に段をなすが、やや丸みをおびる。口縁部は内彎し端部を僅かに外反する。口縁内面には面をもつが、004・005では段が明瞭で005はさらに窪めるが、003では不明瞭である。天井部のヘラケズリの範囲は1/2～3/4と広いが、全体に器壁は厚い。なお、003は墳丘外との接合資料である。003と004には贅(2002)のいう逆位焼成痕がみられる。これは、通常(正位)の坏身坏蓋の重ね焼きが、坏身と坏蓋を被せたセット状態のものを複数重ねて焼成するのに対し、坏身の上にセットとなる坏蓋を天地逆に被せて置き、これを繰り返して複数重ねて最上部のみ正位で蓋をする焼成で、焼成個数はやや増加し効率は良いが、窯体内での安定感はいくつかない。湖西窯を含めた在地産と推定される。

006は口径13.2cm×器高4.2cm、008は口径14.0cm×器高4.8cmで、006は天井部が扁平で丸みを持ち、008は張りのある丸みを持つ。稜部は凹線を巡らせて相対的に際立たせたもので、退化傾向にある。口縁部は内彎し、尖り気味に丸く調整する。天井部のヘラケズリの範囲は、1/2余りである。また、006と008は、手擦れによる痕跡が無く、未使用品である。埋葬の供献品として、新調されたものと思われる。湖西産を含めた在地産と推定される。

007は口径13.8cm×器高4.3cmで、天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3余りと狭いが、これ

により天井部中央に平らな部分を作る。天井部の厚みは厚い。稜部は凹線を巡らせたもので、退化傾向にある。口縁部は内彎し、薄く仕上げる。端部内面に幅の狭い内傾する面を作る。生産地は不明であるが、稲荷山3号墳墳丘上の遺物(3～5)や四ツ塚4号墳前溝(豊橋市中原町)出土の遺物(1～3・5～7)などは、同様な特徴を持つものであり、湖西窯を含めた在地産と推定される。

坏身(009～011)

坏身は009～011の3点である。口縁の一部を欠くがほぼ完形品か、完形品である。

009は口径11.8cm×器高5.2cm、底部はゆるやかな丸みを持ち受部にいたる。受部は底部との境に明瞭な凹部を巡らし、大きく外反して受部を作る。受部は斜めに引き上げられる。口縁部はやや外反しながら高く立ち上がり、端部を丸く収め、内面には幅が広く薄い凹部を作る。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3余りで狭く、天井部の厚みは厚い。丁寧な作りである。猿投窯系と推定される。

010坏身は口径12.1cm×器高4.1cm、底部は扁平で丸みを持ち、受部は底部との境に凹部を巡らし、外反して受部を作る。受部は水平に引き出される。口縁部はやや内彎しながら立ち上がり、内面には幅の狭い凹部を作る。全体に器壁は厚い。底部の回転ヘラケズリの範囲は、受部付近まで行っている。逆位焼成痕がみられる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

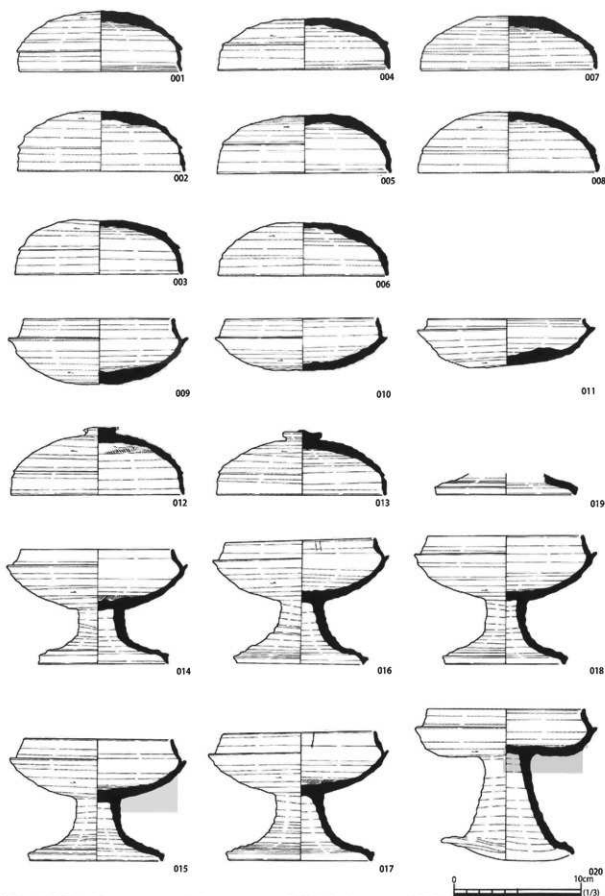
011は口径12.2cm×器高4.0cm、底部は平で厚く、受部は底部との境にヨコナデを行って水平にする。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、内面には幅の狭い内傾する面を作る。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/3余りと狭く、これにより平らな面を作る。しかし、底部は厚い。器面には手擦れによる磨滅痕があり、新調されたものではない。007と011はセット関係にあり、その成形や調整法もよく合致している。湖西窯を含めた在地産と推定される。

高坏(012～020)

有蓋高坏の蓋は012と013の2点で、有蓋短脚無窓高坏は014～018・020の6点、高坏の脚部破片019と思われるものが1点ある。合わせて9点である。蓋付となる長頸壺や短頸壺等の出土が無いので、全て高坏の蓋と考える。この内の8点は口縁を一部欠くがほぼ完形品か完形品で、019のみ破片である。合わせ口のセットとして出土したものは無いが、土器B群より出土した013有蓋高坏蓋と015有蓋短脚無窓高坏は可能性の高い一組である。

012は口径13.5cm×器高5.3cm、013は口径13.2cm×器高5.1cmで、天井部は張りがある丸みを持ち、稜部は小規模で丸みをおび、上部には強いヨコナデ調整がみられる。口縁部は外傾し、端部内面に凹部を作り僅かに外反する。天井部のヘラケズリ調整は、1/3～1/2の範囲を行う。天井上部に、中央部が突き出る平らな鈕をつける。猿投窯系と推定される。

014は口径11.8cm×器高9.1cm、015は口径11.7cm×器高9.7cm、016は口径11.7cm×器高10.0cm、017は口径12.0cm×器高10.4cm、018は口径12.2cm×器高10.2cmで、底部は張りのある丸みを持ち受部にいたる。受部は上部に鋭く開く。口縁部は、内傾して立ち上がり、端部は丸く収める。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/2余りである。脚部に透かしはなく、円柱部から裾広がりになり端部にいたる。脚径は、014が10.1cm、015が10.4cm、016が9.8cm、017が11.2cm、018が9.2cmである。脚部の端部は、2段の断面三角形で、014が段部から端部外面を直立させるのに対し、



稲荷山1号墳 須恵器 坏蓋 (001～006・008)・坏身 (007・009～011)・有蓋低脚高坏の蓋 (012・013)・有蓋低脚高坏 (014～020)

第31-1図 稲荷山1号墳遺物実測図

015～018及び脚部破片である019は段部から端部外面を内傾させている。なお、016の口縁部端部内面にヘラ記号「|」が、017の口縁部端部内面にヘラ記号「|」がある。猿投窯系と推定される。

020は口径12.2cm×器高11.5cmで、底部中央は平で余り丸みが無く受部にいたる。受部は水平に突き出すが鋭さはない。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は口縁内面に面をもち丸く収める。底部のヘラケズリ調整は、1/2余りの範囲に行う。脚部に透かしはなく、裾部にハの字に広がり端部にいたる。脚径は焼け歪みが酷いため計測できないが、11cm余りと考えられる。脚部の端部は段部から三角形の端部外面を外傾斜させる。また、020は色調が黄灰色で、逆位焼成痕を残す。湖西窯を含めた在地産と推定される。

提 瓶 (021)

021は、口径10.3～11.6cm×高さ(23.3)cmで、いわゆる大形提瓶の完形品である。ハの字に開く頸部に、片側が平坦で、片側が丸みをもった円形の体部が取り付く。口縁部は外側に開き、端部はごく短く上方につまんで内傾する面を作る。直下には断面三角形の段部を巡らせる。頸部中程に浅い沈線が2条巡る。体部にも側面に1条の沈線が巡る。体部側面には装飾的な稜形状の叩き施し、丸みのある側を回転ヘラケズリとし、他を回転ヨコナデとする。生産地は不明であるが、調整法などから湖西窯を含めた在地産と推定される。

フラスコ形瓶 (022・023)

022は、口径6.0cm×高さ15.4cmで、フラスコ形の長頸提瓶の完形品である。口頸部は細頸でハの字に開き、端部をやや内傾させてつまみ上げる。頸部には口縁に近い位置に、2条の沈線が巡る。体部は球形ではなく、片側に平坦部があり、片側が丸みをもったもので、体部側面に3条の沈線が巡る。湖西窯を含めた在地産と推定される。

023は、口径7.2cm×高さ20.5cmで、フラスコ形瓶の完形品である。口頸部は細頸でハの字に開き、端部外面をやや内傾させてつまみ上げる。頸部には頸部の中位に、2条の沈線が巡る。体部は021と同様に球形ではなく、片側に平坦部があり、片側が丸みをもったもので、体部側面に2条と球形体部中央に2条の同心円の沈線が巡る。湖西窯と推定される。

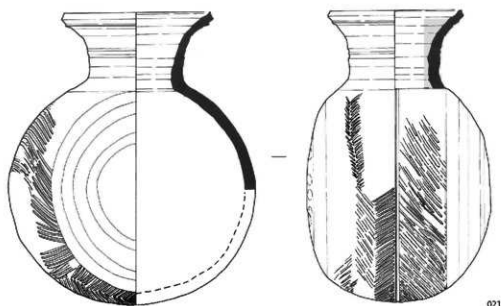
甕 (024)

024は、体部径9.2cm×体部高6.8cmで、体部から頸部の段部にかけてのもので口縁部のみを欠く。体部は肩の張らない球形に近く、沈線一条以外に刺突等の装飾はなく、注口のための直径1.5cmの孔を穿つ。頸部はラッパ状に開き、三角形の段を作る。推定口径は12.6cmで、推定器高は16.2cm余りと推定される。

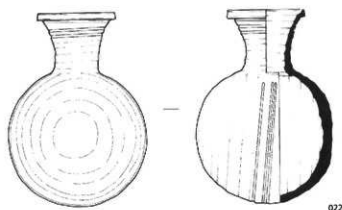
〔土師器〕

鉢 (025)

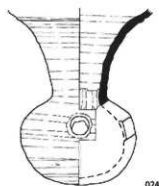
025は、口径11.8cm×高さ8.0cmで、丸底の長胴甕の底部と同じ手法で作られた鉢形の土器である。口縁部は丸く調整するもので、内外面共に刷毛目調整とする。甕と同様な使われ方をしたものと思われる。



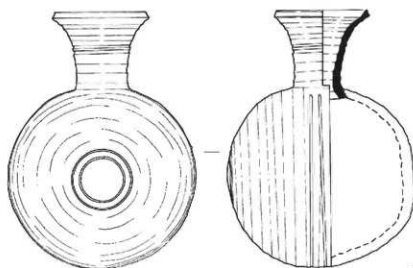
021



022



024



023



025



稲荷山1号墳 須恵器 提瓶(021)・フラスコ形瓶(022・023)・壺(024)、土師器 鉢(025)

第31-2図 稲荷山1号墳遺物実測図

(2) 石製品

〔勾玉〕

勾玉は3点出土している。

101は、長さ3.7cm×幅2.4cm×厚さ1.25cm×重さ12.6gの碧玉製で、完形品である。原石は良質な濃緑色の部分を使用している。頭部の張り出しに対して、腹部の挟りが深く丸いため、背は丸みが強い。尾部は頭部よりもやや細く作る。側面の厚みもほぼ等しく、丁寧に研磨し仕上げられている。穿孔は片面穿孔で、穿孔面は平滑でその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。

102は、長さ3.1cm×幅1.9cm×厚さ1.05cm×重さ6.8gの瑪瑙製で、完形品である。原石は白濁の多い部分を使用している。比較的腹部の挟りは浅く、背は扁平で丸みが少ない。背にやや稜を残す。側面には原石の形状からか、薄くなりすぎた部分が生じている。穿孔は片面穿孔で、穿孔面は平滑でその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。

103は、長さ3.3cm×幅2.2cm×厚さ1.1cm×重さ10.1gの瑪瑙製で、完形品である。原石は白濁の多い部分を使用している。頭部は大きく、腹部の挟りは浅く、背は丸みが大きい。側面には研磨が不十分な部分があるが、厚みは等しく仕上げられている。穿孔は片面穿孔であるが、穿孔面が平滑ではないので、石製工具で穿孔されたものと推測される。

〔切子玉〕

切子玉は4点出土していて、全て水晶製である。

104は長さ1.35cm×幅0.85～1.25cm×重さ2.1g、105は長さ1.35cm×幅1.3～1.4cm×重さ3.0g、106は長さ1.4cm×幅0.9～1.4cm×重さ2.7g、107は長さ1.55cm×幅1.35cm×重さ3.1gで、全て完形品である。原石は無色透明な部分を使用している。104は高さの低いやや扁平な体部、105～107は高さ幅共に同じ方形の体部で、上下共に六面体にする。穿孔は片面穿孔で、穿孔面は平滑でその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。

〔環玉〕

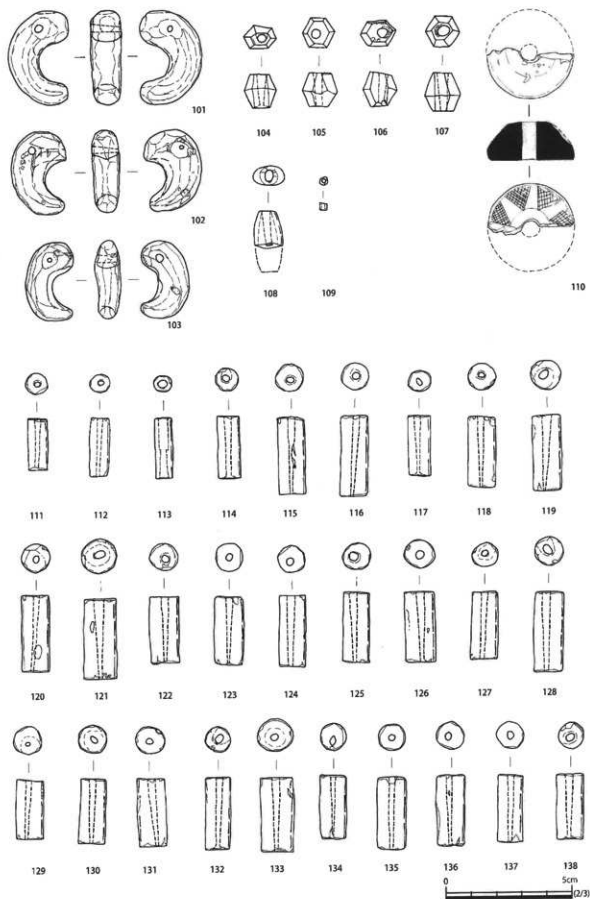
環玉は1点出土していて、埋もれ木製である。

108は1/2を欠くもので、長さ(1.5)cm×幅1.15cm×厚さ0.85cm×重さ(1.1)gで、断面楕円形の体部に長さは2.5cm余りであったと思われる。穿孔は片面穿孔と見られるが不明である。

〔管玉〕

管玉は、試掘調査で出土した5点と、石室内から出土した23点の28点が出土していて、全て碧玉製で、完形品である。

石室内より出土した23点の管玉は、DG(ディー・グリーン) 暗緑灰色～G(グリーン) 緑色の碧玉を石材とし、直径並びに長さにもバラツキが見られる。この内、最も細い113は、長さ2.4cm×直径0.7cm×重さは1.8gで、穿孔は両面穿孔で、穿孔面が平滑でありその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測されるものである。他の22点である111・112・114～138は、長さ2.05～3.25cm×直径0.75～1.4cm×重さ2.8～11.7gの範囲である。穿孔は片面穿孔で、穿孔面は平滑でその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。



稻荷山1号墳 勾玉 (101~103)・切子玉 (104~107)・黒玉 (108)・小玉 (109)・銅鏡 (110)・管玉 (111~138)

第31-3图 稻荷山1号墳遺物実測図

試掘調査で出土した5点の管玉134～137は、EG(エグドグリーン) 淡い緑色の碧玉で、長さ2.55～2.9cm×直径1.0～1.1cm×重さ5.4～7.1gの範囲である。穿孔は片面穿孔で、穿孔面は平滑でその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。

〔小 玉〕

小玉(白玉)は1点出土していて、滑石製である。

109は管玉138の穿孔面の孔内から出土したもので、長さ0.3cm×直径0.3cm×重さ0.1g以下である。穿孔は片面穿孔で、穿孔面が平滑でありその形状から鉄製工具で穿孔されたものと推測される。

(3) ガラス製品

〔小 玉〕

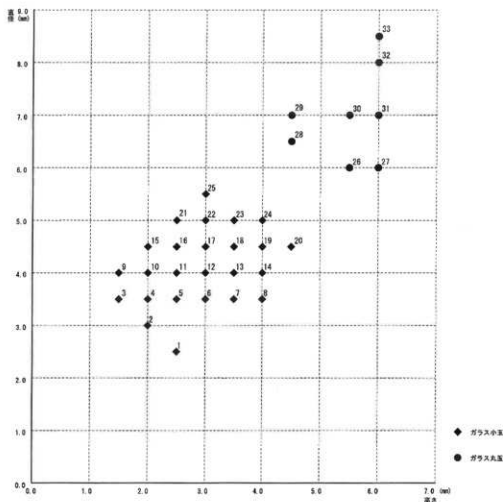
小玉は271点を確認したが、小片も少なからずあるので、総数は280点近く存在していたものとみられる。第2表に、小口直径と高さの相関図を示す。

最も小さな小玉は235の直径(小口長径)2.5mm×高さ(厚さ)2.5mm×重さ0.1gで、最大の小玉は239・441の直径5.5mm×高さ3.0mm×重さ0.2gや、236・262の直径4.5mm×高さ4.5mm×重さ0.2gである。側面形状は樽型で、製作技法は引き伸ばし法である。

相関図からみた小玉数量は、4箇所に数量のピークがみられる。一つ目のピークは相関図の4で、直径3.5mm×高さ2.0mm×重さ0.1gの19点(7%)である。隣り合う相関図の5の直径3.5mm×高さ2.5mm×重さ0.2gの15点を加えると、34点(12%)となる。二つ目のピークは相関図の10で、直径4.0mm×高さ2.0mm×重さ0.1gの69点(25%)である。隣り合う相関図の11の直径4.0mm×高さ2.5mm×重さ0.1gの34点と、12の直径4.0mm×高さ3.0mm×重さ0.1gの29点を加えた10～12の点数は、これだけで132点(49%)と半分近くを占める。三つ目のピークは相関図の17で、直径4.5mm×高さ3.0mm×重さ0.1gの12点(4%)である。四つ目のピークは相関図の22で、直径5.0mm×高さ3.0mm×0.1gの18点(6%)である。

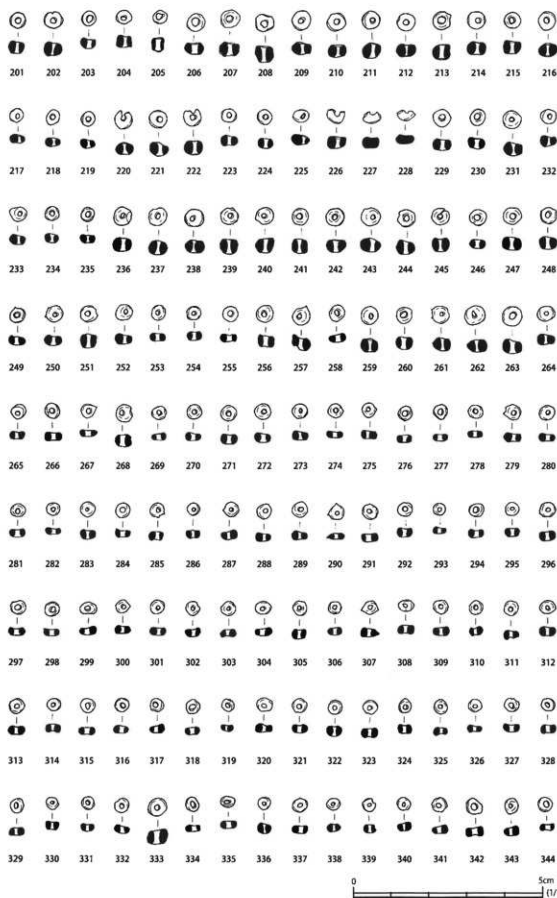
第29図の装飾品B群には、229・230・443～450・466～469の14点のガラス小玉が出土しているが、これは相関図の4が1点、10が8点、12が1点、15が2点、17が1点、22が1点で、10の直径4.0mm×高さ2.0mm×重さ0.1gが8点(57%)と主体を占める。装飾品C群では、201～228・231～442・471の241点が出土しているが、これは相関図の1が1点、2が6点、3が2点、4が18点、5が15点、6が3点、7が1点、8が1点、10が49点、11が34点、12が28点、13が7点、14が6点、15が5点、16が1点、17が11点、18が7点、19が6点、20が2点、21が1点、22が17点、23が8点、24が7点、25が2点で、これも10～12の直径4.0mm×高さ2.0～3.0mm×重さ0.1gで111点(46%)を占める。装飾品E群では、451～465・470の16点が出土しているが、これは相関図の7が2点、9が1点、10が12点、24が1点で、これも10の直径4.0mm×高さ2.0mm×重さ0.1gが12点(75%)と、やはり主体を占める。製作者は直径4.0mm×高さ2.0～3.0mm×重さ0.1gの、比較的平らな一群の製作を企画していたものとみられる。

色調をDB(ディープブルー)、SB(スラットブルー)、CB(キャブブルー)、DG(ディープグリーン)、MG(ミッドグリーン)、G(グリーン)、CG(キャブグリーン)、EG(エグドグリーン)、Y(イエロー)の9色に分類した。ブルー系はDBが242点(89%)、SB

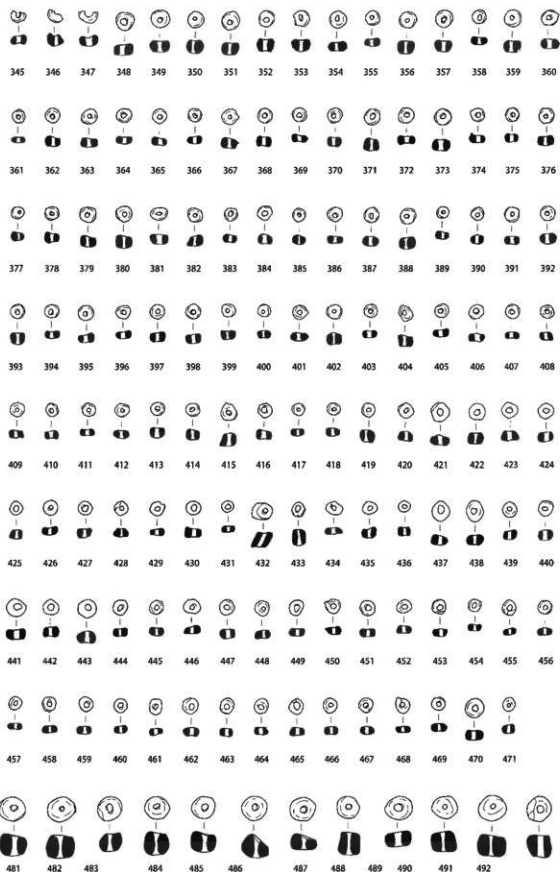


遺物番号	
1	239
2	303 316 327 329 366 436
3	581 431
4	274 290 330 311 322 334 338 339 344 377 383 389 407 408 410 417 418 426 469
5	217 219 282 283 292 299 302 307 314 321 325 328 340 385 390
6	203 336 362
7	419 462 484
8	453
9	463
10	218 251 258 259 260 264 271 273 275 278 279 281 281 295 297 298 301 305 312 313 315 318 323 324 332
11	335 341 355 358 363 364 365 369 372 375 386 394 396 400 403 405 406 409 411 412 425 426 434 444 445
12	446 447 448 449 451 452 453 454 455 458 457 458 459 460 461 465 466 467 471 483 446 376 374 376 381
13	210 247 252 371 386 393 415
14	305 215 237 238 330 432
15	364 277 287 288 401 450 468
16	228
17	225 229 257 265 301 301 354 357 359 367 373 422
18	214 222 253 264 350 358
19	213 241 242 244 246 250
20	236 262
21	437
22	368 210 220 224 227 228 243 252 255 245 246 246 363 421 423 436 441 443
23	307 206 212 214 221 243 246 281
24	202 206 211 221 240 245 248 470
25	239 441
26	485
27	484 407 488
28	483
29	489
30	490
31	481 486 492
32	491
33	482

第2表 稲荷山1号墳ガラス小玉・丸玉小口直径/高さ相関表



稲荷山1号墳 ガラス製小玉 (201～344)



稲荷山1号墳 ガラス製小玉 (345～471)・ガラス製丸玉 (481～492)

第31-5図 稲荷山1号墳遺物実測図

は2点(1%以下)、CBは6点(2%)で250点(92%)であるのに対し、グリーン系はDGが6点(2%)で、MGは4点(1%)、Gは2点(1%以下)、CGは6点(2%)、EGは2点(1%以下)で20点(7%)であった。Yは1点(1%以下)のみの出土であった。やはり、主体はブルーの中でもDBである藍色にあったことが確認できる。

〔丸 玉〕

丸玉は12点が出土した。第2表により、小口直径と高さの相関図を示す。

最も小さな丸玉は485で、直径(小口長径)6.0mm×高さ(厚さ)5.5mm×重さ0.3gで、最大の小玉は482の直径8.5mm×高さ6.0mm×重さ0.6gである。側面形状は樽型で、製作技法は引き伸ばし法である。

第29図の装飾品C群から12点全てが出土していて、他の群からの出土はない。

色調はDB(ディープブルー)のみで、小玉との配置やバランス関係を意識し、最も多いDB藍色にしたものと考えられる。

(4) 金属製品

〔大 刀〕

大刀は2点で、鐔が1点出土している。全て鉄製である。

501直刀大刀は金属製品D群の右側壁から0.2～0.24m離れ、501を内側に502を外側の壁側にし、柄を東に刃を内側に向けて、玄室主軸に方向を合わせて並列した状態で出土していた。501は、検出時においては鉄錆の帯として約0.88mの長さを確認できたが、鍛造製品にありがちな層状剥離を起こしていて遺存状態は極めて悪く、取り上げられたのは残存長26.1cm×刃部幅3.1cm×刃部(背)厚1.05cmで、刀身・関・鐔・茎を残す鉄製の直刀で、後述する503鐔と共に鐔付大刀を構成する。刃部は、残存長23.0cm×刃部(背)厚1.05cm×刃部幅3.1cmで背と側面にやや膨らみのある逆二等辺三角形の平造である。刃部と茎部との境に刃部側に0.8cmの関をもつ片関で、直角をなす。茎部は、残存長3.1cm×茎部(背)厚1.05cm×茎部幅2.3cmで、軸方向の木質を僅かに残すが、目釘孔は残していない。装具は、幅1.4cm×厚さ0.25cmの帯が、縦2.4cm×横幅1.9cmの倒卵形に一巡する鐔を残す。鞘等は遺存していない

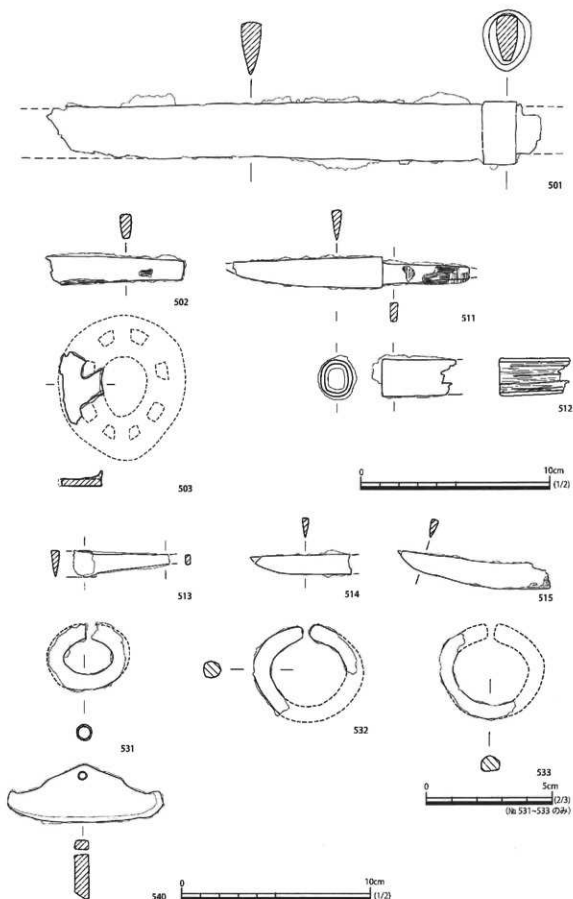
502大刀の茎は残存長7.3cm×最大茎部幅1.5cm×茎部(背)厚0.5cmで、茎尻の幅を僅かに細めた一文字尻で、目釘部分で折れる。目釘穴の径は、0.3～0.45cmである。501の茎部分である可能性もあるが、直接接合しないため、ここでは別個体として扱う。

503鐔は501の傍らに遺存した小破片で、501の装具としての板鐔と考えている。鐔は八窓鐔と考えられ、501大刀の鐔から、縦(5.7)cm×横幅(5.0)cm余りの倒卵形に復元される。内孔は、縦(2.1)cm×横幅(1.5)cm余りの倒卵形に復元される。鐔の内孔縁には、鐔か責金具と見られる金具の一部が付着する。

〔刀 子〕

刀子は、刀身が4点と刀子柄が1点出土している。刀身は全て鉄製である。

511刀子と512刀子柄は、金属製品B群の奥壁側中央出土で、折り重なるように出土した。511は両関の呑口式の刀子である。切先と茎尻の部分を欠くもので残存長12.45cm、刃部残存長7.85cm×



稲荷山1号墳 鉄製大刀 (501・502)・鉄製刀 (511～515)・鉄中空鍔部短耳環 (531)・鉄製中央耳環 (532・533)・鉄製火打金 (540)

第31-6図 稲荷山1号墳遺物実測図

最大刃部幅1.65cm×刃部(背)厚0.45cmの断面二等辺三角形で、茎残存長4.6cm×最大茎部幅0.95cm×茎部(背)厚0.4cmで断面長方形である。茎部には柄の木質とそれを巻く繊維痕跡が残る。この511に被る骨角製の柄が512で、残存長4.4cm、楕円形骨角(鹿の角?)の外側は縦1.5cm×横幅1.25cm余りである。内側には、接合に係わる縦方向の条痕がみられる。

513は金属製品D群から出土していて、両側の呑口式の刀子である。刃部の大部分と柄尻を欠く。残存長5.1cm、刃部残存長1.35cm×最大刃部幅1.0cm×刃部(背)厚0.4cm、茎残存長3.75cm×最大茎部幅0.7cm×茎部(背)厚0.25cmである。

514は金属製品G群から出土していて、切先と刃部身から柄部を欠く刀子である。残存長5.45cm、刃部残存長5.45cm×最大刃部幅1.05cm×刃部(背)厚0.3cmである。

515は金属製品D群から出土していて、切先と刃部身から柄部を欠く刀子で、逆く字に曲がる長さ5.3cmの刃部をもつ。間まで刃は存在していない。残存長8.0cm、最大刃部幅1.4cm×刃部(背)厚0.34cmである。その形状から通常の刀子ではなく、宮(1998)のいう矢柄研磨用の刀子の可能性をもつものである。

〔轡〕

馬具の轡が2点出土している。全て鉄製である。

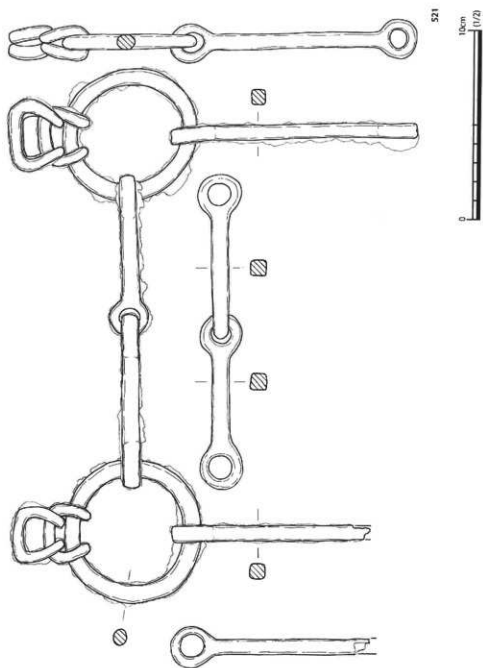
521(轡1)は、金属製品H群から出土しており、一本の引手壺を欠くが他は完存する、引手・銜別連法による素環状鏡板付轡である。装飾のない(素)環状鏡板は、造り付け立間をもたず2連の兵庫鎖を立間とする、環外径が6.8～7.4cmのほぼ円形、断面は0.9×0.7cmの楕円形である。引手は、壺の付け根を屈曲させない一本柄の直柄引手で、引手長13.0cm、引手内環は外径が2.0～2.2cm、引手外環である壺は外径が2.0～2.1cmで、断面は0.8×0.7cmの隅丸方形に作る。銜は二連式で、2本の柄の小さな環で鏡板に連結する小環銜である。銜長16.55cm、銜内環が咬みあう御金の外径が2.1～2.2cm、銜外環である銜先環の外径が2.1～2.2cmで、断面は0.8×0.8cmの隅丸方形に作る。銜や引手の環接合は、鍛造による折り返し成形によるものである。

522(轡2)は、金属製品I群から出土していて、一本の引手の中間を欠くが他は完存する、引手・銜別連法による素環状鏡板付轡である。装飾のない(素)環状鏡板は、造り付け立間をもたず、環外径が8.0～9.7cmのほぼ円形、断面は直径0.9cmの円形である。引手は、壺の付け根を屈曲させるく字引手で、引手長13.3cm、引手内環は外径が2.4～2.8cm、引手外環である壺は外径が2.2～2.8cmで、断面は0.7×0.9cmの隅丸方形に作る。銜は二連式で、2本の柄の小さな蕨手状の端環を持つ蕨手轡である。銜長13.85cm、銜内環が咬みあう御金の外径が2.3～2.5cm、銜外環である銜先環の外径が2.2～2.7cmで、断面は0.7×0.8cmの隅丸方形か直径0.9cmの円形に作る。銜や引手の環接合は、伸ばした部分を蕨手に折り返す折り曲げ成形によるものである。

〔耳環〕

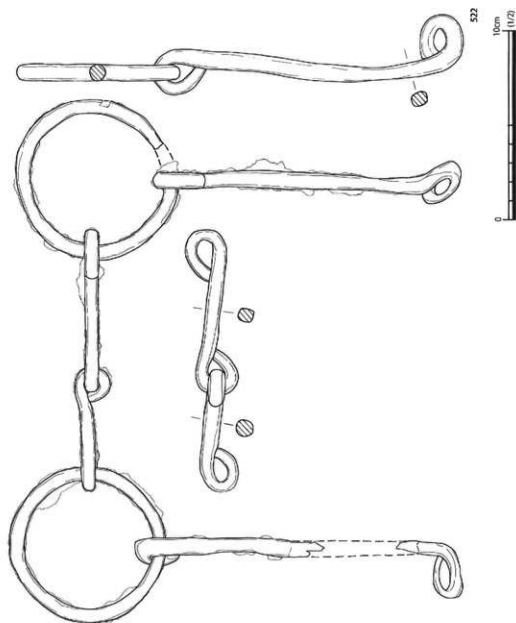
耳環は3点出土している。

531(耳環1)は、金属製品B群から出土していて、腐蝕が激しいが4/5余を残す、鉄地中空銀箔張り耳環と考えられる。耳環の環外径は横(3.1)cm×縦(2.6)cmの楕円形で、断面は0.55×0.6cmのほぼ円形である。構造は、X線写真からもわかるように、厚さ0.1cmの鉄製薄板中空円柱を巻い



稲荷山1号墳 鉄製帯 1(521)

第31-7図 稲荷山1号墳遺物実測図



福寿山1号墳 鉄製器 2(S22)

第31-8図 遺物実測図

531(耳環1)

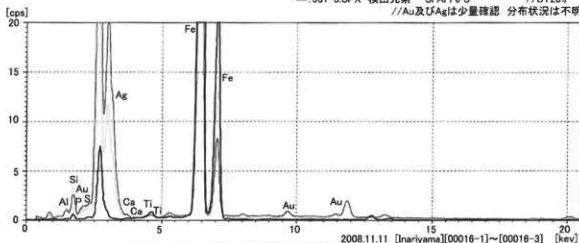
破断面にて3ヶ所測定

—:531-1.SPX 検出元素 Si Al Fe Au Ag S Ca Ti //DT27%

—:531-2.SPX 検出元素 Si Al Fe Au Ag //DT28%

—:531-3.SPX 検出元素 Si Al Fe S //DT28%

//Au及びAgは少量確認 分布状況は不明



第3-1表 稲荷山1号墳耳環1蛍光X線分析スペクトル表

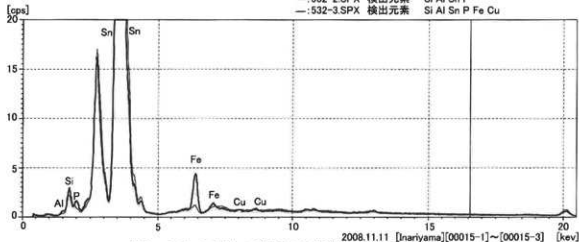
532(耳環2)

破断面にて黒色部分3ヶ所測定

—:532-1.SPX 検出元素 Si Al Sn P

—:532-2.SPX 検出元素 Si Al Sn P

—:532-3.SPX 検出元素 Si Al Sn P Fe Cu



第3-2表 稲荷山1号墳耳環2蛍光X線分析スペクトル表

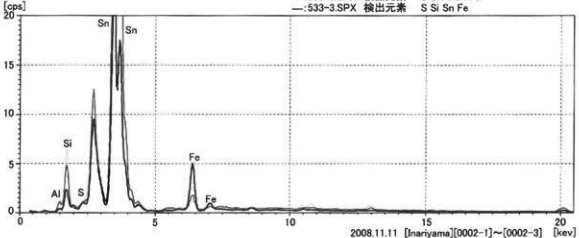
533(耳環3)

破断面にて3ヶ所測定

—:533-1.SPX 検出元素 S Si Al Sn Fe

—:533-2.SPX 検出元素 S Si Al Sn Fe

—:533-3.SPX 検出元素 S Si Sn Fe



第3-3表 稲荷山1号墳耳環3蛍光X線分析スペクトル表

てリング状に作ったもので、第3-1表の蛍光X線分析により明らかとなったように、表面にのみAg銀が確認されることから、外面に銀箔を張ったものか、または鍍銀したものと考えられる。これらについては、今後の電子顕微鏡等の詳細な表面観察や成分分析研究を持って明らかにしたい。

532(耳環2)は、金属製品C群から出土していて、腐蝕が激しく1/2余りを残す、錫製中実耳環である。耳環の環外径は横(4.4)cm×縦(3.9)cmの楕円形で、断面は直径0.7cmの多面体円形である。構造は、錫の棒を何かに巻き付けてリング状に曲げたもので、第3-2表によりみると、外面に特に金や銀といった表面加工は行っていないようである。

533(耳環3)は、532と同じ金属製品C群から出土していて、腐蝕が激しく2/3余りを残す、錫製中実耳環である。耳環の環外径は横(4.2)cm×縦(3.6)cmの楕円形で、断面は直径0.7×0.65cmの多面体円形である。構造は、532と同様で錫の棒を何かに巻き付けてリング状に曲げたもので、第3-3表によりみると、外面に特に金や銀といった表面加工は行っていない。

532と533の2点は、直径4cm余りの耳環で、一般的な直径3cm余りの銅製よりもやや大きく、錫の無垢からなる錫製中実という質素な造りで、重さにおいてもやや重かったものと思われる。

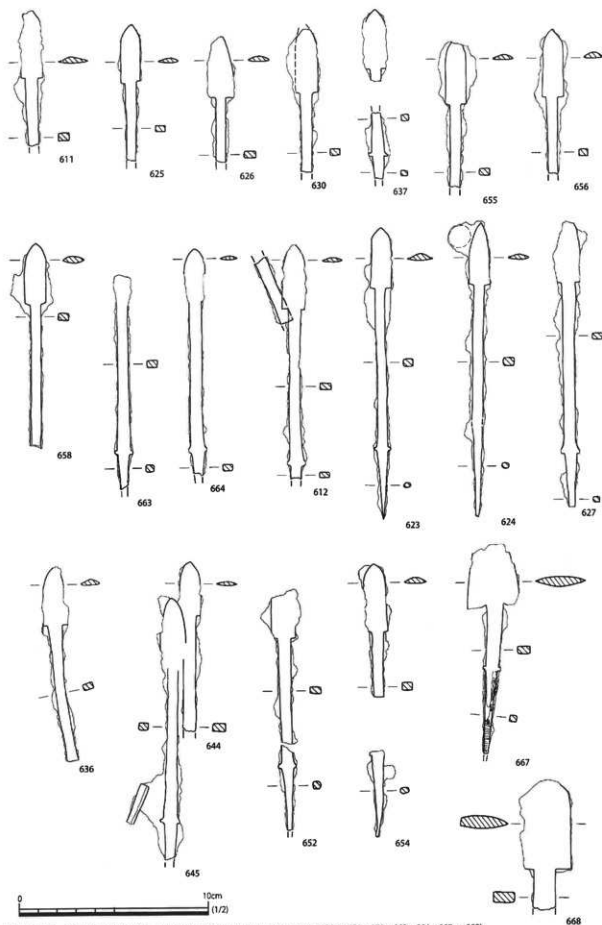
〔鐵〕

鐵は全て鉄製で、鉄錆により形状を把握できないものも多く、実測できたものは90点にすぎない。601～690は、金属製品出土群の内のA群が601～668の68点、C群が669～681の13点、D群が682～684の3点、F群が685～687の3点、G群が688～690の3点で、90点である。

鐵の型式は全て有頸有茎鉄鐵で、実測点数のなかでは柄部が長く鐵身頭部が小さい細根系が77点、鐵身頭部が大きい広根系が11点、不明が2点である。

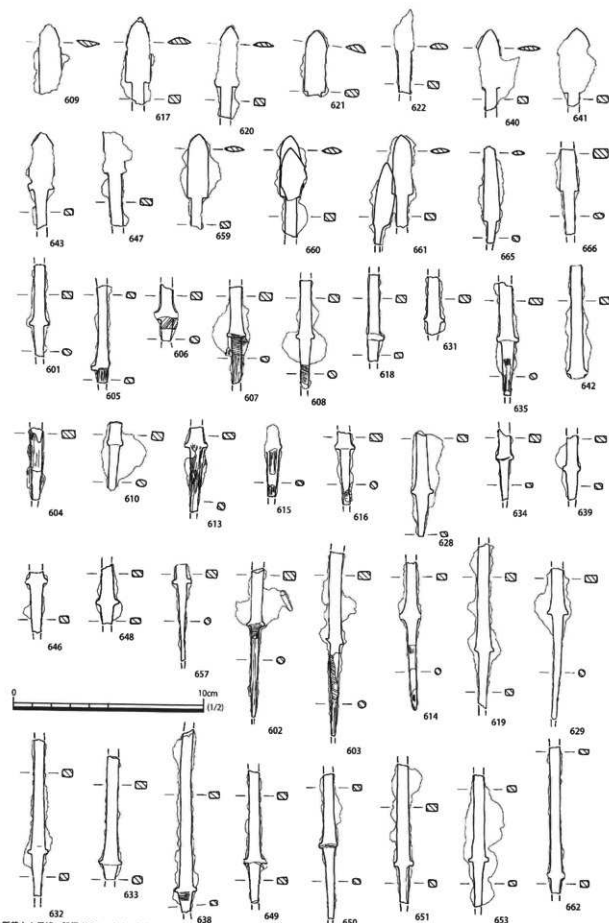
細根系は型式認定できる個体の殆どが柳葉形で34点(611・612・617・620～627・630・636・637・640・641・643・644・646・647・652・654～656・658～661・664・669～671・676・682・688)、腸袂三角形が1点(678)、型式不明が42点である。柳葉形の一般的な形状は、鐵身断面形状は片丸造、関形状は角関、頸部形状は棒状、頸部断面形状は方形・長方形、頸部関形状は棘状関、茎部断面形状は隅丸方形・丸である。ほぼ完存するものは623・624の2点である。623は全長15.25cmで、鐵身部長3.2cm×鐵身部幅1.1cm×鐵身部厚0.4cm、頸部長8.6cm×頸部幅0.5×頸部厚0.4cm、茎部長3.45cmである。624は全長15.45cmで、鐵身部長3.3cm×鐵身部幅1.1cm×鐵身部厚0.3cm、頸部長7.95cm×頸部幅0.55×頸部厚0.4cm、茎部長4.2cmであった。

広根系には腸袂三角形が1点(684)、腸袂長三角形が1点(667)、長三角形が6点(668・679～681・683・689)、型式不明が3点(665・666・690)である。腸袂三角形(684)の形状は、鐵身断面形状は両丸造である。腸袂長三角形(667)の形状は、鐵身断面形状は両丸造、頸部形状は棒状、頸部断面形状は長方形、頸部関形状は棘状関、茎部断面形状は四角である。長三角形の形状は、鐵身断面形状は両丸造、関形状は角関、頸部形状は棒状、頸部断面形状は長方形、頸部関形状は棘状関・角関、茎部断面形状は方形・丸である。完存するものはないが、最も完形品に近い679長三角形は、鐵身先端部を欠くものであるが残存長(10.8)cmで、鐵身部長(4.35)cm×鐵身部幅(2.45)cm×鐵身部厚0.5cm、頸部長2.55cm×頸部幅0.8×頸部厚0.4cm、茎部長3.9cmで、欠損部を復元すると全長(11.5)cm余りと考えられる。



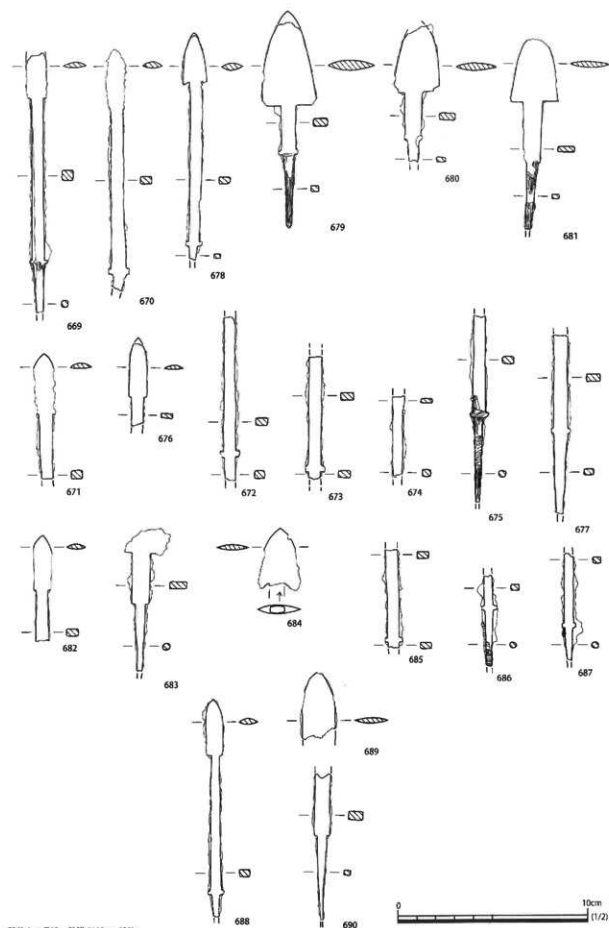
稲荷山1号墳 鉄器 (612・613・623～627・630・636・637・644・645・652・654～656・658・663・664・667～669)

第31-9図 稲荷山1号墳遺物実測図



稲荷山1号墳 鉄器 (601～610・613～622・628・629・631～635・638～643・646～651・653・657・659～662・665・666)

第31-10図 稲荷山1号墳遺物実測図



稻荷山1号墳 鉄鏃 (669～690)

第31-11 図 稻荷山1号墳遺物実測図

これらからも明らかなように、細根系は85%を占め、広根系は12%となり、細根系が主体を占める。逆刺は細根系と広根系を加えても3点(3%)で、角関(直角関)は85点(97%)を占める。他にも鐵身は両丸造が片丸造に、柄との境に作る間は棘状関になる。頸部関形状も角関となり、広根系も角関の長三角形鐵が主となる傾向がみられる。

2) 2次床面

2次床面からは、土製品には轆の羽口、土器には灰釉陶器の碗、壺が、土師器の台付皿、小皿、大皿、金属製品には火打金が出土している。

(1) 土器・土製品

[土製品]

轆の羽口(031)

031は、残存長9.5cm、炉内側の外径6.0cmで口径2.7cm、炉外側の外径7.5cmで口径3.8cm、炉内側口部は高温により溶解し鉄滓が付着するが、完存している。

[灰釉陶器]

碗(041・042)

041は口径12.8cm×器高5.4cmの、碗Aで完形品である。口縁端部の著しい外反は殆どみられず、口唇部のみ丸く僅かに開く。高台は台径6.8cm×高台高1.0cmの付け高台で、内側下半の内彎や外側下方の稜のはりが弱い三日月高台となっている。調整は回転ヨコナデで調整され、回転ヘラケズリは回転ヨコナデに消される。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。二川産とみられる。

042は口径14.5cm×器高5.9cmの、深碗で完形品である。碗Aに比べ体部が深く丸みが強いもので、口縁部は強く外反し、口唇部は水平につまみ出して尖り気味に仕上げる。高台は台径6.5cm×高台高0.9cmの付け高台で、底部外面には回転系切り痕を残し、内側下半の内彎は弱く外側下方の稜は強く、ハの字に開く。調整は回転ヨコナデにより全面調整される。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。二川産とみられる。

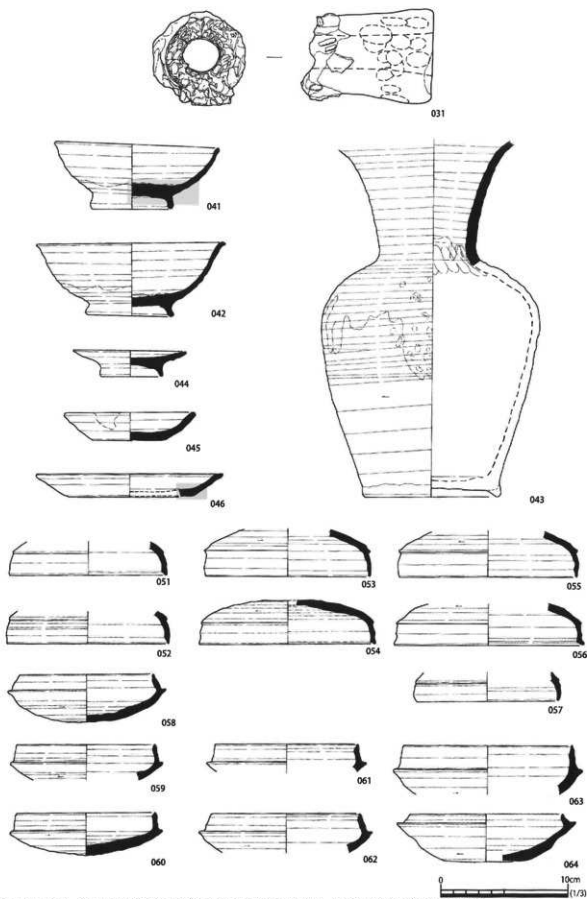
長頸壺(043)

043は口縁部の端部のみを欠くもので、石室内に持ち込まれた時には既に破損していたと考えられる。器高28.3cm以上の、長頸壺である。体部は19cm余りの高さで、膨らみのある最大胴径は体部の1/5余りのところにあって直径17.4cm、丸い肩部を作る。頸部は大きく外反し端部となるが、口縁部を欠く。高台は台径10.6cmの、断面三角形の付け高台で、低く張りのないやや内彎する高台となっている。調整は体部下半部を回転ヘラケズリした後に、回転ヨコナデで調整される。底部は未調整である。灰釉は外側が体部の上半分まで、内側は頸部まで施される。

[土師器]

台付皿(044)

044は口径9.0cm×器高2.1cmの、台付の小皿(托)で完形品である。口縁は直線的に開き、端部を丸くおさめる。高台は台径4.9cm×高台高0.9cmの付け高台で、底部外面には回転系切り痕を残し、



稲荷山1号墳 土師器 鉢 (024)・甕の頸口 (031)・台付皿 (044)・小皿 (045)・大皿 (046)・灰釉陶器 碗 (041・042)・長頸壺 (043)
須恵器 坏蓋 (051～057)・坏身 (058～064)

第31-12図 稲荷山1号墳遺物実測図

内側下半を内彎させ、外側はほぼ真っ直ぐ立ち上がる高台を付ける。調整は回転ヨコナデで調整される、ロクロ調整の皿である。

045は口径10.3cm×器高2.2cmの小皿で、完形品である。器壁は厚く、口縁は緩く内彎しながら、端部は丸くおさめる。底径は5.5cmで、回転系切り痕を残す底部に、内側下半を内彎させ、外側はほぼ真っ直ぐ立ち上がる高台を付ける。調整は回転ヨコナデで調整される、ロクロ調整の皿である。口唇部に灯心痕を残すことから、灯明皿であったと考えられる。

046は口径(14.7)cm×器高1.8cmの大皿で、破片である。系切り痕を残す平で広い底部から、口縁にむかい緩く外傾し、端部にて外反気味にして、口唇部を丸くおさめる。底径は(9.8)cmで、回転系切り痕を残す。調整は回転ヨコナデで調整される、ロクロ調整の皿である。当初から破片であった可能性が高い。

(2) 金属製品

〔火打金〕

540は幅8.3cm×高さ3.1cm×厚さ0.7cmの、山型の鉄製火打金で完形品である。刃部は使用により片刃状に減っているが、形状は良く残る。刃部の長さから、三寸刃と呼ばれるサイズのものである。中央の吊り穴の径は直径0.35cmで、紐ズレが観察される。

3) 墳丘・周溝

墳丘と周溝及び墳丘外から出土した遺物は、土器には須恵器の坏身、坏蓋、短脚無蓋高坏、有蓋高坏蓋、無蓋高坏、提瓶、甌、短頸甌、甕が、灰釉陶器には碗、段皿が、山茶碗には碗、小碗が、土師器には台付皿、小皿が、陶磁器には碗、皿、甕が、石製品には紡錘車がある。

(1) 土器

〔須恵器〕

坏 蓋 (051～057)

坏蓋は051～057までの7点で、全て破片である。

051は口径(12.4)cm、052は口径(12.8)cm、054は口径(13.8)×器高(3.5)cmで、054の天井部は扁平であるが、051・052は天井部に丸みを持ち、稜部は天井部との境に段をなすが、これらは小さく丸みをおびる。口縁部は内彎し、端部を僅かに外反する。口縁内面には内傾する面をもつ。天井部のヘラケズリの範囲は054では2/3と広い。051には逆位焼成痕がみられる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

053は口径(13.0)cm、055は口径(14.0)cmで、天井部は傾きが大きく高いようで、稜部は段をなすが、丸みをおびる。口縁部は内彎しながら垂下し、端部は丸く収める。口縁内面には凹面をもつが、大きな段とはならない。器壁は概して薄い。猿投窯系と推定される。

056は口径(14.8)cmで、上部にはヨコナデ調整が行われ、稜部は段をなすが、小さく丸い。口縁部は真下に下がりく字に外側に屈曲し、口縁内面に内傾する面を作る。藤原1号墳(田原市中山町)に類似がある。逆位焼成痕がみられることから、湖西窯を含めた在地産と推定される。

057は口径(11.2)cmで、口径は小さく、内彎する口縁部外面に凹線をもつ。端部は丸く仕上げる。

坏身(058～064)

坏身は058～064までの7点で、全て破片である。

058は口径(10.6)cm×器高3.8cm、059は口径(11.0)cm、060は口径11.0×器高3.4cm、061は口径(11.2)cm、062は口径(11.6)cmで、底部は扁平で丸みが無く、受部は水平に引き出される。口縁部は060では真っ直ぐに立ち、059～062では内傾するもので、何れも端部内面に内傾する面をもつ。器壁はどれも厚い。底部の回転ヘラケズリの範囲は、2/3～全てに及ぶ。059・060には逆位焼成痕がみられる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

063は口径13.3cmで、受部は彎曲する底部から水平に作る。口縁部立ち上がりは真っ直ぐ高く上に伸び、端部を尖らせる。器壁は口縁部まで全体に厚く大形品である。産地は不明である。

064は口径(12.0)×器高(3.7)cmで、底部は平で厚く、受部は底部との境に強いヨコナデを行って水平に作る。口縁部はやや外反しながら僅かに立ち上がり、端部は丸く作る。底部の回転ヘラケズリの範囲は、1/2余りである。湖西窯を含めた在地産と推定される。

高坏(065～072)

有蓋高坏の蓋が2点、短脚無蓋高坏の脚部が4点で、無蓋高坏の坏部が2点の8点である。

065と066は、有蓋高坏の蓋と考えられるもので、坏の回転ヘラケズリされた器壁の厚い天井部上に、ボタン状の中央が凹む鈕を付ける。鈕の径は、065が3.6cm、066が3.2cmである。湖西窯を含めた在地産と推定される。

067は脚径(10.0)cm、068は脚径(10.2)cmで、068については不明であるが、脚部に透かしのない短脚無蓋高坏である。脚部は円柱部から裾広がりに広がり、その端部に下に垂下し外彎する端面を作る。

069は脚径(10.0)cm×脚高(6.0)cm、070は脚径(8.0)cm×脚高(5.8)cmで、脚部に透かしのない、短脚無蓋高坏である。脚部は円柱部から裾広がりに広がり、一段の段部を作り、端部内面は僅かに内彎させ、端部外面に三角形の外傾斜させた端部を作る。070の作りは小さいが鋭く、069はなだらかである。湖西窯を含めた在地産と推定される。

071は口径(11.9)cm×坏部高(3.2)cm、072は口径(14.4)cm×坏部高(5.4)cmで、無蓋高坏の坏部である。071は彎曲する坏部の端部を尖り気味にするもので、072は坏部外面に一段の段を設け口縁部に至り、端部内面に内傾する幅の広い面を作るものである。器壁は何れも厚い。湖西窯を含めた在地産と推定される。

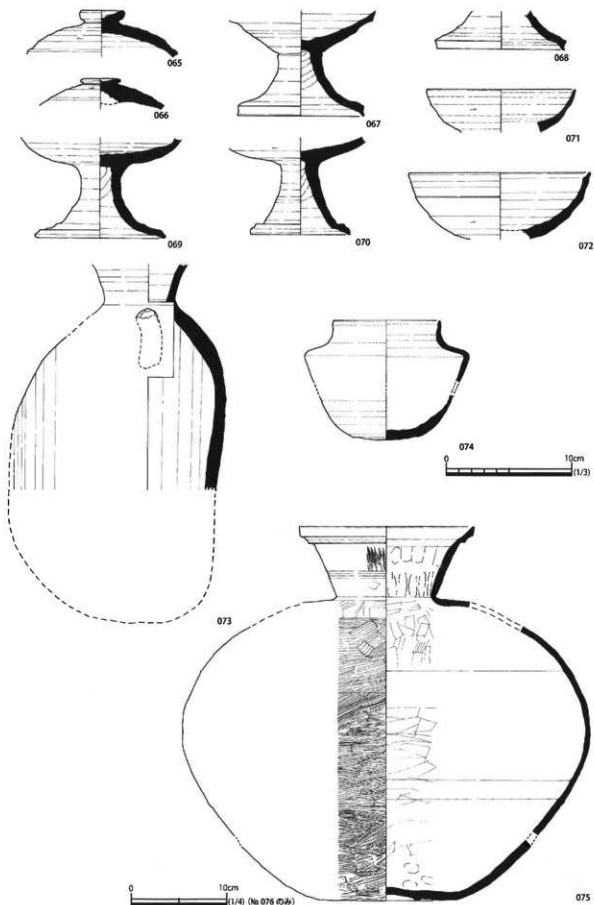
提瓶(073)

提瓶は1点である。

073は口縁部や胴部の多くを欠くものであるが、耳付大形提瓶である。ハの字に開く頸部に、片側が平坦で、片側が丸みをもった円形の体部が取り付け、環状の耳が2個取り付くとみられる。復元される長さは30cm以上である。湖西窯を含めた在地産と推定される。

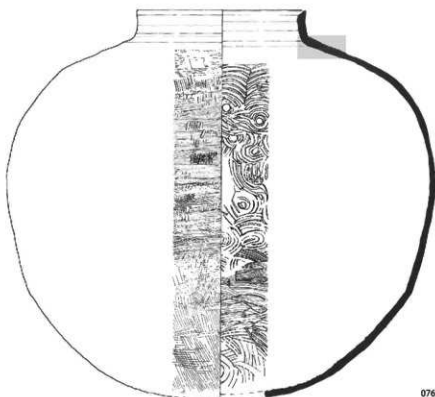
短頸壺(074)

074は口径(8.2)cm×高さ(9.5)cmで、蓋付かは分からない。肩の張る体部の底をヘラケズリしてやや平らな丸底とし、直立する口縁部の先端部を僅かに内側に曲げて、尖り気味の端部を作る。口

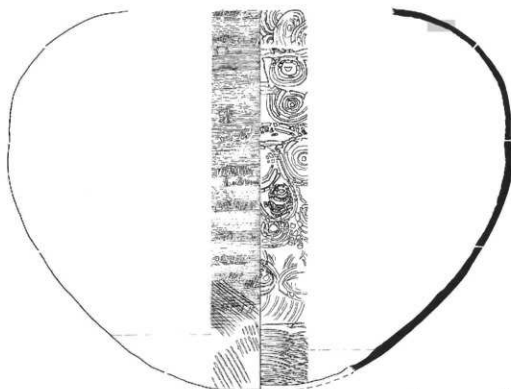


稲荷山1号墳 須恵焼 有蓋低脚高坏の蓋 (065・066)・低脚無蓋高坏 (067～070)・無蓋高坏 (071・072)・提瓶 (073)・短頸甕 (074)・甕 (075)

第31-13図 遺物実測図



076

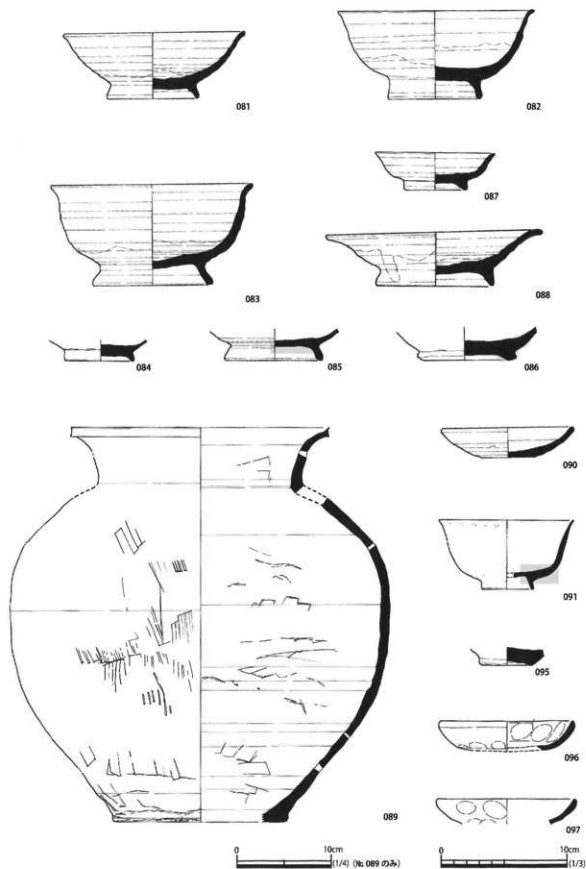


077

0 10cm (1/4)

稲荷山1号墳 須恵器 甕 (076・077)

第31-14図 遺物実測図



福岡山1号墳 灰釉陶器 碗(081~085)・小碗(087)・段皿(088)・山茶碗 碗(086)・陶器 広口壺(089)・鉄軸小皿(090)・磁器 曜変染付碗(091)
土師焼 谷付皿(095)・小皿(096・097)

第31-15図 遺物実測図

縁内側に凹線が1条巡る。器壁は比較的薄く、底部のみ回転ヘラケズリとし、他を回転ヨコナデとする。生産地は不明であるが、猿投窯と推定される。

甕 (075 ~ 077)

甕は3点、出土している。

075は口径(18.8)cm×器高(40.0)cm×最大胴径(43.0)cmで、墳丘東側での祭祀による破砕により126破片以上を接合したが、不足する部分が多い。体部は胴の中央部の少し上に最大胴径があり、焼け歪みがひどく現状では底部が自重で凹んでいるが、当初は緩く丸い尖り気味の丸底を作っていたものとみられる。体部上半に3条の沈線を施す。口縁部は口径(18.8)cm×高(7.6)cm×頸部径(10.4)cmで、頸部に2条の沈線が巡り、口縁部は三角形の段を設けて、端部に垂直な面を作る。沈線と段との間には、幅の狭いやや斜めの波状文を施す。口縁内面は内彎し、頸部に緩やかに外傾する。器壁は薄く、極めて丁寧な作りである。外面調整は平行条の叩きを、内面は青海波文の当て具痕を、板ナデと丁寧なナデにより消している。口縁部内面は丁寧なナデ調整をする。底部には1cm余りの焼き台7個の痕跡が残る。猿投窯系と推定される。

076は口径(17.8)cm×器高(41.4)cm×最大胴径(45.6)cmで、直口口縁の甕である。077と共に墳丘南側での祭祀に使用された甕である。体部は球形で、下半の1/3余りのところに明確な接合痕がみられる。口縁部は口径(17.8)cm×高2.7cm×頸部径(18.4)cmで、真っ直ぐ短く立ち上がって、内面に内傾する面を作る。外面調整は平行条の叩きの後を、櫛搔とする。内面は青海波文の当て具痕を残し、口縁内面は横ナデとする。

077は残存器高(41.0)cm×最大胴径(53.2)cmで、口縁部を欠く。076と共に墳丘南側での祭祀に使用された1号墳最大の甕である。体部は胴上部に最大径のあるものである。外面調整は平行条の叩きの後を、櫛搔とする。内面は青海波文の当て具痕を残す。

【灰釉陶器】

碗 (081 ~ 083)

081は口径14.2cm×器高5.3cmの、碗Aで、ほぼ完形品である。口縁端部をやや外反させ、口唇部を丸く仕上げる。高台は台径7.1cm×高台高0.8cmの付け高台で、内側下半の内彎や外側下方の稜のはりが弱い三日月高台となっている。調整は回転ヨコナデで調整され、回転ヘラケズリは回転ヨコナデ調整により消される。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。二川産とみられる。

082は口径15.4cm×器高7.0cmの、深碗で、ほぼ完形品である。体部は深く、丸みが強いもので、口縁部は強く外反し、口唇部は水平につまみ出して尖り気味に仕上げる。口縁部外面下半の器壁を薄めるくらい強いヨコナデは、稲荷山北東中腹の福田第1古窯に類例をみることができる。高台は台径7.2cm×高台高1.5cmの付け高台で、底部外面には回転系切り痕を残し、内側下半の内彎は弱く外側下方の稜も弱く、ハの字に高く開いて端部を丸く仕上げる。調整は回転ヨコナデにより全面調整される。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。福田1号窯産とみられる。

083は口径(15.7)cm×器高8.0cmの、深碗である。体部は深く、丸みが強いもので、口縁部は強く

外反し、口唇部は上方につまみ出し丸く仕上げる。高台は台径(8.9)cm×高台高1.5cmの付け高台で、底部外面には回転糸切り痕を残し、ハの字に高く裾広がりに開いて、端部を丸く仕上げる。調整は回転ヨコナデにより全面調整される。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。二川産とみられる。

084は碗Aの底部破片である。高台は台径5.2cm×高台高0.4cmの付け高台で、底部外面には回転糸切り痕を残し、はりが弱い三日月高台を付ける。底部は器壁が厚いが、体部の器壁は薄い。調整は回転ヨコナデにより調整される。二川産とみられる。

085は碗の底部破片である。高台は台径(7.6)cm×高台高1.1cmの付け高台で、底部外面には回転糸切り痕を残し、082同様の高く裾広がりに開いて、端部を丸く仕上げる。底部体部共に器壁は薄い。調整は回転ヨコナデにより調整される。二川産とみられる。

段 皿(088)

088は口径12.4cm×器高3.3cmの、広縁段皿で、ほぼ完形品である。器壁は薄く、緩やかに立ち上がる体部の内面には明瞭な段が作られ、口縁端部で外反する。高台は台径6.6cm×高台高0.7cmの付け高台で、底部外面には回転糸切り痕を残し、三日月高台を付ける。灰釉は漬け掛けで、体部の内外面に施され、見込みや外底部には施されない。二川産とみられる。

〔山茶碗〕

碗(086)

086は碗の底部破片である。高台は台径6.5cm×高台高0.4cmで、底部外面には回転糸切り痕を残し、低いハの字高台を付ける。器壁は厚い。調整は回転ヨコナデにより調整される。渥美・湖西産とみられる。

小 碗(087)

087は口径9.5cm×器高3.0cmの、小碗(山皿)で完形品である。体部は平らな見込みから立ち上がり、口縁部は緩く外反する。高台は台径4.8cm×高台高0.5cmの付け高台で、底部外面には回転糸切り痕を残し、三日月高台を付ける。調整は回転ヨコナデにより調整される。渥美・湖西産とみられる。

〔陶磁器〕

広口壺(089)

089は口径(27.4)cm×器高(42.0)cm×底径(18.0)cmの広口壺である。体部は最大胴径(40.5)cmで、体部の2/5余りのところにあり、球形に近い感じを受ける。口縁部は、強く外反して上下に撥形に開いて平らな面を作る。調整は口縁部は全てヨコナデ調整とし、体部外面が平行条の叩きを行った後に板ナデとナデにより、体部内面は円形の当て具痕跡を全て消す程度に丁寧に板ナデを行う。無釉である。底部外面は、未調整とする。三筋壺や広口瓶の口縁と体部を持つもので、類似するものに仁平4年(1154)白山神社経塚出土外容器(東京都八王子市)等がある。常滑産とみられる。

皿(090)

090は口径(10.2)cm×器高(2.3)cm×底径(4.2)cmで、陶器の鉄軸小皿である。体部は緩やかに内彎しながら端部を丸く収め、外面下半を回転ヘラケズリとする。施釉は内面と外面上部上半に、鉄釉をかける。瀬戸美濃産とみられる。

碗 (091)

091 は口径 (10.7)cm × 器高 5.5cm × 台径 4.1cm で、磁器の端反染付碗である。体部は緩やかに端部で外反する。高台は底部器壁まで削り込む。染付は、内面が口縁下に 3 圈線、見込みに 1 圈線と花紋、外面が口縁に 1 圈線、縦に染付軸 2 本 + 緑色釉 1 本の単位を繰り返して描き、底部近くに 3 圈線と花紋を配す。高台畳付は軸剥ぎとする。瀬戸美濃産とみられる。

〔土師器〕

皿 (095 ~ 097)

095 は台径 4.0cm で、台付皿又は碗と考えられる。厚い底部に低い付け高台を行うもの。内外面ともにナデ調整である。

096 は口径 (10.6)cm × 器高 (2.3)cm、097 は口径 (10.8)cm × 器高 (1.1)cm 以上の土師器の小皿で、096 は完形に復元される。成形は指押さえで、調整は指ナデにて行う、非ロクロ成形土師器である。

(2) 石製品

〔紡錘車〕

紡錘車が 1 点出土している。

110 は下端径 3.5cm × 上端径 2.0cm × 高さ 1.5cm で、軸径 0.6cm の滑石製紡錘車の 1 / 2 破片である。底面には内向きの鋸歯紋が 4 個と圈線 1 条が、鋭い刃先で陰刻されている。鋸歯紋は復元すると、当初 6 個であったと考えられる。現況の重さは (11.9) g である。紡錘車が古墳から出る例は、近くでは姫塚古墳 (豊橋市石巻西川町) において、碧玉製のものが 1 点出土している。具体的な使用例は不明であるが、注意される遺物である。